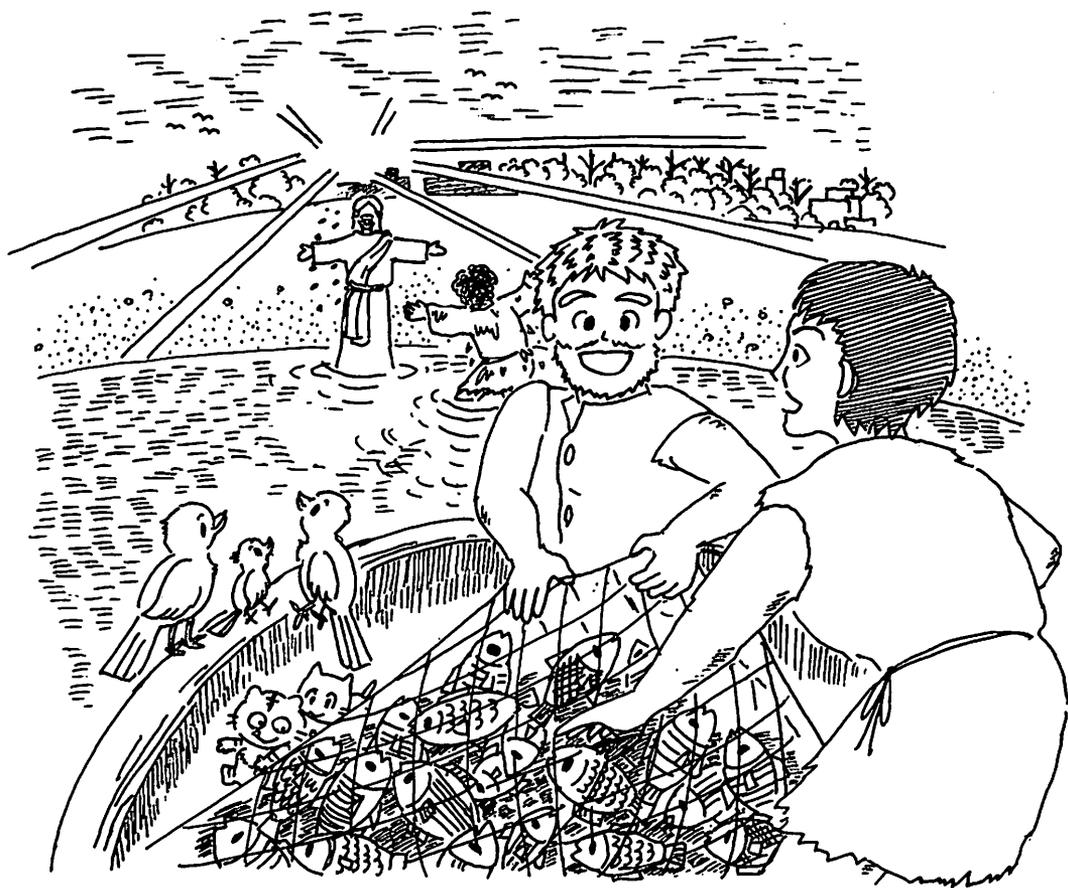


教会学校教案誌

No.16
2005.1.2.3月号



日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会

日曜学校 2004年度カリキュラム (2005年1～3月分)

—『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
1月2日 新年	預言者イエス	問25	ジュ39, 44、ハイ31、大43、小24
		マタイ7: 24-29	ヤコブ1: 22
聖書・教会・礼拝で語り続けておられるキリストを土台として生きよう			
9日	大祭司イエス	問26	ジュ38, 43、ハイ31、大44、小25
		ヨハネ17: 6-19	ルカ22: 31, 32
主イエスは子どものために執り成し続けておられる。執り成しの恵みに立とう			
16日	真の王イエス	問27	ジュ37, 42、ハイ31、大45、小26
		ルカ19: 28-40	マルコ10: 45
十字架のキリストこそが勝利の王、王の王である。この主に従う喜びに生きよう			
23日	恵みのみ	問28	ハイ60, 61
		ルカ18: 15-17	ルカ18: 17
救いは徹底して神の恵み。小さな者・子どもに神の恵みが現れることを知ろう			
30日	選びと有効召命	問29	ハイ21、大59、小20, 29, 31, 85
		ルカ18: 18-30	ローマ10: 12, 13
選びにより、子どもたち皆が神のもとに招かれている。恵みの神を知ろう			
2月6日 (信教の自由)	キリストとの結合	問30	ウ小29, 30、ハイ53, 65
		ヨハネ15: 1-10	ヨハネ15: 5
聖霊によりキリストに結ばれ、キリストとの強い絆のうちに歩もう			
13日 レント	罪の赦しと義認	問31	ウ小33、ハイ56
		ルカ18: 9-14	ローマ3: 23, 24
神によって義とせられ、罪赦される喜び、打ち砕かれることの祝福に生きよう			
20日 レント	神の子とされる	問31	ウ小34、ハイ59
		ローマ8: 12-17	イザヤ43: 4
神の子とされる霊を受けている者として、神を「父よ」と呼ぶ祝福に生きよう			
27日 レント	聖化の恵み	問32, 33	ウ小35, 36
		ヨハネ13: 1-11	ヨハネ13: 1
主イエスの洗足・十字架の恵みによって、まったく聖とされている祝福を喜ぼう			
3月6日 レント	愛の歩み	問32, 33	ウ小35, 36、ハイ60, 61
		ヨハネ13: 12-20	ヨハネ13: 14
御子イエスの姿に似せられて、感謝と喜びをもって互いに仕え合おう			
13日 レント	キリストの苦難	—	子どもカテキズム27
		ヨハネ18: 1-11	ヨハネ18: 9
へりくだって苦難を引き受けられたキリストを仰いで、自らの罪を知ろう			
20日 受難週主日	十字架のキリスト	—	子どもカテキズム24
		ヨハネ19: 28-37	ガラテヤ3: 13
神の御心の成就であるキリストの十字架を仰いで、神の恵みに感謝しよう			
27日 復活祭	復活のキリスト	—	子どもカテキズム24
		ヨハネ21: 1-14	ヨハネ11: 25
復活の主イエスが弟子たちに御自身の姿をお示しくださった喜びを味わおう			

も く じ

2005年1・2・3月分カリキュラム		
まえがき	三川栄二 ... 4	
巻頭説教「信仰の継承」	辻 幸宏 ... 5	
日曜学校・教会学校訪問		
千里摂理教会教会学校の紹介	8	
講演録「日曜学校教師に求められること ～子どもへの牧会の視点から～」(三)		加藤常昭... 11
自由献金のお願い	22	
聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例		23
1月2日	24	
1月9日	32	
1月16日	40	
1月23日	48	
1月30日	56	
2月6日	64	
2月13日	72	
2月20日	80	
2月27日	88	
3月6日	96	
3月13日	104	
3月20日	111	
3月27日	118	
成人科		
「創立20周年記念宣言と今日的意義」(三)	牧田吉和... 125	
2005年4・5・6月分カリキュラム	136	
2005年度年間カリキュラム	137	
編集後記	139	

まえがき

三川栄二（稲毛海岸教会牧師）

高校一年の時に教会学校教師になってから、もう30年近くが経ちました。その間、なんと挫折し、なんどやめようと思ったか分かりません。自分は教師に向いていないのではないか、教師の賜物はないのではないかと思ひ悩み、一向にうまくできない説教と分級を前に、途方に暮れてしまうこと、しばしばでした。これまでやってこれたのは、ただ主の憐れみと支えによってでした。わたしと同じように、来週の奉仕のことで心悩み、重い心を抱いて悶々と悩んでいる教師がおられたら、一緒にこの主の約束の言葉に聞いてみましょう。

「また荒れ野でも、あなたがたがこの所に来るまでたどった旅の間中も、あなたの神、主は父が子を背負うように、あなたを背負ってくださった」（申命記1章31節）。まだ福岡で開拓伝道をしていた頃、子どもが小さかったので近くに遊びに出掛けることがありました。出がけは「早く、早く」とせがむ子どもですが、ひとしきり遊んだ帰りはもうすっかり疲れてしまって、「だっこ、だっこ」とせがみます。こちらも疲れているのに、子どもを背負って帰りました。眠った子どもの重いこと！ そのときの体の感触を今でも思い出します。この御言葉は、出エジプトしたイスラエルが、荒れ野で40年も放浪した後、やっと約束の地に赴くところで、モーセがこれまでの旅を振り返って述べた言葉でした。神は、わたしたちをずっと背負い続けて、ここ

まで連れて来てくださったのだと。その間、何度も苦しいことがありました。何度も投げ出したくなることがありました。しかし振り返って見たら、自分一人が苦しみ悩んでいたわけではない、そうやって苦しむわたしたちを、主はずっと背負い続けてきてくださったのだと、モーセは知ったのです。誰も自分のことを分かってくれないと、深い孤独を感じながら、もう一步も歩けないとくずおれてしまったとき、そこにちゃんと主はいて、傍らに共にいてくださった、そればかりか、その自分をしっかりと背負って、その苦しみと悩みの道を通り過ごさせてくださった、そう理解したのです。

だからモーセは最後に賛美を捧げました。「驚が、雛の上を飛びかけり、羽を広げて捕らえ、翼に乗せて運ぶように」わたしたちを守り続け、背負い続けてくださったと（申命記32章11節）。わたしたちが苦しんだり、悩んでいたりと、兄弟姉妹や友人はわたしたちに「頑張れ」と励ましてくれます。それが励ましになることもありますが、時には重荷になることもあります。これまで精一杯頑張ってきた、これ以上もう頑張れない、そう思うことがあるのです。わたしたちの主は、わたしたちに「頑張れ」とは言われません。むしろこう言ってくださるのです。「なぜ一人でそんなに頑張るのか、わたしが一緒ではないか」と。一人頑張るあなたに、主はそう約束してくださるのです。

「信仰の継承」

—出エジプト記12章21～28節による説教—

辻 幸宏（大垣伝道所協力牧師）

モーセは、イスラエルの長老をすべて呼び寄せ、彼らに命じた。

「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。そして、一束のヒソブを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。翌朝までだれも家の入り口から出てはならない。主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二本の柱に塗られた血を御覧になって、その入り口を過ぎ越される。滅ぼす者が家に入って、あなたたちを撃つことがないためである。

あなたたちはこのことを、あなたと子孫のための定めとして、永遠に守らねばならない。また、主が約束されたとおりあなたたちに与えられる土地に入ったとき、この儀式を守らねばならない。また、あなたたちの子供が、『この儀式にはどういう意味があるのですか』と尋ねるときは、こう答えなさい。『これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』と。」

民はひれ伏して礼拝した。それから、イスラエルの人々は帰って行き、主がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。

（出エジプト記12章21～28節）

今年も1月17日を迎えます。あの神戸の大震災からちょうど10年です。私は、神戸で生まれ育ち、そして当時も神学生として神戸にいました。その街が地震で壊滅状態に陥り、その後まったく新しい街へと生まれ変わりました。あの時の衝撃と苦しみを今も忘れることは出来ません。あれだけ多くの人々の命が奪われた中、主は私を生かして下さいました。そして今なお日々の命をお与え下さっています。この思いは、各地で地震が発生する度に、思い出されます。

しかしながら、10年という年月は、人の心を風化させていきます。少し前までは「十年一昔」と語られていましたが、現在では「五年一昔」と呼ばれているのではないのでしょうか。時代の変化は激しく、自らの肌で味わった体験ですら、風化し、今では、日々の生活の中では、何もな

かったごとく忘れていたのも事実です。

このように時代の移り変わりが早くなり、過去にあった喜びも悲しみ・苦しみも、忘れてしまうことが早くなっているのかも知れません。そこには、様々な要因が考えられるでしょう。パソコンやインターネットが普及し、世界中の情報がすぐに手に入るようになったこともその一因でしょう。また、今後の不安が叫ばれる中であっても、多くの人々は、生活上に必要なものが事足りているばかりか、欲しいと思うものはすぐに手に入る環境にあることもあります。そうしたことから、一つの物事に対する思い入れが薄くなり、次から次へと新しいものを求め、古いものが忘れ去られていくのです。またアフガニスタンやイラク、パレスチナなどで繰り返

し戦闘が行われながらも、劇場化された報道のため、ゲーム感覚にしか映らず、自らの命の尊さを知ることも出来ず、今報道されたことすら聞き流してしまう状況にあります。その他にも様々な要因はあるでしょう。

そうした中、私たちに与えられている恵みとしての信仰を、いかに自らが保ち続け、さらに後の世代に継承しかかを、私たちは考えていかなければなりません。

イスラエルは、430年間（出エジプト12:40）、エジプトに滞在しました。そして、ヨセフの功績が忘れ去られた時代になると、イスラエルの人々は、奴隷として、強制的に重労働が課せられていきました（同1:10-11）。そしていつしか、イスラエルの人々にとっては、このことが当然の運命であり、そこから救い出されることなどないと思うようになっていたのです。それは裏をかえせば、主なる神様がアブラハムに語られた約束を忘れていたことを意味します。つまりイスラエルの民が忘れていたことは、「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。」（創世記15:13-14）と語られていた主の命令です。

しかしながら主なる神様は、500年近く前の約束を忘れられることなく、イスラエルにモーセをお立て下さいました（出エジプト3章）。そしてモーセを通して、エジプトとファラオに対して、九つの災いをおこない、さらに最後の災い、つまりエジプトの全ての初子が死を遂げようとするまさにこの時、イスラエルをエジプトから救い出して下さろうとしているのです。主は、この時、主がイスラエルの家に災いをもたられないように、イスラエルに対して、過越の犠牲と諸儀式を行うように求められました（出

ジプト12:7-11)。そしてイスラエルはこの時、奴隷から解放され、約束の地カナンに向かって歩み始めていくこととなります。イスラエルの民にとって、忘れることの出来ない喜びであったはずで、主が共におられ、主は、お働きになられ、約束を忘れることなく果たして下さるお方であることが、イスラエルにははっきりと示されたのです。

そして当時の人々にとっては、一生忘れることの出来ないような大きな出来事を、忘れないように、そして同時に後々の子孫たちも語り継ぎ、受け継ぐものとして、過越の祭りを、毎年毎年、祝うように、主はお求めになられたのです（12:24-25）。それは、あの感動、あの喜びを忘れたとしても、日常生活の中では見ることのないようなしるしである鴨居と入り口の柱の鉢に塗られた血を見ることにより、鮮明に、神様がイスラエルをエジプトから救って下さったことを思い起こすことが出来るようにして下さい、神様の愛から出てきた祭りの定めだったのです。

しかし儀式を守るだけでは、その形だけが残るのであり、主がお与え下さった救いの恵みは忘れ去られます。そして、形だけ守られる儀式には、主が救って下さった喜びも感謝もなくなっていくのです。つまり、それと同時に、主なる神様に対する信仰も忘れ去られ、また捨て去られていくのです。

だからこそ、主は、「また、あなたたちの子供が、『この儀式にはどういう意味があるのですか』と尋ねるときは、こう答えなさい。『これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』と」（12:26-27a）語られ、人々の中に起こる風化・世代が変化することによって起こる形式

化に対して、警鐘を鳴らしておられるのです。

主がお語り下さった約束も、主がお与え下さった救いの恵みも、時代が経ち、世代が交代してことによって、忘れ去られていくのです。そして信仰もまた、忘れ去られていくのです。私たちはまさにその最中に立たされているのです。日本キリスト改革派教会は、戦後1946年4月に創立して以来、来年で60年を迎えます。創立当初の牧師や信徒たちは、まさに信仰の戦いを戦って来られ、そこから教会を立て上げて行かれました。そして創立20年（1966年）位までに信仰を持たれた方々は、その信仰の戦いを常に教えられ、そして自らも戦争が終え、主がお与え下さった平和の恵みを感じつつ、信仰を持たれ、また信仰の養いを受けてきたことでしょう。

しかし創立60年が経とうとしている現在、それらの方々が神様の御許に呼び集められ、また一線からの引退の時期を迎え、世代が受け継がれていこうとしています。正直言いまして、改革派教会全体を見渡した時、教会の活力は、以前に比べれば、低下しています。時代の流れ、豊かさの最中で、本当に救いを求めなくても生きていける時代に、教会が翻弄されていることもあります。しかし、それと同時に、私たちの教会自身の持っている問題とし、過去に与えられた恵みが、繰り返し繰り返し語り継がれるこ

となく、本当に主がお与え下さった救いと恵みの喜びと祝福が忘れ去られていることに対して、危機感を覚えなければなりません。

私たちにはすでに、神様から与えられてきた多くの恵みの財産を受け継いでいます。①神の御言葉である聖書、特にキリストの十字架の御業。②宗教改革の戦いの中、勝ち取られた信条としてのウェストミンスター信条。③日本キリスト改革派教会の創立の精神が込められている創立宣言と各宣言文書。私たちは、これらの財産を受け継いでいるのです。形式主義に陥ってはいけません。これらの文書が与えられた時の背景から、精神・魂・心・思いを学び、心を熱くして、引き継いで行かなければなりません。

だからこそ、時代が変わり、世代が引き継がれていこうとしている今、私たちは改めて、①キリストが十字架においてお与え下さった救いを、②宗教改革の中、宗教戦争を行っている最中与えられたウェストミンスター信条を、③そして私たちの教会の心が込められている創立宣言と20周年宣言を、歴史的に、神学的に、そしてそこに込められている魂と思いを、私たち自身が覚え、それらの心を受け継ぎ、繰り返し繰り返し教え、受け継いで行かなければなりません。

千里摂理教会教会学校の紹介

千里摂理教会教会学校教師会

1. 千里摂理教会と教会学校

千里摂理教会は大阪北摂の千里ニュータウンでの開拓伝道からその歩みが始められ1972年に教会設立がゆるされました。その後15年間は教会堂を持つことなく、ニュータウン内の集会所を借りて礼拝を守っていましたが、多くの子どもたちが教会学校(土曜学校)に集い、地域に根付いてきました。そして1987年に現在の地に念願の教会堂が建築され今日に至っております。最寄りの阪急山田駅から徒歩で7～8分の住宅街にあり、また緑豊かな万博公園にも近く、環境に恵まれています。この地域で主の教会を建てあげ、主の福音を伝えることを祈り願う教会として歩んでいます。現注册会员は70名～80名を推移し、礼拝出席は毎回50数名といったところです。

教会学校は成人クラスと子どものクラスがあり、教師数は神戸改革派神学校の派遣神学生を含め現在5名となっています。成人クラスは9時45分から、また子どものクラスは9時30分より行われます。以下子どもの教会学校について紹介させていただきます。



礼拝

2. 礼拝(9:30～10:00)

式順は、①奏楽・黙祷②賛美③はじめのお祈り④主の祈り⑤聖句朗読⑥十戒朗読⑦メッセージ⑧賛美⑨献金・お祈り⑩報告、となっています。

礼拝前の9時15分から奉仕前祈祷と報告・打ち合わせの時間が持たれ、教師たちは整えられ礼拝奉仕へと送り出されます。メッセージ・司会は教師が輪番制で担当します。2002年度より中部中会発行の『教会学校教案誌』を使用しています。担当教師は聖霊の導きと力に支えられながらメッセージを語らせていただいています。賛美は『こどもさんびか』に加えて新しい賛美も取り入れています。献金当番と感謝の祈りは子どもたちが毎週順番で行います。礼拝出席はここ2、3年は10数名でしたが、今年の4月以降少し減少傾向となっています。中学、高校生のクラブ活動や勉強の忙しさなどが背景にあると思いますが、教師たちは教会から子どもたちが離れることがないように祈っています。また期間(上半期、下半期)と年間の皆勤・精勤賞を設けています。



精勤表彰

3. 分級(10:00～10:20)

礼拝後に幼稚科、小学生科、中学・高校生生科の三つのクラスに分かれ分級がもたれます。礼拝でのメッセージ箇所に関連する子どもカテ

キズムと聖書に導かれたテキストのもと、教師子ども共々学びを深めています。子どもたちからの素朴な質問も語られます。第五週の分級はお休みして合同賛美集会の時をもっています。



小学校分級の様子

4. 教師会

第一聖日の午後に定例教師会を開いています。子どもたちの出席状況や近況が語られ、長期欠席の子どもたちに対してお手紙や誕生日カード、行事の案内送付の打ち合わせなども行います。また礼拝・分級の奉仕分担、聖句や賛美箇所決定、行事の企画を行い、また学びの場として豊に用いられています。

5. おもな行事

1) 進級式(4月)

三階礼拝堂で進級式が行われます。子どもたち向けの短い牧師のメッセージの後、生徒、教師の紹介がなされます。また新入学の生徒にはプレゼントが手渡され、子どもたちは少し緊張気味ですが、大人は子どもたちの成長を実感し、



進級式での中学生

教会全体で子どもたちの成長を喜ぶ時となっています。

2) ピクニック(春・秋)

季節の良い4月と10月に近くの万博公園などにピクニックに出かけます。近隣の千里山教会との合同のピクニックも恒例化し、時にはバーベキューなども楽しんでいます。生徒のお友だちも時々参加してくれます。



万博公園にて



バーベキューを楽しむ

3) イースター

主の復活を祝い分級では卵を使ったクラフトが毎年子どもたちの人気となっています。

4) 合同夏期学校

神戸六甲で行われる西部中会主催の合同夏期学校(小学生対象)に毎年参加しています。他教会の子どもたちとの交流の機会や場として子どもたちは喜んで参加しています。

5) 夏のお楽しみ、お泊まり会

8月の終わりの聖日に行われます。みんなと

教会で泊まりたいという子どもの意見があり始められました。午後から、プール、ボーリングなどで体を動かし、夜はバーベキュー、花火、ゲームなどで盛り上がります。夜遅くまで楽しい交わりができ親しい関係を築く場となります。また新しいお友たちや長期欠席の子どもを教会へと導く良い機会にもなっています。



ボーリング大会

6) クリスマス会

「ほんとうのクリスマス子どもたちに知らせたい。この時を伝道の良き機会としてとらえイエス様のお誕生を心から喜び祝いたい」という思いで子どもクリスマス会が行われています。案内・チラシの郵送、手渡しを行い、毎年多くの子どもたちが集っています。近隣の新しいお友だちもご父兄といっしょに参加していただき、



聖劇

にぎやかなクリスマス会となっています。内容は、キャンドル礼拝、ビデオ上映、劇、ゲーム、プレゼント、オヤツタイムなどで構成されています。

劇の練習は分級の時間を使い配役、セリフ合わせ、演技指導などからなりあわただしくも楽



しい時です。

6. 課題

教師が不足しているということがあげられます。様々な事情で教師が減少していき、新しい教師が与えられることを切に願っております。しかし、ここ数年、派遣神学生が熱心に奉仕してくださっています。ほんとうに感謝です。また中学生、高校生といった思春期の子どもが増えています。難しい年代のこの若者たちをいかに信仰へと導くことができるのか。分級のあり方を含め課題として取り組む必要があります。主からの知恵と導きを祈り求めています。



クリスマスの集合写真

「日曜学校教師に求められること ～子どもへの牧会の視点から～」(三)

加藤常昭(神学者)

〈質疑応答〉

Q. 「われわれの外にわれわれを置く」というお話をしてくださいましたが、まだよく理解できませんでしたので、もう一度お聞きしたいのです。

A. おっしゃる通りで、私も話しながら後で質問が出そうだなと思っていました。それは神学生と話をした時にも、なかなか神学生がよく理解しなかったことなのです。もしかするとこれはただ言葉の問題ではなくて、われわれの心の動きの問題で、自分を自分の外に置くということが、どのようなところの動きなのか、びんと来ないということだと思のですが、そうなる、こんなふうを考えてくださってもいいと思います。

あるところで、東京神学大学の学生と、こんな話をしました。私がこう言ったのです。結局自分のことしか考えていない人というのは、その人の言葉をちょっと聞いただけでわかる。ある学生が少し心配そうな顔をして、「先生、ぼくもわかりますか」と尋ねました。私は、「わかる、君に会った時から、君は自分のことが気になって仕方がないひとだということがわかった。自分のことばかりがそれほど気になっていたら、伝道ができるかどうか心配だと思っていた」とはっきりと言いました。するとその学生が困ったような顔をして、「来年卒業になるんですけど」と言いました。それでその会が終わってから、一人で玄関に私を送りに来まして、「そういう僕がどうして伝道者になれるでしょうか」と問いました。

た。それはある意味では、とても簡単なことです。先ず第一に、自分のことが気になるという態度の人は、何を聞いてもすぐに自分はどうだろう、と考えてしまう。自分のことなどを忘れて、何をするかというと、伝道者、神学生の場合は、日曜学校の先生にも当てはまりますが、神の言葉を聴くことです。それだけです。確かに自分の言葉で説教をしなければいけないのですけれど、自分の言葉がどこから生まれてくるかということ、自分で考え出すのではなくて、神様からいただくのです。別の言葉で言うと、聖霊を信ずるのですから、その信仰に生きながら、神の言葉を徹底的に学ばなければいけない。第二に、私とその神学生に改めて言いたいことは、「神学を学びなさい」ということです。神学を学びなさい。徹底的に神学を学びなさい。たとえば、カール・バルトを読むのです。私は、バルトという人に本当に自分の外に身を置くということを学びました。

それはこういうことでもあるのです。『自伝的説教論』にも書いたのですが、私は、東京神学大学を卒業して、石川県の金沢で伝道しました。よく覚えているのですが、ちょうど三年ぐらい経った時です。そのころ教団で正教師の試験を受けられる年齢になりますけれども、牧師を辞めようかと思ったのです。伝道が行き詰まったのではないのです。おもしろいように伝道が伸びた。学生時代から関わっていたのですが、初め礼拝出席者最高で23名というようなところから始めて、卒業し

て牧師として行ってから、すぐに礼拝出席は40人くらいになっていました。そして、3年くらい経った時には、礼拝出席者数が80人に届いたのです。とてもよく伸びているのですけれども、私自身は自分に我慢ができなかったのです。先輩たち、伝道者の先輩たちは、われわれは説教に命がけだと言うのです。でも私は、仲間の伝道者たちを見ていて、説教に命なんか賭けていないじゃないかと思っていました。しかし、そのうちに何に気がついたかということ、ああ僕も命を賭けなくても、説教はそこそこできるようになってしまったと思いました。忙しいものですから、準備が不十分でも言い訳はいくらでもできるのです。日曜日の朝、惨憺たる出来で説教をするのですが、そこで何を覚えたかということ、ごまかすのです。そんなに十分に説教の準備をしなくても、これが説教でございますと格好をつけることは身につけたのです。ひどい牧師根性が身に付いたと思った。これで死ぬまでやれると思った時に、そんなら辞めた方がいい、こんなに不誠実なことはないのだから、辞めるべきだ、と思いました。こういうのは、妻にも言えません。だけど、そんなに簡単にやめたくはないのです。一方では神様のお召しを信じていますから。神様のお召しを信じながら、牧師根性のとりこになって、しかも、とてもおかしな思いを抱いたのは、こんなひどい不準備な説教をしたら、教会員、求道者は今度の日曜日あきれ果てて来ないだろうと思ったら、ちゃんと来てくれるのです。鈍感だからと言う人もいるかもしれませんが、それだけ信頼してくれているからだろうと私は思ったのです。信頼しているから来てくれる。いよいよ困った状態になった時に、東京に出まして、教文館に行きました。洋書売り場に行きました。そうしたらトゥルナイゼンの『牧会学』の原著が置いてありました。緑色の紙の表紙の粗末なものでしたが、東京神学大学

である教授が勧めていらしたのを思い出して、トゥルナイゼンという先生は前から知っている人ですから、買って帰って、一週間か十日で、かなり分厚いドイツ語の本ですけれども、読み終えたのです。いろいろな仕事を全部キャンセルして、ひたすらそれを読んだ。そして立ち直りました。どういう風に立ち直ったかということ、まさに「自分の外に」出られたのです。神の言葉に身を置いて、神の言葉に仕え切れればいいのだ。そのことに集中すればいいのだ。自分で自分の牧師の仕事を考えていたことが問題なのだ。だいたい、先輩の牧師たちに、命なんか賭けてないじゃないかなどと考える自分が根性が曲がっていたのだ。そういうことで、ある意味では、自分の誠実さとか何とかいうことにも根拠を置かなくなりました。そこから出てしまう。これが本当だと思うのです。これ以上のことはそれぞれの日曜学校で考えてくださってもいいですし、ひとつの手がかりとしては、繰り返していただきますけれど、たとえば日曜学校で説教をする時に、自分で説教を作り自分の言葉として説教を語る、それは一方で大事なことですよ、けれど他方から言うと、自分は神の言葉を語るのだから、神の言葉の中に立ち続けられればいいと思うことです。そうすれば外に出られる、外からの言葉を浴びるように聞いてそこに立ち続けられればいいと、いうことだと思うのです。それは決して説教を作る手抜きをすることではなくて、もっと厳しく神の言葉に自分の身を委ねることだと思います。

- Q. 日曜学校教師の訓練をどのようにすべきでしょうか。毎週、準備会を持つべきかどうか？
- A. 訓練はいろいろなやり方があります。何を訓練するかによって訓練の場所や方法を作るにはいろいろな方法があると思います。まず第一に、毎日曜日やる基本は何かということ、こういうことを言うと叱られるかもしれませ

んが、毎日曜日ほんとに祈って、ほんとに礼拝することです。特に私は、これは『子どものための説教入門』で語っていることですが、子ども、教師意識が強すぎて、子どもに礼拝させよう、礼拝を教育しようという思いが第一であってはいけません。あるいは、自分たちは、このあとの教会の礼拝で礼拝をするのだから、ここでは礼拝を教えればよいと思うかもしれません。それは違う。そこで礼拝をするのです。たとえば説教を聴く時に、そこにいる教師たち自身が、本当に子どもに与えられている神の言葉を、自分にも与えられている言葉として聴くのです。案外そうじゃないでしょう。この先生は子どもたちに話している。わたしたちには語りかけてはいない、という風に思うでしょう。それは違うのです。自分たちがよく聴かないといけない。

あるキリスト教学校に招かれていきました。もう今は行きませんが、よく中学や高校に行っていた時に、よく先生たちが心配したのは、子どもたちが私の説教をちゃんと聞くかということでした。「近頃の子供たちはおしゃべりが多くてとか何とか」と言うのです。「わかりました、それはどこでもよく聞かされることですから、心配しないでください、子どもに説教を聞かせるか聞かせないかは、こちらの問題なのですから」と言いました。けれどもそのことがよくわからない学校ですと、礼拝の説教をしている間、先生がうろうろ歩きまわる学校があるのです。ちょっとおしゃべりしていると、「しーっ」なんて言って注意しているのです。私はある学校で、あまりにも目障りなので、はっきり説教を途中で切って言ったのです。「うろうろ歩いておられる先生方、座ってください。私の説教を聞いてください。生徒諸君が私の説教を聞くか聞かないかは、生徒と私との戦いなのです。関与しないでください。先生たちも、今、御言葉を聞いてください」。生徒たちは喜んでしま

いました、先生が叱られたのですから。先生たちはあわてて座りましたけれども、それから生徒もよく聴いたし、とてもよかった。あとで文句を言われるかと思いましたが、かえってお礼を言われました。教会学校でもそうなんです。ですから私は鎌倉におりました時に、教会学校の礼拝が始まる前から、生徒をちゃんと並べて入れさせる係の先生は先生で用があるでしょうが、そうでない先生は、礼拝が始まる寸前まで、分級の用意なんかしないでもらいたい、と言いました。出来るだけ早く席について、祈りの姿勢をとっててください。そして先生たちがきちんと礼拝の場所を整えるところに生徒たちが静かに列を作って入ってきたら、それだけで礼拝のところが出来るでしょう。それをやらないものだから、席に着いてからも子どもたちがべちゃくちゃべちゃくちゃおしゃべりをしている。ここは神を拝む場所だということを先生たちが先に作ってください。そうするともっと早く集まって教師会としての祈りをしなければいけません。

それからもう一つ、教会学校の訓練の場所は、教会の礼拝です。教会の礼拝の、真実の礼拝の担い手の中核に教会学校の教師がいなくてはいけません。これは私は鎌倉の教会でも厳しかったです。教会学校の教師は、出来るだけ早く礼拝堂に入りなさい。10時15分から礼拝が始まるのですが、10時にチャイム、鐘が鳴る。そして教会の方たちは、いくら遅くても10時10分までには着席しています。その後から教会学校の教師が入ってくるのは、絶対に許さない。どんな理由があってもです。教会学校の後片づけは礼拝が終わってからすればいいじゃないですか。だから教会学校の務めが済んだら、出来るだけ早く礼拝堂に入って、そして本当のよき礼拝者となりなさい。聴き手となりなさい。牧師は、あの教師たちが自分の説教を聞いてくれるから、とい

う思いで支えられるような聴き手になってもらいたい。あの連中が一番説教の聴き手として扱にくいなんて思われたい方がいい。そうではなくて、あの先生たちが聞いていて、祈りをもって自分の説教を支えてくれるから、というほどの説教の聴き手になってもらいたい。こういうことが基本なのです。

その上で、後はいろいろなことが出来ると思うのです。たとえばある教師会で、教師会をなさるでしょうから、その教師会の議事の中に祈りの勉強会をする。鎌倉雪ノ下教会では、長老会の議事の中で長老の祈りを批判したり、祈りの言葉を整えるための勉強会があったり、あるいはジュネーブ・カテキズムを読む勉強会などが長老会の議事の中に必ず入っていました。そういうことが教会学校の教師会であれこれ相談するよりも大切です。具体的な細かいことであまり時間をいつまでも使うということはあまり意味のないことです。そうではなくて、教会学校の教師の訓練になるような議事を作る。ここでとても大事なことは、これは『子どものための説教入門』で書いたことですが、日曜学校の校長というのは、先ずそういう意味で責任があるのではないですか。それからもう一つは牧師の責任ですね。そういう人たちがそこでよく指導をし、自分たちの教会学校の身の丈にあった、——身の丈に合わないことを無理してやると疲れてあまり実りが多くなりませんから、——身の丈に合った訓練を考えることが出来ると思います。

ところで、子どもたちを集める、教会にまで連れてくるための方法は、どんなことをなさっておられますか。今は、私はしていないものですから、返事が出来ないものですが、これもさっきから申し上げておりますように、いろいろな工夫が出来ると思うのです。これは一つの教会でもいろいろな方法を考えればいいわけです。鎌倉雪ノ下教会より

も、その前の、まだ神学生時代の、伝道者になる前のことですが、私が所属していた吉祥寺教会がやっていたものですが、サムエル会というのがありました。このサムエル会というのは何をするかというと、教会員が子どもや孫を連れてくる会なのです。日曜日の午後になりました。礼拝が済んでからお昼ご飯を食べることから始めた。近い家の人は一度帰ってくる余裕があったのかどうか、そこは忘れましたが、礼拝の後で子どもや孫を連れてきて、親と教会学校の先生と、会食をして、子どもは子どもで集まりをして、そこにはまだ日曜学校に来たことのない子どもも入っているのです。それが日曜学校の先生と顔を合わせて時を過ごして、親は牧師と共に信仰指導について語り合う。教会員の子どもをねらい打ちするのです。これはやる必要のない教会で無理にやることはありません。ですから、それは考える必要はないのです。

それよりも、教会堂の周りに子どもたちがたくさんいるなら、子どもたちを集めてくるというやり方があります。私はよくお話をしますが、ついこの間も、奈良県のある教会を訪ねました。これはとてもおもしろいことに日本のアライアンス教会を創設した、もともとはノルウェー系のアメリカ人の宣教師がつくった教会でしたが、この宣教師夫妻というのは、偉いのです。日本で非常に伝道が難しい時期に伝道しまして、伝道を終えて定年になってから、定年になる前ですと、奈良県に伝道に行きたいといっても、あんなに難しいところといって教団が派遣してくれないだろうと考えたのです。定年になったらどこに行こうと好き勝手です。その定年になって年金をもらうようになり、謝儀ももらわないで済むような状況になった時に奈良に乗り込んで一つ教会を作ってしまったのです。その時に何をやったかということ子どもをねらった。この宣教師は手風琴、昔のことですから、

アコーディオンで賛美歌を奏でて、それに協力した牧師はコルネットという管楽器を奏でて子どもたちを集めた。音楽で子どもたちを集めたのです。そこから教会の歴史が始まった。今の教会はそういう勇気がないのではないのでしょうか。ラッパを吹いて集めるとか、賛美歌を歌って集めるとか、そんなちんどんやみたいなのは出来ない。けれどもそれが必要だと思ったらやってもいいのです。先ほども言いましたように、私の若い時にはよくメガホンを持って教会の案内をして歩きました。マイクを仕えないし、使うと怒られるし、携帯のハンドマイクなどなかったのです。メガホンを持って教会の行事の案内を毎週怒鳴って歩いたのです。一人だ तो ちょっと恐いものですから必ず二人で。戦争中ですからね、「耶穌はうるさい」なんて必ず言われるわけですから、びくつかないようにそうやって歩いたものです。そうやって集めることも出来るし、これはさまざまではないだろうかと思います。

Q. 講演の内容とは少し離れるかもしれませんが、証（あかし）についてはどのように考えていらっしゃるか教えていただきたい。

A. この場合の証とは何かという問題ですけれど、先ほどの奨励との関連であろうと思います。改革派教会ではどうか分からないのですけれども、改革派教会ともかつて関わりのあった旧日本基督教会では、基本的に証については賛成する立場ではありませんでした。教会で語られる言葉は証というものではない。証という、神学的な議論ではなく、日本における慣習から言って、個人的な信仰経験を語ることになるからです。そうすると、信仰経験を語ることは難しいことではないと思われるところがあります。信徒の方は。鎌倉雪ノ下教会でも、先ほどのような議論で、長老たちに説教を頼みますと、長老の中で、いや説

教なんて難しいことは出来ない、証は出来るが、と言った人がいます。証は自分の経験なのだから簡単なことだと考える人もあるのです。そこが問題なのです。証が証として一人歩きしてはいけないので、証なのですから、福音の証にならなければいけません。「あの人って偉い人ね」なんていう印象が残ったらとんでもないことなのです。私は牧師の説教の中で証をしたがる人がいる、証をしたがる牧師は教祖になる危険性が一番大きいとよく言うのです。それはなぜかという、自分の信仰経験というものがその牧師の真理の支えになりかねないからです。私はこういう経験をした、私はこういう経験をした者だと語ることが説教の中心になってしまいます。教祖というのはそういう者ですね、自分の霊的经验に神の啓示が現れたと。ホーリネスの中田重治という人の説教集も、私は編集して出していますが、中田重治先生の一番の問題点はここなのです。最後に亡くなる前にきよめ教会というのを作りましたけれども、このきよめ教会、きよめ教団の基礎は、「神が中田重治に与えられた啓示こそそれである」という言葉が教団規則に入ってくる。これはとんでもない教祖です。信仰の証というのは、そんなことを考えているのではなく、もっと謙遜に自分に与えられた神様の恵みを語るのであり、この危険からどうやって身を守れるかということです。

ですから信仰経験を語る証ということではなくて、証を語ってもいいけれども、み言葉の説き明かしが教会で語られるべき言葉だということをはっきりわきまえた方がいいと思うのです。その意味では礼拝において語られるのは説教です。祈禱会において語られるのが奨励です。奨励というのは祈禱会の言葉です。これは祈りへのすすめの言葉だからです。鎌倉雪ノ下教会ではよく祈禱会で長老が奨励をしました。その時に長老たちにお願した

のは、あなたの話を聞いて教会員が祈りたいと思えるようになる話をしてください、と言いました。こういう祈りをしようみんなが思うようになる話をしてください、他の話はいりません。基本的には教会で語られる話はこのどちらかなのです。その中で説教者は自分の経験、証にあたることを語ることは私は否定はしません。そのことに対して否定的な牧師もありますが、私は、説教者というのは自分のみ言葉経験、み言葉体験というものがなければ説教を語ることはできなのですから、その体験を、時に、——いつも話していると教祖的になりますから、——時に語ることは許されると思います。み言葉を説くために必要ならばです。いずれにせよ、自分の信仰経験を語る事が主たる目的の言葉は、教会で語ることは気をつけなければいけない。その上で限定されて語る時があるかもしれません。『神に呼ばれて』という文集に参加しまして、自分が伝道者になるためのどういってお召しを受けたかということ語ったことがありますけれども、そういう特別な場面というのがあるかもしれません。たとえば教会で自分が神様から受けた恵みを数えてみましょうという信仰の経験を語り合うということがあると思うのです。あるいはそのような改まった席でなくても、お茶を飲みながらでも、自分の経験を語り合う、恵みを分かち合うという意味においてありうらと思うのです。そのことだけ申し上げておきたいと思います。

Q. 現代の子どもたちの置かれている実態について、日曜学校（特に礼拝）において、どの程度合わせる、というよりも、寄り添うべきなのか、ヒントをいただければ幸いです。子どもたちに合わせていくと、どんどん大人の主日礼拝とかけ離れていくように思います。時間、歌う賛美歌、メッセージのわかりやすさ等々。日曜学校の礼拝から、主日礼拝へと

移っていく時、それがつまずきとなることもあるようですが。

A. これは実は私は、わかるようで、わからないところがあるのです。今のような問いを読むと、わーっと質問がわき上がってくるのですね。たとえば、この方のものの言い方だと、主日礼拝というのは、教会の大人の方たちの礼拝でしょう。そっちは聴き手にあまり合わせていないみたいです。聴き手がどんな状態であるか、知ったことじゃないみたいな礼拝をしているように思われるかもしれませんけれども。そういわれると牧師は困ると思うのです。たとえば説教でも、そこに集まっているたちにわかるように言葉を選んで語っているでしょう。今礼拝に集まっている人たちのためのみ言葉を語っているのです。ですから、大人の礼拝は聴き手に合わせないということはおかしいのです。

もしかすると、ここでもっと丁寧に考えなければいけないことは、合わせるとはどういうことかということなのです。これははじめのところに戻ってまいりますと、日曜学校、特に礼拝で、どの程度合わせるか、という、程度問題なのです。どこまで子どもに寄り添うべきか。そうすると、この方は度はずれに、徹底的に子どもに寄り添う礼拝、というようなものを何か考えておられるのだろうか。私にはそのイメージがわからないのです。子どもに寄り添う、というのは、少し違うのじゃないかなあとと思います。

たとえば、これは『子どものための説教入門』で書いていることですが、子どもたちに説教する時に、下手に質問するな、と言っています。これは私も若い時に失敗したのです。もっと人数が多い時でしたから、いよいよ混乱するわけですが、夏休みが過ぎます。今でも日曜学校でやっておられるところがあるかもしれませんが、9月の第一日曜日は振起日、振るい起つ日、これは昔アメリ

カの日曜学校でそうしていたものですから、日本の日曜学校も、どこでも振起日というのをやっていた。特別に子どもを集めて、振起日の歌というのを勢いよく歌って、そして私が説教を始める時に、「夏休み、みんなどこへ行った？」なんていうのです。たちまち蜂の巣をつつくようなことになるのです。われもわれもと叫び出すでしょう。中には、「どこにも行ったことねえや」なんていったりするんです。そういう反応を呼び起こすのは、教師の言葉で言うと、この方の言葉で言うと、寄り添うつもりなのです。話題を合わせて、話をしようと思うのですけれど、これは子どものところがわーっと散るだけです。説教する時に大事なことは、——子どもに、心の中で、黙って心の中では反応してもらいたいけれど——口に出させないようにしないと子どもの場合は困るのです。口にものをいわせないということは、子どもは何を考えようが知らん顔、というのではない。黙っていて、子どもが心の中で、そうだよなあ、僕もそうなんだよなあと思ったり、先生そんなこと言うけど、僕には難しいよと考えたりする。大人の礼拝でも優れた説教者は聞いている人と、絶えず対話をしているのです。今、私が講演をしたり、質問に答えている場合でも、今一所懸命にやっているのは、皆さんと一緒に考えている、皆さんの中に問いをあるいは答えを呼び起こそうとして話をしています。そうすると聞いてくれていますね。こういう時にも子どもに寄り添っていますよ。

ですから寄り添うということは、ただ子どもに調子を合わせて、神様のことは適当にという形では寄り添うということは起こらないのです。なぜわれわれが子どもに寄り添うかという、主イエス・キリストがその子どものためにあわれみのこころを抱いて、主イエスのお心が寄り添うように寄り添うのです。主イエスはただ子どもに調子を合わせるよう

な救い主ではないのです。これは福音の墮落以外の何ものでもないのです。これは大人の礼拝でも同じことだろうと思います。寄り添うということは別の言葉で言えばまさに愛するということでしょう。愛する人間ということとはただ子どもの言いなり放題になるということではないのです。もしこの方が子どもの言いなり放題の礼拝をやってしまうと大人の礼拝は言いなり放題にやっていない、神様の言葉を重んじているのだから、その間に落差が大きくなりすぎると考えるならば、子どもの礼拝の方を修正して、子どもの言いなり放題の礼拝を、寄り添う礼拝などと考えないでいただきたい。そう私は思います。そうすれば必ず道は開けてくるし、たとえば教会学校の礼拝は静かに説教を聞かなければいけないところだということを教えなければいけない。そういう意味でしつけなければいけません。子どもが何を考えようと。しかしそれを愛をもってなし得るかどうかということだと思えます。そういう意味で先ほど教会学校の先生たちの礼拝する姿勢が大事だといったのです。いつも仲良くしているお茶目な先生が、礼拝堂に入ってくるといつもとちがった顔をしている、静かに神様の前に出ている。そうすると子どもの方も思わず居住まいを正すと思うのです。そういうことが大事なのです。そうすれば、私は必ず道が開けてくると思います。

Q. 現代社会をどう見たらよいか、それが問題だと思えます。理想主義の崩れた時代とも言われましたが、『魂への配慮の歴史』のなかでブルースという神父のことを紹介されたことがころにかかります。

A. こういうことだと思えます。一般的に言って、現代というのは、理想主義が崩れている時代ですね。たとえば、社民党が今は全く望みがなくなっています。いつまで存続するかというところまで来ています。これは社会学

者、政治学者でも、ずい分前から言っていたことです。日本プロテスタンティズムと日本社会党の盛衰とは重なり合う、これがあたっているとすると困ります。社民党が消えると同時にプロテスタント教会も消えてなくなるかということですから。日本社会党の持っている一つの問題点は、何かというと、ただ資本主義を受け入れるのではなくて、資本主義の持っている害悪をちゃんと見据えて、共産主義のような、強権ではなくて、社会民主主義ですから、デモクラティックに平等な社会をどうやって作れるかという課題だったのです。これはよほど人間について理想的な考えを持っていないと出来ないことなのです。ところが今何が起きているかということ、日本だけの問題ではありません、民衆のモラルが、とてもひどく落ち込んでいるのです。ですからたとえばアメリカのある神学者が、実践神学関係の説教の国際学会で講演をした時に、もうアメリカはキリスト教国と呼んでももらいたくない。あるいはキリスト者の社会だとよんでももらいたくない。アメリカの社会の道徳は地に落ちている。それに今は何が起きているかということ、それにイスラームというのが混じってきている。イスラームのひとすべてでないことは明らかですが、イスラームの神の名において人殺しを平気でやるようになっていく。人殺しも問題ですけど、自爆テロということ、要するに神風攻撃が続いているということです。日本における神風攻撃くらい、人間のいのちを粗末にしたものはないのです。そういうことが平気で行われるようになってきている。キリスト者のなかでも、それに対抗して神の名によって暴力によるテロ撲滅を正当化する。そういうところで何が起きているかということ、人間についての理想ですね、人間というのはこんなに美しく、こんなに道徳的で、そういう美しい道徳的な人間が、民主的に力を合わせたら世の中がよ

くなるということをする人が今はもういなくなってしまう。これはとても大きな問題です。だから教育者も困っています。教育の基本とは、ずいぶん長い間民主主義教育でした。それは何かと云ったら、人間というのをよく丁寧に育てたならば、みんな理性があるし、公平なところで一緒に生きていく社会を作っていくことが出来るものなのだ、そういう風に神様に作っていただいたのだ、その点で信仰があろうがなかろうがやれるはずだということがあったのですけれど、今の学校の先生たちはその信念を失っています。人間を信じていいのかどうかという根本問題が今の教師たちの大きな問題ですね。

ついでにいうと、長いことヨーロッパの理想主義を支えてきたものの一つは、明らかにキリスト者の信仰であったのです。いわゆるキリスト教的ヒューマンイズムの理想というものがあったのです。戦後日本でも、小塩力という先生が聖書について岩波新書で書いて、その中でやはり聖書におけるヒューマンイズムというものが日本を再興するということをそこで声高らかに語ったのです。今とても大きな問題は、理想主義を放棄した時に、人間とはどうせこんなものなんだという、そこに出てくる“あざ笑うような”気持ち、諦めを持って、こんなものだと思ってしまうようなところに生きてしまう。その方が人間的だと言う。そういう意味で、天でなく地を這うように生きていく方が人間の現実であると考えがちである。

それに対して、ブルスを紹介している人は、それを自分自身の問題として書いている。ブルスはそこで望みを捨てなかった。けれどもそれは人間の持っている理想主義にはなかったのです。こういう人間も天とつながっている。それは一つには、——このブルスという人は、後の方で書いているのですが、——祈りの大切さを徹底的に教えるというこ

とです。祈るということは、天のはしごを上り下りすることに生きることです。そうするとその場合に人間の掲げた高い理想主義ではなくて、神が私ども人間を作ってくださった、そしてキリストは必ず来て、ご自身の勝利を示してくださること、その望みを持たないと、諦めでは生きていかれない。あきらめないでどうやって生きていくかということは今のとても大きな問題だと私は思います。

子どもたちも、今はあまり理想主義的な子どもはいないでしょう？ だから昔は日曜学校で、よかったかどうか問題ですけど、すぐシュヴァイツァーの話をして、子どもたちも自分もシュヴァイツァーのようになりたいと思う。でもどうでしょう、今、マザーテレサのようになりたいという思いで燃えるように信仰に生きている子どもたちが育っているか。あるいはうちの牧師みたいに伝道に生きたいとそういう思いで生きる子どもたちがどれだけ育っているか、下手をすると、神学校で神学生を教えていた時から感じており、よく神学生に言ったのですけれど、神学校で勉強して伝道者になるのは、君だけが救われるためではないからねと言わなければなりませんでしたが、そういうことが起こっている。神学校に来ている学生で自分が救われただけで来ている人がいるんです。必ずどこかでつぶれる。他者を救うということには大変な忍耐がいります。そういう学生にとってもはしごが見えていないと困ります。今の牧師たちの問題でもそうでしょう。ちゃんと神様にはしごをかけて生きている牧師の説教と、はしごが見えなくなっている牧師の説教とは、まるでちがいますよ。はしごに生きているということが、さっきの問いかけでいえば、自分の外に出るといいうことでもあるのです。それをプールの、人間の望みがぐちゃぐちゃになるようなナチの経験やら、学生紛争の経験の中で見失わないで、人間にとって本質的

なことはこれなのだということを見抜いていると思います。私は今の教会も、昔のような理想主義でなくていいけれども、天にはしごをかけているものらしいヤコブが見ていたような夢を持ち続けるということが大事ではないかと思えます。

Q. 家庭と教会とで信仰教育、特に生活のしつけに違いがあるでしょうか。

A. あまり私は区別はないと思いますけれど。親は親で、家庭で子どもと触れて、場所がちがうだけで、教えるしつけは変わりないと思います。私が牧師をしていた時に、いつもはなかなか子どもたちに接することが出来ないので、子どもたちと夏期学校に行って三日間過ごすのが、私の一年に一回の、クリスマス以外の、子どもとの接触の場面でした。その時に、牧師として私が一番気をつけたのはしつけです、みんなで食事をしますね、丸い食卓を囲んで、一緒に食事をする。すると、いつの間にか食事のマナーを教えるのが私の仕事になりました。そこでは必ず真ん中の大きなお皿にごちそうが並びます。それを分けてとるわけですが、何でもないことですけど、自分の好きなものだからといって、わーっととって、八人で分けるのだということを忘れたらだめなのです。八分の一といったらどのくらいか、そして分けたら、さっと食べたらだめなのです。みんなに行き渡って、みんなが食べられるようになったらいただきますといって、そのテーブルが食べ始めるのです。それから食べ終わって、自分だけデザートに手を出したらいけない。一番遅い人が食べ終わるのを待って、食器を片づけて、さあデザートをいただきますよとなる。ヨーロッパでは、ごく当たり前のことですけど、日本の家庭では教えないことです。だから一緒に食事をいただくことを心がけなさい。それから、大人がいると子どもがしゃべることは控える

ことを求められますけれど、子どもが揃っている時には、黙って黙々とごちそうだけを食べるのは、これははなはだ周りの人に失礼なことです。自分はあまり話したくなくても、話をしている子どもに耳を傾けるということとはなくてはならない。たとえばそういうことです。

それから朝起きて出会う人にみんなおはよう、おはようといいます。おやすみなさいといいます。親にも教わることでしょう。鎌倉雪ノ下教会ではほとんど靴を脱ぎませんけれども、靴を脱ぐところがあります。子どもが多いところでは、わーっと靴を脱いでそこに散らかっているわけです。中に一人教会員の子どもの、えらいのですけれども、必ずそこにて黙々と靴を同じ向きにそろえている子がいます。そうすると、何さんとはいわないけれども、「そういう仕事を何々さんだけにやらせていいですか」と注意する。ある時その靴が散らかっていて、私の妻がその靴を避けようとして足を滑らせて腕の骨を折った。かなりの怪我をしたのです。その時にはちゃんと教会学校で、さゆり先生がけがをしたのはあなたがたのせいだといいました。不注意ということはこういうことを起こすのです。みんながきちっと靴をそろえていて、出入りしやすいようにしていたら、さゆり先生、今頃病院に入っていないよと。みんなしゅんとしてしまいました、みんなさゆり先生大好きですから。そういうことを、特にしつけというのは、共に生きるしつけというのは、かなり注意深く、私がお目付役でした。先生たちは、牧師に任せておけばいいやというところもあったのですが、それもいいと思うのです。たとえばどこの日曜学校で、校長先生がお目付役になっています。他の先生までみんなびりびりした顔をしてはいけませんから、日曜学校の先生たちはにこやかに、こんなことをしたりしてはいけないということをし

教えるつとめをすることもいいと思います。ただ基本は同じことですから、親たちにも日曜学校でこういうしつけをしているのだから、家庭でそれを崩すようなことをするなど、きちっと靴をそろえる子どもは家庭のしつけのおかげなのです。親がちゃんと教えているのです。そういうことであると思います。このご質問はありがたいと思いますが、日曜学校は生活のしつけがとても大事だと思うのです。ただ日曜学校にやってきた時に、おはようございますと言わせるのです。近頃の子どもはおはようございますと言わないですが、とっつかまえて言うんです。こっちがおはようと言ってるんだよ、何でおはようと言わないのかと、私の剣幕にびっくりして、おはようとか何とか言いますけれど、その次から気をつけます。そういうことをきちんとした方がいいと思うのです。

司会 相馬伸郎

残りの10分が過ぎましたけれど、最後に折りの時を持ちたいと思います。今日はレスポンスということをしたかったですけれども、先生のご講演を伺いながら、心の中から本当にその通りだという思いばかりで、ですから、レスポンスというのは私たちのそれぞれの日曜学校が、学んだことを糧にしながら活動すること、それをもって先生の今日の講演に応えたいと思います。子どもたちが、放って置かれている現状をわたしたちは知っています。昨日の夜、主日の奉仕が終わって、それでもまだ教案誌の作業をしておりまして、夜中の一時くらいにテレビをつけました。リストカットをしている若い方々の特集をしていました。家内と一緒に見入ってしまいました。20歳くらいの女性たちが、初めてみましたが、自分の腕とか手首を切っているんです、何十回も。そういうことを見ながら、この方たちはどうして教会に来ることが出来ていないのかなあと思いました。彼女たち

は、「傍らに誰かがいてくれたら」と訴えているのです。そこにキリスト者が出会う人が一人もいなかったのかなあという思いをほんとに受けました。そうであれば私たちはやはり出て行って、主イエスが見ていてくださるように、飼う者のない群衆ですね、その子どもたち、小羊たちを見ていきたいと思えます。そうであれば、やはり祈りをささげる所から始めるしかないと思えます。皆様の教会で、日曜学校の先生たちが本当に祈禱会を重んじて皆で子どもたちのために祈って行く、そういうところから、始まるのではないだろうか、そう思えます。最後に、いつものように祈りをささげて終わりますけれども、あと6分しかありませんので、指名をせずに、短く、出来るだけ大勢の方々がお祈りしていただければと思います。最後に私がお祈りをささげて閉じたいと思えます。

三人の祈り（省略）

相馬先生の祈り

主イエス・キリストの父なる御神。あなたの恵みによってこの年の日曜学校の教師研修会をこのように祝福してくださいましたことを心から感謝をいたします。あなたが尊く用い続けていてくださる加藤常昭教師を私どものこの学びの集いに遣わしてください、私どもに根元的に語りかけ、問いかけをしてくださいました。また励ましを受けたことをまことに心から感謝をいたします。私どものこの日本の状況が、あなたの御目にどのように映っているのか、私どももあなたと共に涙を流し、胸を叩く以外にありません。けれどもあなたは涙を流すだけではなく教会を建ててください、このような兄弟姉妹を起こしてください、福音を私どもに手渡して

くださることを心から感謝をいたします。どうぞ今与えられている子どもたちをなお大切に育て上げて、その子どもたちを通してあなたの栄光が現わされますようお願いをいたします。また私どもが知恵を尽くし、愛を注ぎ、時間をささげ、財をささげて、日曜学校伝道のために立ち上がることが出来ますようお願いいたします。特に牧師を、長老たちを、このことのために祈り続けることが出来る者たちへとあなたが整えてくださるように、力を合わせて、教会をあげて、子ども伝道に、日曜学校伝道に、契約の子の信仰継承のために励むことができますように、心からお願いをいたします。この日本キリスト改革派教会のことだけではなくて、日本にいるすべての子どもたちのために、どうぞ全てのキリストの教会を強くしてくださいるようこころからお願いをいたします。そのためにもご奉仕してくださいました加藤常昭先生の上に豊かな顧みを与えてください。先生の健康をあなたが常に守ってください。各地での伝道の働きのために、また説教の働きのために、先生のご奉仕をいよいよ用い、あなたのご栄光を輝かしてくださいるよう心からお願いをいたします。今日のこのときを心から感謝をし、私どもの救い主、主イエスキリストの御名によっておささげいたします。アーメン。

主の祈り（全員）

※本講演録は、2003年11月24日に開催された中部中会教育委員会主催日曜学校教師研修会（於名古屋教会）で行われた講演をもとに、書き改めたものです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由献金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに四年目となり、第15号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ40教会から採用されています。先の第59回定期大会の教育委員会報告にありますように、大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由献金によってご支援いただきたいと願っています（2004年4月中部中会第一回定期会にて自由募金願いを可決承認済み）。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと献金のご支援をいただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を発行単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願ひいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

テキスト マタイ福音書7章24節～29節

(1) 土台のたとえ

主はこのところで土台の譬えを用いて語られます。この譬えは、13節～23節の御言葉を受けてなされています。つまり、「不法を働く者ども」について教えられた後、主の「言葉を聞いて行う者」とそうでない者について示しているのがこのたとえです。

「不法を働く者」とは、「主の御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行った」人々であるといわれています。このような人々は確かに一見すると、立派に見える人々です。ですから、砂地に家を建てた人も賢い人と同じように家を建てているといわれます。土台は違ってもきちんと家を建てているのです。そして、災いは同じようにやってきます。そこで、その災いによって、建てられた家がどのようなものであったか、評価されることになります。もっと言うならば、土台が何であったかが、ここで評価されるのです。砂地に家を建てた人の家は「倒れ方がひどかった」とあります。彼らは、賢い者たちと同様に家を建てました。その熱心さには変わりありません。ここで問題となるのは何を土台としていたかということなのです。

ルカの並行箇所に記載されているように、「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てたのか、動くことのない土台を見出さずに家を建てたかということです。この「地面を深く掘り下げ、岩の上に」といわれているのは、岩盤にということです。岩盤を何よりもの土台として土台を築き家を建てれば、その家は揺るがないのです。

その揺るぎない岩を見出して家を建てるとい

ことは、主イエス・キリストに結びついて主の御言葉に従って生きるということです。不法を行う者たちは一見立派そうに見えるのですが、実際には天の父の御旨を行わず、狭い道を歩まず、主イエスとその言葉に結び付いていない者たちです。そのような人々の行いは、自分の栄誉のためにすぎません。しかし、賢い者たち、つまりは正しい者たちは主イエスという揺らぐことのない岩盤に結びつき、主の御旨を行うのです。

(2) 人々の反応—権威あるイエスの言葉—

この主イエスの一連の説教を聴いた人々が「非常に驚いた」と記されています。彼らがここで非常に驚いたのは主イエスの教えではなく、「権威ある者として」語られたからなのです。

律法学者も確かに律法を説くゆえに権威ある者です。なぜなら、律法は神様の御言葉であり、その御言葉に忠実である限りにおいて、その言葉に権威があるからです。そして、彼らは権威ある賢明な教師として人々から尊敬されていました。しかし、それは御言葉の権威であって、教える人自身の持つ権威ではありません。

それに対して、主イエスは「権威ある者」としてお語りになりました。その権威とは神の権威なのです。それは、ヨハネが「言は神と共にあった。言は神であった」と語っているように、主イエスは神の言そのものであり、神と神の御心をお示しくくださるのです。主イエス・キリストは神の言なる方としてお語りくださる、真の預言者なのです。

(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問25

子どもカテキズム

問25 イエスさまの預言者としてのお働きは何ですか。

答 神さまの御言葉を教えてくださる事です。

イエスさまは、今も、

教会を通して、

聖書と聖霊なる神さまによって

私たちに語りかけてくださいます。

ですから、私たちは心をこめて御言葉を聴きます。

証聖句 ヨハネ1：18、14：26、15：15、20：31、テサロニケー2：13、ヘブライ1：1-2、

ペトロ1：10-12

参考教理問答 『ジュネーブ』39,44、『ハイデルベルク』31、『ウ大教理』43、『ウ小教理』24

1. 最高の預言者・キリスト

預言者とは、未来を「予言」する人々というよりも、むしろ神の言葉を人々に伝える働きに召された人々のことです。その際に、預言者たちは、直接言葉で語る場合もあれば、何かの行為で神の御意思をあらわす場合もありました。したがって、永遠の独り子なる神御自身が人となられたキリストこそ、神の言そのものであり最高の預言者なのです（ヘブライ1：1-2、ヨハネ1：18）。

この永遠の神の言であられるキリストは、旧約時代には御自身の霊によって預言者たちを通して語られました（ペトロ1：11）。旧約聖書全体がキリストを指し示すのは、このためです。やがて肉体をとられた神の言は、その地上での御生涯において、直接その口をもって御自分の御旨を宣言されました。そればかりか、何よりそのお働きと御存在そのものによって神の何たるかを示されたのです。

例えば、「神は愛である」という言葉がいったい何を具体的に意味するのか、言葉だけではわかりません。しかし、イエス様は自ら罪人の友となり病める人々に手を触れ、ついには命を捧げることによって「神の愛」を身をもってお示しになったのです。

2. 今も語られる

ヨハネは“七つの燭台（＝教会）”の間を歩く主イエスの幻を描きます（黙示録2：1）。これは、天に上げられた今も、御自分の教会に臨在なさる主のお姿です。イエスは、それぞれの教会に対して「わたしは……知っている」とおっしゃいます。たとえ目には見えなくとも、御自分の民の歩みをつぶさに御覧になっているのです。そうして主は、「耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい」と言われます（2：7他）。イエス様は、今も、御自分の教会に聖書と御霊によって語り続けておられるのです（ヨハネ14：26参照）。

3. 心をこめて傾聴する

さて、それでは、こうして歴史の中で語り続けられている神の御意思とは、いったい何でしょう。神はいったい何を私たちに伝えようとしておられるのでしょうか。それこそが、実に、キリストの福音です。神に背き続ける私たち罪人を、迷子の羊たちを、どこまでも追いかけて最後の一匹に至るまで救い出そうとする、驚くべき神の愛の意志です（ヨハネ20：31、ルカ15：4）。だからこそ、キリストの羊は、愛する羊飼いの御声に心をこめて聴き入るのです（ヨハネ10：27）。（吉田 隆）

テキスト マタイによる福音書7章24～29節

カテキズム 子どもカテキズム問25

(単元のねらい)

カテキズムは、キリストの三職の一つである〔預言者〕としての主イエスについての教えですが、指定されたテキストはむしろ、そのキリストの語られた言葉の上に人生を建てていく、つまり主の言葉(聖書)にそくして生きていき、聖書に基づいて人生を建て、その導きにしたがって生きることが、確かに堅固な人生となることを教える箇所となっています。カテキズムの教理にとらわれずに、子どもたちが主イエスの言葉(聖書)に従って生きていくことこそ、すばらしい確かな生き方であることを、教えてあげたらよいと思います。説教者にそのような証しがあるなら、それを用いて、聖書にしたがって生きることのすばらしさを豊かに語ってあげてください。

「岩の上に自分の家を建てる」

みなさんは、どんなお家に住んでいますか。アパートやマンションのようなお家に住んでいる人もいるでしょうし、一軒家に住んでいる人もいますね。今の家は狭いから、もっと広くて大きな家の住みたいと考えている人もいるかもしれませんね。自分のお部屋のある人は、こんな机やベッドがほしいとか、こんな柄のカーテンをつけたいと考えている人もいるかもしれません。誰でもみんな、住み心地の良いお家がほしいものです。このように、わたしたちが、ふつう家について考えるときには、地面の上に立っている家のことばかりを考えがちです。どんな色の家か、部屋はいくつあって、どのような部屋か、玄関や形はどのようなものか、という具合です。けれども、家にとってもっと大切なものがあります。それは何だと思えますか。実は、家で一番大切なのは、家の土台なのです。土台は外からは見えないので忘れられがちですが、土台をきちんと据えないと、せっかくすてきな家を建てても、地震や台風で壊れてしまうかもしれないのです。だから外からは見えませんが、きちんとしっかりとした土台をすえることが、家にとって一番大切なことなのです。

これは本当にあったお話ですが、ある人が自分の家を建てました。苦勞してお金をためて、念願のマイホームを建てたのです。長い間、こんな家

を建てたいと考えて計画を立ててきました。そして建てた家は、お日様が入ってサンサンと輝く南向きの家で、そこにサンルームをつけた、二階建ての白いとてもすてきな家でした。お友達を招いて、さかんにいい家でしょうと自慢して見せました。ところが建ててまもなくするうちに、家がだんだん傾き始めているのに気づいたのです。おかしいなと思ううちに、だんだん片側の窓や戸が開かなくなってきたので、大工さん呼んで見てもらいました。そしてあちらこちら直してもらったのですが、いくら直しても傾きは直らず、ますます傾いていくのでした。そのうち窓や戸も開かなくなってしまい、ついには自慢のサンルームの窓が、あるとき家の重みでこなごなに砕けてしまったのです。いろいろ調べて後で分かったことは、その家を建てた場所は埋立て地だったのですが、その埋立てを請け負った業者が二つあったそうです。そして、その業者のうちの一つが手抜き工事をしていたことが分かったのです。もう一つの業者は、きちんとした工事をしていました。そしてその家は、きちんと埋め立てられていた土地と手抜きをしてやわらかくになっていた土地の、ちょうど真中に建てられていたのです。それで家の重みで片側に傾いてしまい、その傾きを直すことができなかったということでした。結局その人は、

自分の自慢にしていた家を放棄するしかなかったのです。土台がしっかりとしていなければ、その家にどんなにすてきな家を建てても、家そのものがだめになってしまうのです。だから家にとって一番大事なものは、土台なのです。きちんとした土台に据えないと、その上にどれほどすてきな家を建てたとしても、傾いてしまっただけでは住むこともできなくなってしまいます。どんなにお気に入りの家具を飾っても、どんなに自分の思い通りの部屋を作ったとしても、家が傾いてしまっただけでは、どうすることもできません。大工さんでも、それは直すことができない、土台をやり直す以外には方法がないのです。

家はそれでも建て直せばよいでしょうが、わたしたちの人生はどうでしょうか。イエスさまはわたしたちがこれから築いていく自分の人生を、家になぞらえてお話をしてくださいました。これからみなさんは、学校に行って勉強し、自分の力を身につけ、社会に出て自分の人生という家を建てていきます。そこで今日のイエスさまのお話を覚えていてほしいのです。外目にはどんなにすてきな家でも、土台がきちんとしていないと、何か大きな問題が起きたとき、す

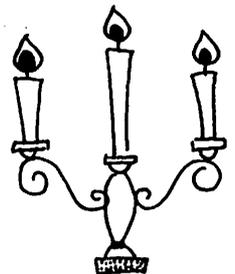
ぐにその家は倒れてしまうのです。どんなにみんなに自慢できたとしても、とても悲しいことや苦しいことが起こると、それが全部ひっくり返ってしまうことがあるのです。そしてそれをやり直すことは、とても難しいのです。だからそうやってしまわないために、これから人生を建てていくみなさんは、しっかりと土台を据えて、その上にすばらしい人生を築いていってほしいのです。イエスさまはここで、「岩の上に自分の家を建てた」人の話をしました。その家はしっかりとした岩を土台としていたので、川が溢れて家を流そうとし、風が吹きつけて倒そうとしても、びくともしませんでした。土台がしっかりとしていたからです。多くの人は見えない土台よりも、見える部分にばかり心を注ぎますが、とんでもない問題に出会うと、とたんにつぶれてしまいます。けれどもみなさんは、人生という家をしっかりとした土台の上に建てていってください。その土台とはイエスさまのことです。そしてイエスさまの上に家を建てるとは、イエスさまの話された言葉を聞いて、行うということなのです。それは、日曜学校で教えてもらう聖書の話しっかりと聞いて、それに基づいて生きていくということです。

(三川栄二)

[今週の暗唱聖句] ヤコブの手紙1章22節

御言葉を行う人になりなさい。

自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。



〈主題〉

み言葉を教えてくださるイエスさま。

〈ねらい〉

わたしたちにみ言葉を教えてくださるイエスさまのみ言葉に心を向ける。

〈展開例〉

みなさんは、神さまの声を聞いたことがありますか。昔、サムエルという人は、「サムエルよ、サムエルよ」と、サムエルを呼ぶ声を聞きました。それは、ほんとうに神さまがサムエルを呼んでくださったのでした。でも、はじめサムエルは、その声はエリという祭司さまの声だと思って、エリのところに「お呼びですか」とかけていったのです。三度、そのようなことがあってエリは、「それはきっと、主なる神さまの声にちがいない。今度、呼ばれたら、『主よ、お話しください。しも

べは聞いております』と言いなさい」とサムエルに教えたのでした。そして、また、「サムエルよ、サムエルよ」と呼ぶ声が聞こえたとき、サムエルは、「主よ、お話しください。しもべは聞いております」とお返事をして、神さまからとても大切なことを教えていただいたのです。

今も、神さまはせいしよとせいれいによって、わたしたちに語りかけておられます。今の生きおられるイエスさまは、わたしたちの心の耳を開いて、「イエスさま、お話しください」とのおいのりのお心をあたえてくださいます。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、いつも、イエスさまのみ言葉にこころを向けてよく聞くことができますように。イエスさまのとうといお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈大型カルタあそび〉

- ☆ B5用紙はA4の大きさの紙に、絵とことばを画く。
(市販のものを抜きコピーしてもよい。→紙に色をぬる)

例



- ☆ 紙の大きさに合わせて台紙(ダンボール・厚紙等)に、カルタの絵を貼る。

★ 両面テープを使うと良い ★

- ☆ 広い場所でカルタあそびをする。



人数に応じて、
チーム対抗等
遊び方を工夫する。

例

- ・ あらしをしりぬるイエスさま
- ・ ガザカイと友だちになるイエスさま
- ・ うつの中わたるモーセとイスラエル

〈ねらい〉

歌を通して、たとえ話のイメージを印象づける。

〈分級教師へのアドバイス〉

今回は、歌が中心です。子どもによっては、声を出して歌ったり、振り付けをしたりするのを取らずかしがる子がいるかも知れません。無理にやらせるのではなく、段々と巻き込むようにできればよいでしょう。

たとえば、御言葉を聞いて行なう者を賢い人にたとえています。ここでは単純化するために、「言うことを聞く賢い人」としています。

〈展開例〉

① 今日のお話を覚えている？ 神様の言うことを聞かない愚かな人が家を建てたのはどんなところだった？

(回答例)

・砂の上

② その家は雨が降ってきたらどうなりました？

・壊れた

③ じゃあ、神様の言うことをきちんと聞いてその通りにする賢い人は？

・岩の上に家を建てた。

・雨が降っても大丈夫だった。

〈祈り〉

天のお父様。私たちがあなたのおっしゃることをよく聞いて、間違いなく行うことができるようにしてください。主イエス様の聖名によってお祈りします。

〈歌ってみよう〉

「かしこい人とおろかな人」(24番)

『教会学校・日曜学校子どもさんびか』

(日本ホーリネス教団)より

1節

かしこい人が家を建てた 岩の上に家を建てた
岩の上に家を建てた 雨が降ってきた
雨が降り水が増し 雨が降り水が増し
雨が降り水あふれ その家は大丈夫

2節

おろかな人も家を建てた 砂の上に家を建てた
砂の上に家を建てた 雨が降ってきた
雨が降り水が増し 雨が降り水が増し
雨が降り水あふれ その家はべっちゃんこ

○振り付け

かしこい人が・おろかな人も

手を交互に重ねていく

(家を建てていることを表す)

家を建てた

両手で家の形を作る

岩の上に

しっかりと四角く地面の形を示す

雨が降ってきた・雨が降り

指を広げ上から下へ振る

水が増し

手で水の高さを示し、少しずつ上げる

水あふれ

両手で噴き上がるようにする

その家は

両手で屋根の形を作る

大丈夫

ピース、バンザイ、ポーズ等々

砂の上に

手をナミナミと左から右に振る

その家はべっちゃんこ

家が倒れるように両手を倒す

ワークシート

✠聖書をひらいて (マタイ7:24~27) □の中に、ひらがなや、漢字をいれてね!

私のこれらの□□□□□□□□□□□□□□□□は 皆、

□□□に自分の家を建てた かしこい人に、似ている。

雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家をおそっても、たおれなかった。

私のこれらの□□□□□□□□□□□□□□□□

□は皆、□□□に自分の家を建てた おろかな人に似ている。

雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家におそいかかると、たおれてそのたおれ方がひどかった。

✠かんがえてみよう

質問① このイエスさまのたとえ話で、「家」とは、何でしょう?
「岩」(土台)とは何ですか?

質問② 家を建てる時、「建物」と「土台」と、どちらが大事ですか?

あなたなら、どこに、どんな、家を建てますか?

✠いってみよう

(しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

問25 イエスさまの 預言者としてのお働きはなんですか。

答 神さまのみことばを教えてくださいです。イエスさまは今も教会を通して、聖書と聖霊なる神さまによって私たちに語りかけてくださいます。ですから、私たちは心をこめて御言葉を聞きます。

✠やってみよう

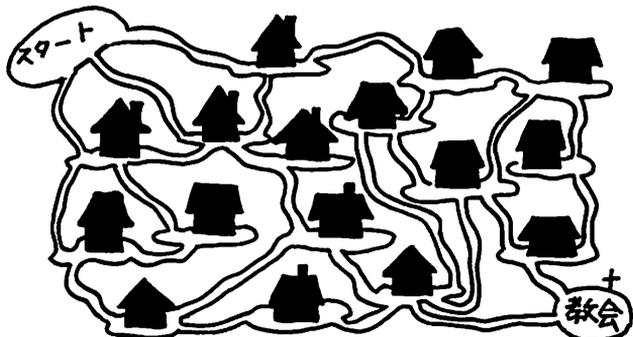
教会学校の案内のチラシを配りたいと思います。

スタートから教会まで、

全部の家を歩いていきます。

同じ道は、通れません。

レッツ、スタート!!



〈聖書をさらに深く〉

- この箇所は、5章から続く「山上の説教」の最後の部分です。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(5:44)など、知っている御言葉もあるでしょう。しかし、山上の説教を読んでも、それらを聞いて行うのは決して簡単なことではありません。岩の土台の上をしっかり和家を建てることなどできるでしょうか。
- 大切なことは、「権威ある者としてお教えになった」イエスさまご自身にまず目を留めることです。イエスさまは、神ご自身として、しかも救い主なる神の御子として、御言葉を語っておられます。そのイエスさまを信じるのが、土台を据える第一歩です。そこから、イエスさまご自身が、御言葉を行えるようにわたしたちを助けてくださるはずです。

〈教理を響かせるために〉

- 旧約聖書の預言者を知っているでしょうか。エリヤ、エリシャなどの名前と活躍を知っていれば話してみましょう(列王上17章～)。預言者は神さまの御言葉を語りましたが、イエスさまは神ご自身として御言葉を語られました。まさに預言者の中の預言者と言えるのです。
- 世の中には言葉があふれています。どの言葉を信じればいいのか、何が本当なのか、みんな悩み、でも結局は何も信じられずにいるのではないのでしょうか。また、世の中には「偽預言者」(マタイ7:15)もいて、人々を誘惑しています。聖書を通して今も語っておられるイエスさまの永遠の御言葉を信じましょう。御言葉こそが悩みと誘惑に打ち勝つ力です。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

3日(月曜日)

フィリピの信徒への手紙1章1～11節

- Q. パウロはあなたがたが何と何を身に着けるよ
うにと祈っている？

4日(火曜日)

フィリピの信徒への手紙1章12～19節

- Q. パウロは何を喜んでいる？

5日(水曜日)

フィリピの信徒への手紙1章20～30節

- Q. パウロにとって生きるとは？死ぬことは？

6日(木曜日)

フィリピの信徒への手紙2章1～11節

- Q. キリストは何でありながら、人間と同じ者になられた？

7日(金曜日)

フィリピの信徒への手紙2章12～18節

- Q. あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは誰？

8日(土曜日)

フィリピの信徒への手紙2章19～30節

- Q. パウロがフィリピに帰そうとしている、ひん死の重病にもかかわらずの兄弟は？

- 心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書17章6節～19節

(1) 御言葉に従う共同体

この箇所は、大祭司の祈りといわれる祈りの一部分です。これから十字架にお架かりになり、弟子たちの元を離れていく主イエスが、その弟子たちのために祈っているのが、この6節～19節です。

この弟子たちのための執り成しの祈りを始めるにあたって、神様から託された地上における業を完結したことを報告しています。主イエスは、御父が「世から選び出して……与えてくださった人々に」、神の名、つまり、神御自身をお示しくされました。その示された人々が主の弟子たちです。主の弟子たちは、主イエスと出会う前から既に神の所有でありました。キリストが神から「受けた」言葉によって、彼らはキリストを知り、キリストが神様から遣わされた方であることを知りました。彼らは、新しいイスラエルである神の教会、神の御言葉によって建て上げられた共同体です。主の地上での働きは、この地上の教会共同体の基礎を据えることであったのです。

(2) 弟子たちのための祈り

主イエスは、9節から本来のとりなしの祈りを始められます。この祈りは世のためではなく、御自身のものとなった人々、新しいイスラエル、神の教会のためのものであることが明らかにされています。

主イエスは、弟子たちと訣別するにあたって、「聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください」と願いました。それまでは、主イエス御自身が弟子たちと共におり、

敵から守ってきてくださいました。しかし、訣別したあと、彼らは敵にさらされます。それは、福音の言葉が語られ、その言葉を受け、その語られた言葉を信じることによって、この世の憎しみにさらされるからです。それは、信仰者がこの世から出たものではないことの証しでもあります。主イエスの願いは、敵の前にさらされる弟子たちを、この世において敵対者から守ることなのです。

この世から出たものではない彼らは、真理の言葉によって守られ、聖められなければなりません。真理の御言葉によらずに、彼らがこの世において守られ聖であり続けることはできないのです。この真理だけが、キリストにある共同体をこの世から全く自由にしてくださるのです。

しかし、このように守られる必要があるのは、敵から守られてキリスト者として地上の生涯を平穩に終えるためではありません。御父がキリストにお与えになった使命と同様の使命、つまり、この世に遣わされ、真理の言葉を伝える使命を成し遂げるためなのです。ですから、彼らは聖でなければなりません。この聖であるということは、彼らがこの世から区別され、また、この世に遣わされることなのです。

さらに20節以下では、弟子たちの宣教によって神の民となった者たちのために祈りがささげられています。

このように、主イエスは、御自身を神の民のためにささげられ、その民のためにとりなしの祈りをささげられたのです。 (春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問26

子どもカテキズム

問26 イエスさまの祭司としてのお働きは何ですか。

答 父なる神さまと私たちとの間に立つてくださる事です。

イエスさまは、かつて、

私たちの身代わりとなって、

十字架の上で御自分をいけにえとしてささげてくださいました。

今は、御父の右に座して、

私たちのために執り成しの祈りをささげていてくださいます。

ですから、私たちは心をこめてお祈りします。

証聖句 ローマ8：3, 34、ヘブライ2：17、5：5-7、7：24-25、9：12, 14, 28、ペトロ2：5

参考教理問答 『ジュネーヴ』38, 43、『ハイデルベルク』31、『ウ大教理』44、『ウ小教理』25

1. 最高の祭司・キリスト

祭司とは、神と人との間に立ち、神の民のために彼らに代わって神に仕える人のことです。言い換えれば、人の罪によって裂かれた神との関係の破れを修復し、神との交わりを回復また維持するために立てられた人だということです。

命の源である神に対する罪は、罪のない命によるほか償うことができません。旧約時代の祭司は、それを完全な動物の犠牲によって果たしました。けれども、私たちの主イエス・キリストは、罪のない御自分の体をただ一度いけにえとしてささげることによって、永遠の贖いを成し遂げられたのです（ヘブライ9：12, 28）。したがって、もはや私たちの罪のためになすべき償いなど何一つ残っていません（ヘブライ10：18）。私たちはただ赦されていることを喜び、大胆に神に近づき、失敗を恐れることなく神の子として生きればよいのです。主イエス・キリストこそ、唯一最高の大祭司です。

2. 今も執り成していただく

『ルカによる福音書』は、その最後で、手を上げて祝福しながら天へとお昇りになる主イエスの

姿を描いています（24：50-51）。これはおそらく、福音書の冒頭で、不信仰のために口が利けなくなって民を祝福できなかった祭司ザカリア（1：22）に対応しているのでしょう。

弟子たちを祝福したままの姿で天に上げられた主は、今も御自分の弟子たちのために執り成し続けておられます（ローマ8：34、ヘブライ7：25）。苦難のうちにある者のためには、身を乗り出してまで支えようとしてくださるのです（使徒7：55）。

主イエス・キリストの執り成しは、たんなる言葉だけの執り成しではありません。苦しみの何たるかを御自身体験して御存知であられるお方が、永遠の神として、私たちのために取り計らってくださるのです（ヘブライ2：17、5：7）。

3. 心をこめて祈る

私たちの主が執り成していただく以上、聞き届けられない祈りはありません。主の御名によって大胆に心をこめて祈りましょう（ヨハネ16：24）。それだけではなく、今度は私たちが他者のために執り成すことによって、主に仕える祭司となるのです（ペトロ2：5）。（吉田 隆）

テキスト ヨハネによる福音書17章6～19節

カテキズム 子どもカテキズム問26

(単元のねらい)

カテキズムは、大祭司としての主イエスについての教えとなっており、その内容は多様なものがあります。ここではその中の、わたしたちのために執り成し、祈ってくださる主イエスについて、考えていきたいと思えます。わたしたちは弱い存在ですが、そのわたしたちが自分の強さではなくて、主イエスの強さと祈り執り成しのゆえに、支えられ、守られていることへと思いを向けることができるようにしてください。説教者自身が自分の弱さや足りなさを深く自覚する中で、しかしそこで支えてくださる主イエスを仰ぎながら、主の祈りに今も覆い包まれ、抱きしめられながら、支えられていることの恵みと幸いを語るができること良いと思えます。

「わたしたちのために祈ってくださるイエスさま」

みなさんは、今、イエスさまがどこにおられるか、知っていますか。(ここで子どもたちの考えを聞いてください)。そうです。天です。天とは、どこか宇宙の先のかあなたにある場所ではなくて、まことの神さまがおられるところのことです。そこでイエスさまは、何をしておられるのでしょうか。地上でのお仕事が終わって、やれやれと思ひ、くつろいでおられるのでしょうか。それとも自分の好きなことをして、楽しんでおられるのでしょうか。みなさんは、今、イエスさまが天で何をしておられると思いますか。(ここで子どもたちの考えを聞いてください)。

今、イエスさまは、わたしたち一人一人のために、祈ってくださっているのです。これから十字架にかけられて、死ぬことを覚悟しておられたイエスさまは、最後の食事の席で弟子たちにお話されました。その中でイエスさまは、残される弟子たちのために、父なる神にお祈りしたのです。この人たちを「悪い者から守ってください」(15節)と。それは、ここに居る弟子たちが一人も滅びないで、永遠の命にあずかることができるように守ってくださいということだったのです(2節、6章39～40節)。そのためには、一人も漏れることなく、一人も欠けることなく、最後までイエスさまを信じつづけていくことができるように守ら

れる必要がありました。十字架にかかって、しばらくの間弟子たちと別れ別れになるイエスさまは、しかし弟子たちがイエスさまを捨て、イエスさまから離れてしまうことも知っておられたのでした。そこでイエスさまは彼らを守ってくださるようにと、祈ってくださったのでした。

イエスさまを裏切ったのは弟子たち全員でしたが、特にペトロはイエスさまを三回も知らないと言いつつ、イエスさまを完全に裏切ってしまいます。そのことを知っておられたイエスさまは、やがて自分を裏切るペトロのために、祈ってくださったのでした。そしてそのことを予告もされたのです。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけて神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけやりなさい」(ルカ22章31、32節)。

こうしてイエスさまは、ペトロの小さな信仰が無くならないように祈ってくださったのです。このイエスさまの祈りがあったから、ペトロは後で立ち直ることができました。それはペトロが立派だったからでも、しっかりとした信仰をもっていたからでもありません。ペトロは、イエスさまを捨て、裏切ることしかできないほど、弱くて情け

ない、だめな人でした。ペトロが後で後悔して、がんばったので立ち直ることができたのでもありません。そうではなくて、弱いペトロのために、イエスさまが祈ってくださった、このイエスさまの祈りが、ペトロを立ち直らせ、再び立たせていったのです。そしてまた必ず立ち直るから、立ち直ったら今度は他の兄弟を励ますことができるようにとも、祈ってくださったのです。このイエスさまの祈りが、ペトロは立ち直らせ、立ち上がらせていくことになるのです。

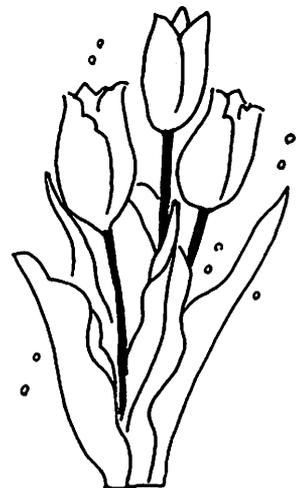
そして弱いペトロが守られて、立ち直ることができるために祈ってくださったイエスさまは、同じように弱くて小さなわたしたちのために、今も

天で祈ってくださっているのです。「だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座って、わたしたちのために執り成してくださるのです」(ローマ8章34節)。弱くて小さなわたしたちですが、イエスさまがいつも祈って守ってくださるので、大丈夫なのです。天でのイエスさまの祈りが、今日のあなたを支えていくのです。今日も、天で、わたしたちのために祈ってくださり、祈りをもって支え、励まし、強め、守ってくださるイエスさまを心から感謝して、心を強められて励んでいきましょう。

(三川栄二)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書22章31, 32節

わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った。
だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい。



〈主題〉

罪をとりなしてくださるただおひとりのお方。

〈ねらい〉

わたしたちのために罪をとりなしてくださるイエスさまの恵みを覚えて祈る。

〈展開例〉

みなさんは、だれかがいじめられているときにいじめている人に向かって、「よわいものいじめをするのはやめなさい」と言ったことがありますか。人と人との間にたって、ただしいことを言うのはとても勇気のいることですね。イエスさまは、神さまとわたしたちの間に立ってくださったお方です。わたしたちと同じようにマリアさんのお腹から生まれて、育って、大きく成長していきました。それは、ぜんぶ、わたしたちと同じように、いろいろな経験をとおして罪をとりなすことを学

べられるためです。わたしたちは、神さまの嫌われ、憎まれる罪のある「罪人」です。この「罪人」と罪のない、聖なる神さまの間に立つことのできるのは、ただこの人間になられたイエスさまおひとりだけです。

イエスさまは、十字架の上で、「父よ、彼らをおゆるしてください。自分が何をしているのか知らないのです。」と十字架にはりつけにした人びとのためにも、とりなしの祈りをささげました。今の生きておられるイエスさまは、わたしたちの罪のここをとりなしてください、神さまにささげるお祈りを聞き入れてくださいます。

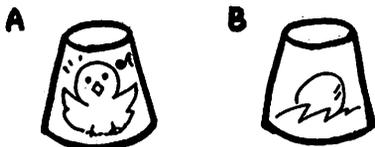
〈お祈り〉

天の父なる神さま、いつも、イエスさまのとりなしによって、わたしたちのお祈りを聞いてください。イエスさまのとういお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈いっしょいっしょ ピョン!〉

材料: 紙コップ 2コ、輪ゴム
色ペン、ハサミ

① 紙コップ2個に、色ペンで等しい絵をかく。



② Bの飲み口の方に、切り込めを4つ入れ、輪ゴムをかける。



(切り込めは、1cm〜3cm)



③ BをAにかぶせて、遊ぶ。(かぶせた身を「B0」と呼ぶ。ピョン!といっしょいっしょがっ!)

〈ねらい〉

キリストの三職を私たちとの関係で理解するようになる。

〈分級教師へのアドバイス〉

毎週必ず来る子どもたちがいる場合は、先週と今週と来週あわせて、連続した分級展開をすることができます。ただし、前週欠席していた子どもがいる場合は注意して、取り残してしまわないようにしましょう。

単語の正確な意味がわからなくても、子どもは覚えてしまいます。三職を何度も繰り返すことによって覚えてしまいましょう。

説明は、正確さより単純な覚えやすいものになっています。

預言者 「神様のことを話してくれる人」

祭司 「神様に私たちのことを話してくれる人」

王 「私たちを守ってくれる人」

〈展開例〉

①イエス様がなさる三つのお仕事のことを聞きましたね。イエス様には、三つのお仕事がありました。何だったか覚えてる？

- ・覚えてる
- ・預言者
- ・祭司
- ・王

②待つて待つて、一つずつ順番に言っていきましょう。最初は何？

- ・預言者

③二番目は？

- ・祭司

④三番目は？

- ・王

⑤「預言者」っていうのは、神様のこと、神様の言葉を私たちに教えてくれるお仕事でしたね。私たちはイエス様が教えてくれる神様のことをよく聞いて、その通りにするんですね。

⑥じゃあ、祭司ってどんなお仕事か知ってる？

- ・知らない
- ・知ってる

⑦「祭司」っていうのは、私たちのことを神様に話してくれる人です。私たちが神様にお願いしたいこと、神様に謝らなければいけないこと、神様に聞いてもらいたいことを、イエス様が伝えてくれるんですよ。

⑧みんなもゴメンナサイって謝らなければいけない時に、一緒に謝ってくれる人がいると嬉しいよね。どんな時でも、イエス様がみんなと一緒に神様にお話ししてくれるんですよ。

〈祈り〉

天のお父様、私たちが困った時、苦しい時、悲しい時に、イエス様が私たちの気持ちを神様に伝えてくれてありがとうございます。どうか私たちがイエス様を通して神様に心からお祈りを献げることができるようにしてください。主イエス様の聖名によってお祈りします。

✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて(ヨハネ17:6~19)

「聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって

ださいくまをもつてかられ (文字を並べかえてネ)

(ヨハネ17:11)

✝ かんがえてみよう

質問① イエスさまは、いつ？ だれのために、このお祈りをささげましたか？

どんな気持ちで、イエスさまはお祈りされたのでしょうか？

② イエスさまは、今どこで？何を？なされておられるのでしょうか？

✝ いてみよう(しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

問26 イエスさまの祭司としてのお働きは、なんですか。

答 父なる神さまと 私たちとの間に立ってくださることです。

イエスさまはかつて、私たちの身代わりとなって、十字架の上で御自分をいけにえとしてささげてくださいました。今は、御父の右に座して、私たちのためにとりなしの祈りをささげてくださいます。

✝ やってみよう ただしいのは、どちらでしょう？(ルカの福音書より)

ア ①イエスさまは、祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。

②イエスさまは、ガリラヤ湖のほとりで、いつも午前中にお祈りをした。

イ ①イエスさまは、どんな時でも、いつも弟子たちといっしょにお祈りした。

②イエスさまは、一人でお祈りすることも多くあった。

ウ ①「主の祈り」は、イエスさまだけのお祈りですから、弟子たちは祈ってはいけません。

②「主の祈り」は、弟子や私たちが祈るために、教えて下さった祈りです。

エ ①イエスさまは、「一度祈ったことを、何度もくり返して祈ってはいけません。」と言った。

②イエスさまは、「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」ことを教えた。

オ ①「奥まった自分の部屋に入り、かくれたところにおられるあなたの父に祈りなさい。」と教えた。

②「人の前では、なるべく長いお祈りをしなさい。」と教えた。



〈聖書をさらに深く〉

1. 福音書に描かれたイエスさまの祈りを知っているでしょうか。宣教を始められてすぐの頃、朝早くに祈っておられました(マルコ1:35)。また、弟子たちに祈りを教えてくださいました(マタイ6:9～)。そして、十字架の目前、ゲツセマネで激しい祈りをささげられました(マルコ14:32～)。イエスさまは祈りの人でした。今日の箇所の祈りは、同じように十字架の目前にある祈りですが、特に弟子たちのために祈られたものでした。
2. このイエスさまの祈りが、ただ弟子たちが守られるようにというのではなく、彼らが違わされるようにという祈りであることに注意しましょう。これに答えて私たちも、お守りくださいという祈りだけでなく、違わしてくださいという祈りもささげてみましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. けんかをしている人同士を仲直りさせてあげたことはあるでしょうか。一度こじれてしまった関係を元に戻すのは大変です。下手をすると、自分自身が両方を敵にしてしまうことにもなりかねません。イエスさまは、神さまと人間との敵対関係の間に立ち、双方から捨てられるという苦難を受けられました。しかし、それこそが、身代わりとして命をささげられた祭司としてのイエスさまのお姿です。イエスさまのとりなしによって、私たちは神さまと友好関係でいられるのです。
2. イエスさまを信じる私たちもまた祭司としての役割を果たします。それは何よりも、祈ることから始まります。周りに、祈りを必要としている人はいないでしょうか。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

10日(月曜日)

フィリピの信徒への手紙3章1～11節

Q. パウロは何族出身のヘブライ人？

11日(火曜日)

フィリピの信徒への手紙3章12～4章1節

Q. わたしたちの本国はどこにある？

12日(水曜日)

フィリピの信徒への手紙4章2～9節

Q. 主において常にどうすべき？

13日(木曜日)

フィリピの信徒への手紙4章10～23節

Q. パウロはフィリピからの贈り物を誰から受け取った？

14日(金曜日)

コロサイの信徒への手紙1章1～8節

Q. コロサイの信徒は福音を誰から学んだ？

15日(土曜日)

コロサイの信徒への手紙1章9～23節

Q. 万物は誰において造られた？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書19章28節～40節

(1) 王の入城の備え

主イエスの王としてのメシア啓示は、ロバの子の準備から始められます。ロバは馬などとは違い、通常、平和な仕事のために用いられました。そのようなロバは、平和の王が乗るのに最も相応しい乗り物であったとすることができます。

「主がお入り用なのです」との言葉だけでロバの子の所有をロバの持ち主以上に主張出来る主イエスの姿が、ここで示されます。その子ロバを引いてきた弟子たちは、自分の上着をロバの上にかけて主イエスを乗せ、さらに人々も上着を道に敷いたと言われています。ここには、特別にしつらえられた敷物があるわけではなく、人々の上着が敷かれているだけです。しかし、この上着が道に敷かれるだけで、王としての威厳が示され、人々の王に対する敬意が表されています（列王記下9章13節を参照）。

(2) 王の入城

王の入城の備えがなされた後、いよいよ主イエスはエルサレムへと向かっていきます。ここで注目したいのは主イエスと共にエルサレムに向かっていくのは、気まぐれな群衆ではなく、主イエスの弟子たちに限定されている点です。確かに弟子たちが主イエスが救い主であることをこの時点では十分に理解していません。しかし、この出来事が主イエスを信じる者たちのための出来事であることを印象づけていることは明らかです。

弟子たちは主イエスを王と呼んで賛美します。ここでの「王」との称号は、詩編118編26節や、あのクリスマスの夜に御使いたちが羊飼いに対して歌ったメシアを告知する言葉と結びついてい

ます。つまりここでの「王」との称号は、政治的な王ではなく、神から遣わされた、平和の王なるメシアをさしています。神から遣わされ、神の祝福を携えてきた平和の王が、今、エルサレムに入城して行かれます。このことによって、ゼカリヤ書9章9～10節の預言が成就したのです。

しかし、この王が必ずしも全ての人に受け入れられるわけではないという事実を、28節～40節を挟む前後の箇所から知ることができます。そこでは、拒絶される王と王を拒絶する都エルサレムについて語られています。

(3) この人たちが黙れば、石が叫びだす

この出来事を見ていたファリサイ派の人々が弟子たちの行為を批判するという部分は、ルカ独特の記事です。ここで、ファリサイ派の人々がどのような理由で弟子たちをしかってほしいと頼んだのかは分かりません。ただ、この出来事によっていずれにせよ、無自覚ではあったとしても、彼らが主イエスの立場に不賛成であることを表明したということはできるでしょう。

そのファリサイ派の人々の言葉に対して、主イエスは「この人たちが黙れば、石が叫びだす」とお答えになりました。これは、一つには、主イエスが王なるメシアである事実をもう隠しておく必要がなくなったことを表しているのでしょう。もう一方で、たとえその口が閉ざされたとしても、神が真理（主イエスが王なるメシアであること）の証人をお立てになるのであって、その証しは絶えることがないとおっしゃっておられるのです。

（春名義行）

カテキズム 子どもカテキズム問27

子どもカテキズム

問27 イエスさまの王としてのお働きは何ですか。

答 私たちの王さまとなってくださることです。

弱い私たちが悪に滅ぼされないように戦い、

私たちを従わせ、治め、お守りくださいます。

この王さまこそ真の王さまです。

ですから、私たちは心をこめて従います。

証契聖句 詩編110、イザヤ33:22、ヨハネ18:36、コリント一15:24-25、フィリピ2:10-11、

黙示録17:14。

参考教理問答 『ジュネーヴ』37,42、『ハイデルベルク』31、『ウ大教理』45、『ウ小教理』26。

1. 王の王・キリスト

イスラエルにとって、真の王は主（ヤーウェ）なる神のみです（詩編93、96-99）。地上の王は、すべてこの神の御心を行うようにと立てられた、神の代理人にすぎません。昔、預言者ナタンは、ダビデの末から生まれて永遠に王座を堅く据える、一人の王の出現を預言しました（サムエル下7:12-16）。ところが、実際に「ユダヤ人の王」としてお生まれになった方は、飼い葉桶に眠る乳飲み子（ルカ2:12）、子ロバに乗られる柔和なお方でありました（マタイ21:5）。この方の御国は、この世のものとは異なるのです（ヨハネ18:36）。

真の王なるキリストは、神の身分でありながら、自らを無にして僕の身分となられ、へりくだって、十字架の死に至るまで御父の御旨に従い通されました。それ故に、キリストは御父の右に上げられ、万物の主とされたのです（フィリピ2:6-11）。神の小羊イエス・キリストこそ、「主の主、王の王」です（黙示録17:14）。

2. 今も治めていてくださる

このお方は羊を導く羊飼いのように、御自分の御言葉と御霊によって、私たちの心を日々導いておられます。そればかりでなく、その力強い御手によって御自分の民を世界中から集め続け、治め続け、守り続けておられるのです。さらにまた、私たちの敵を御自身の敵とし、その力が荒れ狂う

ことのないように抑えておられるばかりでなく、ついにはそれを征服してくださいます（テサロニケニ2:7-8）。主は、万物の創造者であり統治者だからです。その統治は、自然界のみならず目に見えない諸々の霊力にも及びます（コロサイ1:16）。そうして最後の敵として滅ぼされるのが、死です（コリント一15:26）。御自身、死から復活されたお方だからこそ、死をさえ打ち破ることがおできになるのです。

ですから、私たちは安んじていられます。万物の王が、私たちの主イエスだからです。もし神が私たちの味方であるならば、誰が私たちに敵対できるでしょうか！（ローマ8:31）

3. 心をこめて従う

自分の意志で神から背き去った私たち人間を、神は力によってではなく、御子キリストによって現された愛によって御自分のもとへと導き返されました。私たちは、このお方の威厳の前に、恐れおののいてぬかずきひれ伏すのではなく、無限の愛による赦しの御言葉に服従を誓うのです。

キリストの御国は、ちょうど主が僕の姿で耐え忍ばれたように、未だ戦いの中に置かれています。にもかかわらず、私たちは、その中に働く主の愛の統治を信じ、心をこめてお従いするのです。

（吉田 隆）

テキスト ルカによる福音書19章28～40節
カテキズム 子どもカテキズム問27

〔単元のねらい〕

主イエスが王であられるということは、この世の普通の考えとはまったく違う王であることを、よく分らせてください。この世の王は人の上に立ってふんぞりかえり、威張り散らす王ですが、主イエスは人に仕える僕として来られ、その極みとしてご自分の命をも捨ててくださったのでした。ろばに乗った王とは、この十字架の主を指し示すものなのです。しかしこの平和な王こそが、世界を治め、宇宙を支配される「真の王」であり、その全能の主が、小さなわたしたち一人一人に目を留めて、祝福し、守ってくださるのです。

「ろばに乗った王さま」

みなさんは、昔の王さまとはどんな人だと思えますか。王さまが住む家はどんな家だと思えますか。王さまが着る服はどんな服だと思えますか。そして王さまの乗り物はどんなものだと思えますか。王さまというのは、御殿のように大きくて広いお城に住み、きらびやかで豪華で立派な服を着て、とても乗り心地よさそうなりっぱな馬車や車に乗るものです。そしてひとたび戦争となれば、それは立派なよろいやかぶとに身を固めて、いさましく軍馬にまたがり、さっそうと軍隊を引き連れていくのです。それが王さまです。

今読んだのは、イエスさまがエルサレムに入城されたときの場面でしたが、イエスさまはどんな乗り物に乗って、どんな様子で入られたのでしょうか。(子どもたちに聞いてみる) イエスさまが乗られたのは、ろば、それも「まだ誰も乗ったことのないろば」(マルコ11章2節)でした。まだ誰も乗ったことがない、つまりまだ一度も人を乗せたことがないろば、そのろばがイエスさまをお乗せしたのです。よく考えてみてください、まだ一度も人を乗せたことのないろばでは、物を背中に乗せただけで緊張してしまい、驚いてしまう、人を乗せるどころか物を乗せたってうまく上手に乗せられないに違いない、そんな未熟なろばを、イエスさまは選ばれたのです。おそらくイエスさまをお乗せしたら、よたよたとよた

つき、もたもともたついに違いないのです。ろばは、何度もイエスさまを落としそうになったり、もたつきながら、よたつきながらイエスさまをお乗せして、とにもかくにもエルサレムにお連れしたのではないのでしょうか。ろばに乗って入城するイエスさまの姿、しかもよろめいたり、もたついたりしながら、必死に足を踏ん張りながらろばにイエスさまをお乗せしているろばに乗ったイエスさまは、まるで漫画のような姿なのでした。しかもエルサレムの人々がイエスさまをお迎えしたのは、「主の名によって来られる方、王に祝福があるように」と言って、イエスさまを「王さま」として迎え入れたのでした。ろばに乗って、もたつきながら入城する王さま、それは王さまらしくない姿なのです。なのにどうしてイエスさまは、ろばに乗ってやって来たのでしょうか。

実はそのことを預言者が預言していたのです。預言者ゼカリヤは、やがて現れるイスラエルの王(メシア)は、さっそうとした馬ではなく、みっともないろばに乗って来ると預言していたのでした。「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声を挙げよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなく、ろばに乗って来る。雌ろばの子であるろばに乗って」。これまで人々が期待した王さま、メ

シアとは、軍馬にさっそうとまたがり、きらびやかな甲冑を身につけ、きら星のごとく立派な軍勢を引き連れてやって来る王さまでした。しかしゼカリヤは、よたよたとよろめきながら歩くろばに乗って入城するメシアを預言します。なぜ馬ではなくてろばかという、その王さまが戦争を終わらせて、真実の平和をもたらしてくださる方だからでした。だから軍馬ではなく、平和なろばに乗って入城されるのです。

軍馬に乗る王さまにとって大切なことは、力です。武力や暴力によって支配を確立することが、この王さまの仕事です。だから自分の力により頼み、自信を持ち、横柄です。力だけに信頼して、力しか評価しません。だからこの王さまの目に映るのは、力のある人だけです。腕の力だけではありません。政治を動かす力、本を書いたりできる頭の力、人の心をつかまえる力、立派な建物を建ててみんなをあとと言わせる力、ありとあらゆる力が目に入ります。しかし、この力の王には、力の陰で捨てられ、しいたげられ、苦しむ人々は見えません。力や才能だけが評価される世界では、力がなく才能がない人は差別され、ばかにされ、無視されます。

しかしゼカリヤの預言したメシアは、まさにろばに乗る王さまとして、最も無力で小さな者にこ

そ目を留め、ばかにされたり苦しめられている者をこそ強めて支え、弱くて軽んじられた者を守ってくださる王さまなのでした。そこには「仕えられるためではなく仕えるために」(マタイ20章28節) 来られたイエスさまの生き方が凝縮されているのです。このような王さまだから、イエスさまは「まだ誰も乗ったことのない子ろば」を、あえて選び、用いてくださったのでした。一度も人に乗せたことがなかった子ろばは、ホサナ、ホサナという群衆の大歓声に驚きながら、もたついたりよろめいたりして、何度もイエスさまを落としそうになりながらも、なんとかイエスさまをお乗せしてエルサレムにお連れしたのでした。子ろばもがんばりました。足を踏ん張って、一歩ずつ力を込めてイエスさまを乗せてエルサレムへの道を歩いていったのです。でも、それ以上に大切なのは、イエスさまがうまく乗ってくださったということなのです。まだ誰も一度も乗ったことのないその子ろばに、イエスさまが落ちないようにうまく乗ってくださった。だから、イエスさまは振り落とされず、イエスさまを最後までお乗せしてエルサレムに入城することができたのでした。このように子ろばに乗った王さまは、心優しく、小さくて力のないわたしたちをも、イエスさまのために用い、祝福してくださるのです。(三川栄二)

[今週の暗唱聖句] マルコによる福音書10章45節

人の子は仕えられるためではなく仕えるために、
また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。



〈主題〉

わたしたちを守ってくださるすべての人々の王。

〈ねらい〉

弱いわたしたちを守ってくださるイエスさまにすべてをゆだねて生きる。

〈展開例〉

みなさんは、病気やけがをしたときに、とてもこころぼそい思いをしたことはありませんでしたか。お父さんや、お母さんが、しっかりと看病してくれたら、み守ってくださると、とってもこころ強いですね。それと同じように、イエスさまは、神さまの力によって、弱いわたしたちをしっかりと守ってくださいます。イエスさまの力強さは、何といっても、十字架の死から三日目によみがえられたことに、一番よくあらわれています。死に打ち勝たれたイエスさまは、弟子たちに現れてく

ださり、天にあげられて、今も、世界中のひとびとの王さまとして、人々をしっかりと守ってくださっています。ですから、このイエスさまにすべてをおまかせして生きることほどこころ強いことはありませんね。イエスさまは、わたしたちの弱さを良く知っておられるだけでなく、わたしたちが悪いものに近づかないように、そのこころが引かれなように、守っておられます。イエスさまの守りの中で、しっかりと、神さまのみ言葉に従って、お祈りしつつ、きよく正しい道を、いっしょに進んでいきましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエスさまの守りによって、しっかりとみ言葉に聞いて、みんなといっしょに、お祈りすることができますように。イエスさまのとういお名前によってお祈りします。アーメン。

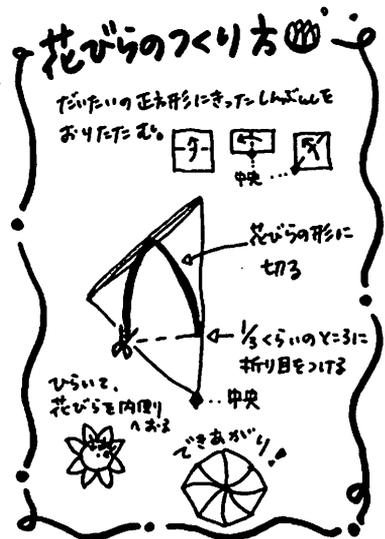
〈水れんをうかべよう〉

1. しんぶんしを花の形にきり。
2. 花びらの部分を内側に折り曲げる。
3. 水をはたした、たらい・トレイの上に花をそっと浮かべよう。

用意するもの たらい・トレイ
水・しんぶんし・ハサミ
(花がうかせる大きさをあらかじめ決めておく)



しんぶんしは、カラー部分をうまく利用して内側に色のある面を
使うと、よりきれいです。



〈ねらい〉

三職について、その働きを理解する。

〈分級教師へのアドバイス〉

「王様」の仕事が何かをイメージすることを目指しています。聖書物語をよく知っている子どもたちであれば、ダビデやソロモンからイメージを広げることができるでしょう。地元の殿様の逸話などでふさわしいものがあれば使ってみてはどうでしょうか。

〈展開例〉

①みんな王様って知ってる？

- ・知ってる

②王様って何する人か知ってる？

- ・お金持ち
- ・威張ってる
- ・舞踏会をする
- ・戦争をする

③そうそう。そんなこともするね。でも、王様の

本当の仕事は別にあるんだよ。

王様の本当の仕事は、国中の人たちが幸せに暮らせるように、もし困っている人がいたら助けてあげて、いじめられている人がいたら守ってあげるのが仕事なんだよ。

まるで、正義の味方みたいでしょ。

④悪い王様は威張ったり、戦争をしたりするけれど、イエス様はよい王様、本当の王様だから、威張ったり、弱い者いじめをしたりしないで、本当に困っている人を幸せにしてくれるんです。

⑤私たちが困った時や、苦しい時は、イエス様にお願ひすれば、イエス様は私たちのことを守っていてくれるんですよ。

〈祈り〉

天のお父様、イエス様がいつでも私たちのことを守っていてくれることを感謝します。どうか私たちが困った時、苦しい時、助けが必要な時に、イエス様が助けてくださいますように。イエス様の聖名によってお祈りします。



✂️ワークシート✂️

✝️聖書をひらいて(ルカ19:28~40)

おいのりによしゆうですがな

(文字を、ならべかえてね! ヒント:ルカ19:31)

Blank box for writing the answer.

イエスさまがエルサレムに入城した時に乗った乗り物を絵に描きましょう。

✝️かんがえてみよう

質問① なぜイエスさまは、エルサレムに入城されるのでしょうか?

② どうしてこの乗り物を、お選びになったのですか?

③ この世の王さまと、「王なるイエスさま」との違いはなんですか?

✝️いってみよう (しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

問27 イエスさまの王としてのお働きはなんですか。

答 私たちの王さまとなつてくださることです。弱い私たちが悪にほろぼされないように

戦い、私たちを従わせ、治め、お守りくださいます。この王さまこそ真の神さまです。

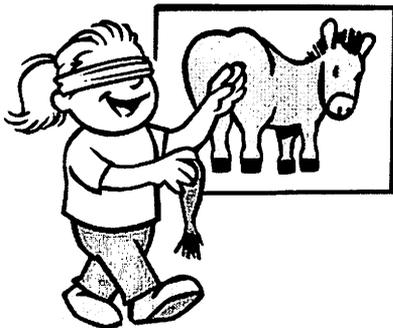


✝️やってみよう

王なるイエスさまが、戦い、守ってくださるって、ほんとうにうれしいネ。

エペソ6:10「主により頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。」とあります。

王さまに従う者として、「神の武具」を身につけましょう。エペソ6:10~20を読み、どんな武具が必要か、書き出したり、絵に描いてみましょう。



〈聖書をさらに深く〉

1. 誰にでも王様のように偉くなりたいという願いがああります。しかし、そのような思いは平和ではなく争いをもたらします。弟子たちも、そのようなことでもめたことがあります（マルコ10:41）。しかし、イエスさまは、偉くなりたい者は仕える者になりなさいと言われ、そして、イエスさまご自身がそのことを実践してくださいました。子ろばに乗ってエルサレムに入って行くイエスさまのお姿は、へりくだられた王のお姿です。そして、その向かわれた先は、十字架における身代わりの死、究極のへりくだりでした。

〈教理を響かせるために〉

1. 何か危険や誘惑から守られたという具体的な経験はあるでしょうか。それは運がよかったからでしょうか。自分がしっかりしていたからでしょうか。人の目にはそう見えることがあるかもしれませんが、私たちはそこに、王としてのイエスさまのお働きを見ます。今も生きて働いておられるイエスさまの力を、毎日の生活において、小さなことの中にも見出したいものです。
2. ただしイエスさまが王であるとは、イエスさまを便利なお守りのように考えるということではありません。王には従わなければなりません。イエスさまは御言葉と御霊によって支配されます。イエスさまにお従いするという思いをもって、聖書を読んでいるでしょうか。聖霊の助けを祈りつつ、御言葉に真剣に耳を傾けましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

17日（月曜日）

コロサイの信徒への手紙1章24節～2章5節

Q. キリストの内に隠されているのは何？

18日（火曜日）

コロサイの信徒への手紙2章6～19節

Q. キリストの内には何がどのように宿っている？

19日（水曜日）

コロサイの信徒への手紙2章20節～3章4節

Q. あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたもどうなる？

20日（木曜日）

コロサイの信徒への手紙3章5～17節

Q. 何によって、感謝して心から神をほめたたえる？

21日（金曜日）

コロサイの信徒への手紙3章18～4章6節

Q. 父親たちは、子どもをどうしてはいけない？

22日（土曜日）

コロサイの信徒への手紙4章7～18節

Q. 割礼を受けた者で神の国のために働く者となった三人とは？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書18章15節～17節

ここでは子どもたちをわたしの所へ来させなさいと招かれる主イエスの姿が描かれています。しかし、ここで大事なのは、14節との関連で神の国に入る条件について語っているという点です。

(1) 弟子たちによる拒絶

このところは、親たちが小さい子どもたち（乳飲み子までも）を主イエス・キリストの御もとへ、祝福していただくために連れて来たことから、始まります。当時は、高名なラビに自分の子どもを祝福してもらうという習慣があったそうですから、人々は自分の子どもをラビとしての主イエスに祝福してもらいたいと願ったのでしょう。しかし、弟子たちは、そのような願いを持つ親とその子どもたちを叱り、拒絶しました。

それは、エルサレムにおける最後の時（十字架）が近づいたという、緊迫した状況のためであったと思われる。しかし、弟子たちの非難からは、彼らの神の国理解が正しい理解からほど遠いものであったことが分かります。彼らが考える神の国とは、自分の力や能力などによって達成することが大きな部分を占めていたのです。そのために子どもたちを拒絶するのです。

(2) 主イエスの憤りと祝福

このような弟子たちの態度を主イエスは憤られます。主イエスは、「神の国はこのような者たちのものである」との宣言と共に、子どもたちを祝福しました。これは、自らの力がなくても全く理解力がなくとも、主の祝福が与えられることを示しています。つまり、主からの祝福は全くの恵みであることが明らかにされているのです。そして、主からいただく祝福を、誰も決して妨げて

はならないのです。

(3) 子どものように受け入れる

「子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と、主イエスは宣言なさいました。

「子どものように」とは、子どもの純粋さとか素朴さというようなものではありません。ここでは、乳幼児のような小さな子どもが念頭に置かれています。乳幼児は与えられるものを全て疑うことなく受けとります。そのようにすることができるのは、幼子と親の関係性への信頼があるのです。つまり、幼子は親を絶対的に信頼し、無条件に自らを委ねることができます。彼らは、何か自分の能力のようなもの、親への信頼以上のものは何も持ち合わせていません。しかし、その子どもたちのために、親は配慮し、全てを整えその必要なものを与えます。そのことによって、人が権利を主張したり、自らを誇ったりすることなしに神の国を受けることが明らかにされているのです。つまり、神の国の祝福は、親が子どもに全ての必要を与えるように、恵みとして神様から与えられるものであるのです。ですから、神の国を自分の持っているものによって取引をしようとするのではなく、ただ恵みを恵みとして受け入れることが求められるのです。

この短い箇所において、御言葉は、神の国に入る条件は、人間の功績などといったものによる取引によるのではないことを明らかにします。そして、ただ神様が恵みとして与えてくださる神の国を恵みとして受け入れる者こそ、神の国に入ることができるかと教えるのです。 (春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問28

子どもカテキズム

問28 主イエス・キリストの救いは、どのようにして私たちのものとなるのですか。

答 私たちが持っている正しさやかしこさ、そのほか、どんな良いものでも、
自分の力で救いを手に入れることはできません。

救いは、ただ神さまの恵みとして与えられるのです。

証契聖句 使徒20：24、ローマ3：24、ガラテヤ2：21、エフェソ2：5,8-9

参考教理問答 『ハイデルベルク』60-61

1. “ただ恵みのみ”

上記「参考教理問答」からもお分かりいただけるとおり、本問答に対応する部分は、通常の教理問答書の中にはありません（『ハイデルベルク』60-61も、直接的には信仰義認について教えるところですが）。それは、決して重要でないからなのではなく、むしろ救いに関するあらゆる教理の根源となっている真理だからです。

“Sola gratia”（ただ恵みのみ）は、ルターを始めとする宗教改革者たちの根本的主張の一つで、“Sola fide”（ただ信仰のみ）という信仰義認の教理と切り離せません。これらの教理は、救いの条件としての一切の人間の努力を否定しており、信仰そのものでさえも神の恵みによって与えられるものとされます（『子どもカテキズム』29-30）。

2. 私たちが持っているものではなく

日頃から他人の評価にさらされている私たちは、自分が何かを持っていれば、あるいは自分が何かをすれば認めてもらえる、と考えがちです。同じように、神様から認められるためには「正しさやかしこさ」が無ければならない、品行方正でなければだめに違いないと決め込んでしまうのです。

しかし、「救い」とは、認めてもらうことや評価されることではありません。溺れて今にも沈みそうな人に、「正しさやかしこさ」また品行方正であることを誰が求めるでしょう。死にかけている人を救い出す時には、何の条件も問わないので

す。そもそも条件付きの救いなど、「救い」の名に値しません。

私たちが持っている何のものにもよらず、私たちがするどのような行いにもよらず、神様は滅び行く私たちをただあるがままで（罪人のままの姿で）救い出してください。これが、神の救いなのです。この救いの知らせが「神の恵みの福音」と呼ばれるのは、そのためです（使徒20：24）。

3. 恵みによる救い

「恵みとして」とは、第一に、義務からではなくということです。神様には、人間を救う義務などありません。創り主の御心に背いて自らに滅びを招いた人間は、自業自得です。しかし、神は、義務からではなく、全く御自分の意志で人間を救おうと決意されました。御自分がお創りになった人間たちがただ滅んで行くのを見るに忍びなくて、憐れに思われて、お救いになったのです。恵みによってとは、愛によってということです。

「恵みとして」とは、第二に、何も見返りを求めないで、無償でということです。100%神が負われるということです。しかし、主キリストが罪の代価を払わねばならなかったのなら無償の愛とは言えないではないか、と思われるかもしれませんが。ここに、福音の奥義があります。実に、キリストは神御自身なのです！ つまり、神は文字通り自腹を切られたのでした。救いの恵みには、神の命が込められているのです。（吉田 隆）

テキスト ルカによる福音書18章15～17節
 カテキズム 子どもカテキズム問28

(単元のねらい)

主が下さる救いの恵みは誰に対しても提供されていること、そして、これを受けるのに何の代価も求められていないことを、まず覚えたい。ただもらえる物は、粗品ばかりとは限らない。最も高価な物もまたそうである。私たちがただ受けられるように、主はご自身の命を捧げて下さった。へりくだって、主の十字架の恵みを心に刻みたい。

「渴いている人は誰でも、わたしのところに来て飲みなさい」

主イエス様が、弟子たちを連れて旅をしておられた、ある日のことです。

イエス様に触れていただくために、人々は乳飲み子までも、みもとに連れて来たのでした。乳飲み子の親たちは、きっこう考えたことでしょう。「この子のために何が出来るだろうか……。そうだ、この子をイエス様のもとに連れて行こう。そして、御手を置いて祝福を祈っていただく。それに勝る良いことはない！」。さて、主に信頼してやって来た彼らを、弟子たちは、にこやかに迎えたでしょうか。そうではありません。弟子たちは彼らを叱ったのです。なぜでしょうか。乳飲み子たちは、騒がしく、時に所かまわず泣き叫ぶからでしょうか。それもありません。しかし、この時、弟子たちが叱ったのは、この時の特別な状況が深く関係していたと思われます。

この日、イエス様は都エルサレムを目指して進んでおられました。もう少しすると、主は三度目となる十字架の予告をなさいます。悲惨極まる十字架の死が目の前に迫っています。弟子たちは、その意味が分からなかったにしても、そのただならぬ雰囲気は十分に感じ取れたでしょう(18:31～34、9:45)。ピリピリとした緊張感の中で、弟子たちは言います。「さあ、今は、子どもたちを連れて帰りなさい」。

けれども、主は弟子たちを褒めません。反対に、マルコ10章によると、主はこれを見て腹を立て、弟子たちを叱って言われたのです。「子どもたち

をわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」。そして、主は十字架へ向かう歩みを止め、一人一人を抱き上げ、御手を置いて祝福して下さいました(マルコ10:13～16)。

さて、この時です。主は教えて下さいました。「はっきり言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」。そこで、この17節の御言葉について考えてみましょう。

まず、神の国に入るというのはどういうことでしょうか。それは、主イエス・キリストの下さる救いの恵みを自分のものとして受け取るということです。言い換えるなら、イエス様が下さる永遠の命の水をゴクンと飲み干すことです。主は、子どものように、と言われました。これは、子どものように、何のためらいもなくという意味に違いありません。子どもの良い点の一つは、贈り物をためらいなく喜んで受け取れるところにあります。例えば、午後3時頃「おやつだよ！」と声を掛けますと、大抵の子どもは、歓声を上げ、駆け寄ってきます。そして、遠慮なく食べ飲みます。お礼の品を後で届けなくてはならない、などとは考えません。感謝の言葉もそこそこに、好きなだけ平らげてしまいます。

ところが、大人は違います。走り寄ったのではみっともないと思われまいだろうかとか、ここでお菓子を戴いたなら、後でお返しをしなくてはならない、それならいっそ食べない方がよくはない

かなど、ややこしく考え始めます。そして、折角与えられていますのに、喜んで受け取ることが出来ません。

主は、祭りの終りの大いなる日に、立ち上がって大声で言われました。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい！」(ヨハネ7:37)。イエス様は、何もお返しの品を求めてはおられません。渴いている私たちを憐んで、ただで与えて、ただで受け取るように招いて下さっているのです。

私たちに求められているのは、子どもたちが贈り物をためらわずに受け取るように、主のもとにためらわずに駆け寄り、ゴクン、ゴクンと命の水をいっぱいを受けることであるのです。もしも、ただで受けることにためらいを覚え、心を閉ざしてしまうなら、その人は決して神の国に入ることは出来ません。

さて、では、最後に考えてみましょう。なぜ、主の下さる救いの恵みは、ただで受け取る以外ないのでしょうか。それは、主が下さる救いの恵みが最も値高いものであるからです。

こんな話があるそうです。

インドの話ですが、ある所にランバウという真珠採りをしている人がいました。一人の宣教師が、長い時間をかけてこのランバウさんにイエス・キリストのことを話し、救われるように祈りましたが、もう一步というところで、どうしても信じられないというのです。信じられないというより、このように考えるのです。「人間は罪深い。そのためにキリストはあんなひどい苦しみを受けて下さった。それなのに、人間は何もしないで、ただ信じればいいなんて、そんなことはとても考えられない」と。

それで、今まで属していたヒンズー教の習慣に従って、どうしても難行苦行の旅に出掛けると言

うのです。それは、ヒンズー教徒にとっては、救われるためにどうしても行わなければならない行事で、二度と家には帰れないかも知れないという覚悟があるほどのものでした。

出発の朝、ランバウさんは、一つの小箱をもって宣教師のところへお別れの挨拶にやってきました。その小箱の中には、今だかつて誰も見たことがないような見事な真珠が入っていたのですが、それを今までお世話になったお礼に受け取ってほしいということでした。驚く宣教師に彼が説明するのは、息子も真珠採りでしたが、この類のないほどの素晴らしい真珠を採るために潜って命を落としてしまったのだというのです。ですから、これだけはどうしても売る気になれず、今までとっておいたのだと言いました。

それを聞いた宣教師は、「そんな貴重なものをとてただでもらうわけにはいかない。借金をしてでも金を払うから、値段を言ってくれ」と言います。「いや、黙って受け取って下さい」とランバウさんは言い張ります。しばらく押し問答が続いたのですが、ついにランバウさんは怒り出して、「おもしろい。この真珠は、息子の命がかかっているんです。その息子の命に値段をつけられるものなら、つけてみて下さい」と開き直ったのです。宣教師は静かに語り始めました。「あなたこそ、神の賜物に値段をつけようとしているのがわからないのですか。神の独り子イエス・キリストがその尊い血潮をもって買い取って下さった救いを、どうして自分の業によって得ようとするのですか。どうして黙って、感謝して受け取れないのですか。」

やっと目が開かれたランバウさんは、その場にひれ伏して、「神様、お赦し下さい」と祈り出したと言うことです。(ウイリアムウッド著、『目ざめの時』、21ページ、いのちのことば社)。

私たちも、心からの感謝を捧げましょう。

(小野田雄二)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書18章17節

はっきり言うておく。

子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。

〈主題〉

わたしたちはただイエスさまの恵みによって救われる。

〈ねらい〉

イエスさまの恵みをこころから感謝する。

〈展開例〉

みなさんは、もし、水や食べ物がなくなったらどうなるか、考えてみたことがありますか。そうですね、とつてもどがかわいて、お腹がすいて、もし、ずーと何も飲まずに、何も食べずにいたら、死んでしまいます。毎日、あたりまえのように、お水を飲んだり、食べ物を食べたりしていますが、それは、ぜーんぶ、神さまの恵みですね。「恵み」とは、そのように、ただ神さまからいただくものことで、それをいただくわたしたちは「かんしゃすること」「ありがとう」と思って、大切に

することが大事です。イエスさまのくださる罪からの救いも、わたしたちにとってそれは「恵み」です。それは、ただ「いただくもの」「かんしゃするもの」です。イエスさまは、「わたしは命のパンです」、「わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」とおっしゃいました。

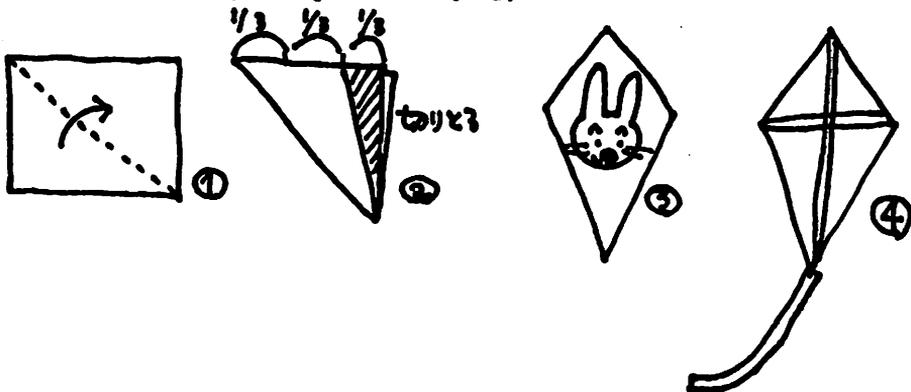
イエスさまの恵みをいただくとき、このように、わたしたちはこころから喜んで、イエスさまの恵みをかんしゃしましょう。そして、まわりの人々にその恵みを分かち合しましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエスさまの救いの恵みをくださり、ありがとうございます。この恵みをまわりの人々にお伝えできますように。イエスさまのとうといお名前によってお祈りいたします。アーメン。

♡ ちいさな タコ あげましょ。

- ① おりがみをさんかくに折って 1/3 を切り取る
- ② ひらいて おもてに 絵を描く
- ③ うらに 4等し パックや スロー等で ほわをかける
- ④ ひもをつけた たこを とばして あそぶ



〈ねらい〉

「恵み」という概念を理解し、救いが恵みであることを感謝する。

〈分級教師へのアドバイス〉

具体的なたとえば、話を子どもに身近に感じさせますが、個々の置かれている状況には配慮が必要です。今回の場合、家族構成、特に兄弟の有無や、母親との関係に配慮する必要があるか気を付けましょう。

〈展開例〉

①今日は、「恵み」ってことを聞きましたね。「恵み」って何だかわかる？

②恵みってのは、とても嬉しいことだけど、それが何かと交換じゃあ、それは恵みじゃないんだよ。

③例えば、友だちとおもちゃを交換したら、それは恵みかな？
・恵みじゃない

④みんなが誰かに優しくしてあげて、例えば、お母さんのお手伝いをして、お礼にお菓子を貰ったら、これは恵み？
・恵みじゃない

⑤テストで100点取ったからって、おもちゃを買ってもらったら、それは、御褒美だけど恵みじゃないよね。

⑥じゃあ、お母さんがみんなにご飯を作ってくれるのは、みんながお母さんに親切にしたからかな？

⑦みんなが何もしてなくても、お母さんはご飯を作ってくれるよね。

⑧神様も、みんなが神様に何かしてあげなくても、私たちに色々なものをくださるんですよ。

⑨中でも一番大切なのは、私たちの罪を赦すためにイエス様が十字架についてくださったことです。

⑩神様が私たちに与えてくださった恵みを感謝しましょう。

〈折り〉

天のお父様、私たちにたくさんの恵みをくださってありがとうございます。特にイエス様の十字架の恵みを感謝します。私たちが神様にたくさんの感謝をすることができるようにしてください。主イエス様の聖名によってお祈りします。



ワークシート



✠ 聖書をひらいて(ルカ 18:15~17)

しかし、イエスは乳飲み子を、呼び寄せて言われた。
「子供たちを、わたしのところに來させなさい。妨げてはならない。

・・・子供のように、□□□□□を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

(下のリストの文字を、表からさがして消していってください。
最後に残った文字を四角のなかに入れてみよう!)

ま	る	さ	や	ね
は	ら	か	こ	り
こ	び	よ	た	が
み	ろ	の	に	い
い	て	び	く	ま

マタイ・ヨハネ・マルコ
ピリピ・ガラテヤ・コロサイ



✠ かんがえてみよう

- 質問①弟子たちは、どうして、乳飲み子を連れてきた人々を、しかったのですか？
②イエスさまは、赤ちゃんを、呼び寄せて、「赤ちゃんのように、神の国を受け入れる人でなければ」といいました。「赤ちゃんのように」とは？

✠ いてみよう(しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

問 28 主イエス・キリストの救いは、どのようにして私たちのものとなるのですか。

答 私たちが持っている正しさやかしこさ、そのほか、どんな良いものでも、

自分の力で救いを手に入れることはできません。

救いは、ただ神さまの恵みとして与えられるのです。

✠ やってみよう

あなたの教会に、赤ちゃんはいますか？いっしょに遊んだことがありますか？ おむつの替えかたを教えてもらって、おむつ交換をしたり、ほ乳ビンでミルクを飲ませる経験などをさせてもらえたらいいですね。どんな気持ちがありましたか・・・？イエスさまが、おっしゃった「赤ちゃんのように」の意味がわかりましたか？

〈聖書をさらに深く〉

1. 赤ちゃんは私たちに何かしてくれるでしょうか。何もしてくれません。でも、私たちは赤ちゃんを見ているだけでうれしくなります。だっこしてあげたり、何かしてあげたくります。神さまも、私たちが神さまに何かいいことをするから愛してくれるのではありません。このままで神さまは愛してくださるのです。
2. 中学生は大人になっていく年頃です。素直に受け入れる心から、少しずつ、深く考えたり、悩んだり、疑ったりもするようになるでしょう。このすぐ後に、金持ちの議員（青年）の話が出てきます。いわば大人の世界です。しかしそこでもイエスさまは、「人間にはできないことも、神にはできる」と言われました。これも、「神さまの恵みのみ」という宣言です。乳飲み子も中学生も大人も、恵みによって救われるのです。

〈教理を響かせるために〉

1. イエスさまによって解決されなければならない私たちの問題は何だったでしょう。罪です。それは、努力すれば治せるような「病氣」でも、自然に治っていく「けが」でもありません。罪は「死」です。誰が自分の力で死を克服できるでしょうか。神さまの恵みだけが、罪という問題を解決してくれるのです。
2. この救いは、自分だけでなく他の人にも当てはまることです。自分に対しては「恵みのみ」と言っておきながら、他の人については、「あの人はクリスチャンらしくない」とか、「あれではクリスチャンになれない」とか、考えてしまっていないでしょうか。弟子たちは乳飲み子を「妨げて」しまいました。私たちは誰かを妨げてはいないでしょうか。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

24日（月曜日）

テサロニケの信徒への手紙一 1章1～10節

- Q. テサロニケの信徒は聖霊による喜びをもって何を受け入れた？

25日（火曜日）

テサロニケの信徒への手紙一 2章1節～12節

- Q. パウロは神の福音を伝えるばかりでなく、何さえ喜んで与えたいと願った？

26日（水曜日）

テサロニケの信徒への手紙一 2章13～20節

- Q. テサロニケの信徒はパウロの言葉を誰の言葉として受け入れた？

27日（木曜日）

テサロニケの信徒への手紙一 3章1～5節

- Q. パウロは誰をテサロニケに派遣した？

28日（金曜日）

テサロニケの信徒への手紙一 3章6～13節

- Q. パウロたちは、困難と苦難に直面しながら、何によって励まされた？

29日（土曜日）

テサロニケの信徒への手紙一 4章1～12節

- Q. 神の御心はあなたがたがどうなること？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書18章18節～30節

(1) 何をすれば受けることができるか

ここに登場する金持ちの議員は、主イエスに対して、「良い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と尋ねました。彼のこの問いの内にあるのは、自己満足的な信心の問題なのです。

(2) 主イエスの答えと指摘

その議員に対して、主イエスは、永遠の命に至る道は神の御言葉にのみ明らかにされていることをお教えになりました。御言葉に示される神の御心のみが聖であり、「永遠の命を受け継ぐ」の役に立ちます。その意味で、神様お一人が「良い」のであり、地上の「良い先生」に師事しなくとも、神にのみ聴くべきであることを教えておられます。

主イエスは、そのことをお語りになりながら、永遠の命の道、神に従う道を「あなたは知っているはず」だと指摘なさいました。

(3) 議員の答えと主の命令

議員は主イエスの指摘に対して、「そういうことはみな、子どもの時から守ってきました」と答えます。この答えの中に、彼の信心の形式主義と、彼が自分の信心に自信を持っていたことが明らかにされています。つまり、彼は表面的、また形式的に御言葉を守ることに於いて、自分の功績に自信を持っていたのです。そして、救いに対する不安から解放されるために、まだ足りないものがないかと功績の追加、または功績に対する確信を得ようとしていたのです。彼は、この最初の問いにおいて、救いに対する安心感を自らの功績と結びつけて得ようとしていました。

その彼に対する主イエスの答えは、彼の足りないものを指摘します。主イエスの指摘は、本当の

意味では御言葉に従うことができていない彼の現実をあらわにするものであり、彼の最も足りない点を明らかにするものでした。

(4) 悲しむ議員と主イエスの嘆き

主イエスの指摘によって彼は悲しみます。それは彼が金持ちであり、富を頼みとして生きていたためでしょう。富を偶像としている議員の姿です。その富を失うことを彼は恐れ、嘆き悲しんだのです。

そのような議員の姿を見て、主イエスは、「財産のあるものが神の国に入るのは、なんと難しいことか」とおっしゃいます。この主イエスの言葉は、金持ちが天の国から遠いことを語っているではありません。そうではなく、私たち自身の問題を指摘なさっているのです。つまり、神様を神様とせず、他の偶像を頼みとする罪人である私たち人間が、たとえ知識として聖書を知っていたとしても神の国に入るのは難しいということの指摘なのです。

(5) 神にはできる

主イエスは、「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通るほうがまだ易しい」とおっしゃいました。つまり、「それでは、だれが救われるのだろうか」との言葉の通り、罪人が自力で救われるのは全く不可能であることを明らかにします。

しかし、「人間にはできないことも、神にはできる」のです。神様には何も不可能なことはないのです。人間がどのような状況の中にあっても、神様だけは救うことができるのです。ですから、神の国に入れぬ「金持ち」でも、神の国に入らせることが、「神にはできる」のです。(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問29

子どもカテキズム

問29 神さまの恵みとは何ですか。

答 神さまが、一方的に、愛をもって、私たちを救いのうちに選んでくださったことです。

私たちは、聖霊のお働きによって、

自分を罪人と認め、悔い改め、イエスさまを信じることができました。

ですから、私たちは、心をこめて神さまを賛美します。

証拠聖句 使徒20：21、ローマ5：2、コリントニ3：16-18、ガラテヤ1：15、エフェソ1：4、

テサロニケニ2：13-14、テモテニ1：9、テトス3：5-6

参考教理問答 『ハイデルベルク』21、『ウ大教理』59、『ウ小教理』20,29,31,85

本問答は、問21で切り出された「神の救いの選び」の続きです。問22以降、この救いを可能にした「あがない主」イエス・キリストについて教えられて来ましたが、問28からはもう一度もとに戻って、その救いが「どのようにして私たちのものとなるのか」を扱っています。問28で言及された「神さまの恵み」の具体的な内容が、いよいよここから展開されるのです。

1. 一方的な選び

神の救いの恵みは、「一方的に」押し寄せてくるものです。雨がひと度天から降れば、必ず大地を潤し豊かな実りをもたらすように（イザヤ55：10参照）、神の恵みもまた、むなしくは終わりません。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」と主が言われたように（ヨハネ15：16）、神の選びは一方的です。

しかも、それは「愛をもって」迫ってきます。主イエス・キリストの救いがもし私たちの気まぐれな感情によって得られるものなら、気分次第で失うこともあるでしょう。しかし、何の取り得もない私たちを一方的に愛してくださったのが神であれば、私たちの救いもまた、決して揺らぐことはないのです。

2. 聖霊のお働きによって

いったいなぜ私たちは別の場所ではなく教会に導かれたのでしょうか。いったいなぜ別の時ではなくあの時に信じたのでしょうか。あんなにもかたくなだった私の心が、いったいなぜ信仰へと導かれたのでしょうか。不思議なことです。それはただ神の御業だと言う以外にありません。

父なる神が計画なさり、子なる神が実現なさった永遠の救いを、私たちに当てはめてくださるのが聖霊なる神です。神は私たちをロボットとしてではなく、知性も感性もある存在としてお造りになりました。ですから、信仰もまた、画一的なものではありません。その人その人の生い立ちや人生経験、知識や状況に応じて、聖霊がねんごろに当てはめてくださるのです。とは言い、いずれの場合も、御言葉によって罪をさとされ・悔い改めさせられ・心動かされて主イエスのもとへと導かれる点は、同じです。

3. 賛美の人生

天から降り注がれた救いの恵みは、私たちの心を満たし、やがて溢れ出ます。それが、賛美の人生です。「ああ嬉し、我が身も、主のものとなりけり。……讃えでやあるべき、御救いのかしこさ！」

(吉田 隆)

テキスト ルカによる福音書18章18～30節

カテキズム 子どもカテキズム問29

〔単元のねらい〕

主の憐れみ以外、望みのない一人一人であることを、まず覚えたい。そして、その私たちを救うために、主イエスが自ら貧しくなられたことと、そこに込められた私たちへの主の愛を覚えることをねらいとしたい。

「主イエスの御名を呼び求めよ」

主イエス様が、弟子たちを連れて旅をしておられたある日のこと。一人の議員が主のもとにやって来て尋ねました。「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことが出来るでしょうか」。

そこで、まず初めに、この人がどのような人であったかを考えておきましょう。

第一に、彼は議員です。おそらくユダヤ教の教会役員であったのでしょう。社会的にも高い地位を得ています。また、彼は青年でした(マタイ19:20)。若くして議員に選ばれるのですから、有能で、よほど人望があったのでしょう。さらに、彼は大金持ちです(23節)。そして彼は、子どもの時から良いしつけを受けてきた名門の出でもありました(21節)。なんだか、うらやましくて溜め息が出てきそうです。彼はそんな人でした。

ところが、こんなにもあれこれ揃っていながら、彼には救われている確信がなかったのです。言い換えれば、心満たされている実感がなかったのです。反対に、いつも不安で、心の中にポッカリ穴があいているかのようであったのです。彼が主に尋ねた言葉が、それを教えています。「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことが出来るでしょうか」。

さて、イエス様は答えられました。何をすればよいかは、もうすでに、律法の言葉によって示されているのではないかと、確かにその通りでした。なぜなら、例えば、申命記5章に次のように書かれています。「あなたたちは、あなたたちの神、主が命じられたことを忠実に、右にも左にもそ

れてはならない。あなたたちの神、主が命じられた道をひたすら歩みなさい。そうすれば、あなたたちは命と幸を得、あなたたちが得る土地に長く生きることができる」(申命記5:32～33)。忠実に、心からの感謝と喜びをもって主の戒めに従うなら命と幸を得る。このことは、すでに約束済みであったのです。

すると彼は答えました。「そういうことはみな、子どもの時から守ってきました」。この答えは、人はみな罪人であると教えられ、まったくその通りだと信じてきた私たちにとっては驚きです。しかし、ユダヤの人たちの考えでは、この言葉に特別の自惚れの響きはありません。ちょっと真面目なユダヤ人なら皆、こう言えたそうです(参照フィリピ3:6)。

しかし、ではなぜ、幸いではないのでしょうか。心は満たされていないのでしょうか。それは、彼が主の戒めに従っていないからです。なるほど、世間の基準からいえば合格点に十分達しています。全部守っています、とためらいなく言うことが出来ます。しかし、神様の基準からすると、彼も律法違反者であったのです。これでは、律法によっては、命も幸も得られません。

イエス様は、戒めに従っていないことを彼に教え示すために言われました。「あなたには欠けているものがまだ一つある。持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい」。

神様が下さった戒めは、すべて二つに要約されます。一つは、心を尽くしてあなたの神である主

を愛すること。もう一つは、隣人を自分のように愛することです（マタイ22:34~40）。

さて、彼は隣人を自分のように愛していたでしょうか。いいえ、違います。なぜなら、彼は大変な金持ちであり続け、町には貧しい人々が何人もい続けたからです。もしも、彼自身が貧しい彼らと同じ境遇に置かれたなら、彼はどうするでしょうか。間違いなく、自分の家の蔵の扉を開け、その財産を売ってパンに替え、また、毛布に替えることでしょうか。そう、もしも、貧しい隣人を自分のように愛するならば、彼の屋敷の財産はすべて売り払われ、蔵は空になります。しかし、現実とは違いました。彼の屋敷の蔵は金や銀で満ち、一方、町にはおなかをすかせた貧しい人の姿がなくなっただけではありません。この朝も、彼は蔵に鍵がかかっていることを確かめてきたばかりです。

彼は、主イエス様の求めに従うことが出来ません。彼は、この時初めて気付いたことでしょうか。私は、主の戒めを守れてはいなかったんだと。けれども、彼は神の国から遠くありません。なぜなら、彼は怒って立ち去ったのではなくて、非常に悲しんだからです。

イエス様は言われました。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」。針の穴を通るらくだを見た人はいません。まったくあり得ないことです。また、何も神の国に入れないのは金持ちばかりではありません。

せん。隣人を愛せない点で、私たちも律法違反者であることに変わりはないからです。初めに見たように、彼はうらやましい限りの人でした。しかし、彼が持っていた社会的な地位も、人々からの尊敬や信頼も、良いしつけの内に生きてきた経歴も、若さも、豊かな財産も、どの一つをとっても、あるいは全部まとめてみても彼の心を満たすことはできませんでした。さらに、命と幸を約束している律法はありますが、誰もこれを成し遂げる力も愛もありません。人々は問います「それでは、誰が救われるのだろうか」。イエス様は答えられました。「人間にはできないことも、神にはできる」。

できないことをその通りに認めるのは、難しいことです。罪人は、常に自分は偉いと思いたがるからです。しかし、今日へりくだって、自分では自分を救い得ないことを認めましょう。なぜなら、それが事実であり、そして、私たちにはできないことを主イエス様がしてくださったからです。

主イエス様は、私たちが豊かなものとするために、自ら貧しくなられました（コリント二8:9）。私たちに命と幸いをいっぱい注ぐため、自らはその力もいつくしみも忍耐も、そして十字架上で命まで、みんな私たちに与えてくださいました。主の蔵は空っぽです。

永遠の命を受けるために、為すべきことは何でしょうか。それはただ一つ、あなたを愛して下さっている主イエス様の御名を呼び求めることであるのです（ローマ10:12-13）。（小野田雄二）

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙10章12~13節

ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、

御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。

「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。

〈ねらい〉

神様が私たちを選んでいてくれることが私たちの救いの根拠であることを確かめる。

〈分級教師へのアドバイス〉

神様の選びが不思議なものであることを強調しましょう。クリスチャンホームの子どもであっても、教会に来るのは神様の不思議な選びによるものであることを覚えることは大切です。CS 教師に、信仰に導かれた時の証しがあれば、ポイントを絞って話すのも良いでしょう。

〈展開例〉

①みんなは、教会に来て、イエス様に救っていただいていますね。どうして、みんなは教会に来るようになったのかな？

- ・お父さんお母さんに連れてきてもらった。
- ・友だちに誘われた
- ・チラシをもらった

②お父さんお母さんに連れてきてもらった人は、どうしてお父さんお母さんが教会に来るようになったか知ってる？

- ・知ってる
- ・知らない

③実はね、神様がみんなのことを呼んでくださったから、それでみんなは教会に来るようになったんだよ。

④実は、神様は、友だちを使ったり、チラシを

使ったり、みんなのお父さんやお母さんを使って、みんなが教会に来るようにして下さったんですよ。

⑤ところで、神様がみんなを教会に呼んだのは、何でだろう？

- ⑥みんなが勉強ができたから？
- ・みんなが真面目だから？
 - ・みんながよい子だから？

⑦実は違うんです。みんなが勉強ができなくても、まじめじゃなくても、よい子じゃなくても、神様はみんなのことを選んで、教会に来るようにして下さるんですよ。

⑧神様がみんなのことを大切に思ってくださって、みんなを救ってくださろうとして、そしてみんなは教会に来るようになったのです。

⑨だから私たちはみんな神様が私たちを救ってくださったことを感謝しなくてはいけないですね。

〈祈り〉

天のお父様。神様が私たちを選んでくださり、本当に不思議な導きで私たちが教会に来るようにして下さっていることを感謝します。私たちが教会に結ばれて神様の恵みを受けることができる者としてください。主イエス様の聖名によってお祈りします。

ワークシート

✠ **聖書をひらいて(ルカ18:18~30)** 「それでは、だれが救われるのだろうか」といって、イエスは、

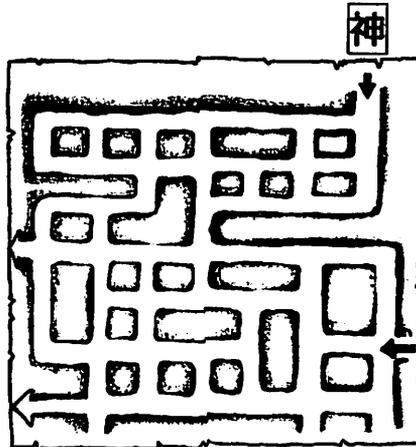
ルールは、まっすぐにはか進めず
突き当たりならどちらに曲がっても良いです。



といわれた。

できない

できる



✠ **かんがえてみよう**

質問① お金持ちの議員は、子供の時から十戒を守ってきたことを誇りにしていましたね。お金もある、十戒も守っている、人々から尊敬もされている彼が、十世永遠の命を受けていなかったのでしょうか？

✠ **いってみよう** (しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

問 29 神さまの恵みとは何ですか。

答 神さまが、一方的に、愛をもって、私たちが救いのうちに選んでくださったこと
とです。 私たちは、聖霊のお働きによって、自分を罪人と認め、悔い改め、イエスさまを信じることができました。ですから、私たちは、心をこめて神さまを賛美します。

✠ **やってみよう**

先週は、「子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と学びました。今日の議員は、子どもとは、正反対ですね。きちんと十戒を守り、律法を守り、人の目には完全だからです。なんでも、自分の力で、できました。すべて努力の結果です。しかし救いは恵みであり、「人間にはできないが、神にのみできること」だからです。まだ、信仰告白をしていないお友達や 洗礼を受けていないお友達は、そのために真剣にお祈りをし始めましょう。信仰告白、洗礼のことについて担任の先生から証をうかがったり、互いに話し合ってみましょう。

〈聖書をさらに深く〉

1. イエスさまはまず、「何かをする」ことで救われると考えることの誤りを指摘されているようです。私たちもそのように考えてしないでしょうか。「いじわるをしないこと」、「うそをつかないこと」、「教会へ行くこと」。これらはもちろん大切なことです。しかし、それらのことを「する」ことで救われるのではありません。私たちは自分には甘いもので、必要なことはだいたいできていると考えています。でも、イエスさまの目からすると、私たちには不十分どころだらけです。金持ちの議員になったつもりで、自分に欠けているところは何か、考えてみましょう。そのとき初めて、「神にはできる」ということの意味が分かるでしょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 私たちは何かを選ぶとき、どちらがいいか悪いかという規準で判断をします。しかし、もし神さまがそのように判断をされたら、罪人の誰も選ばれることはないでしょう。しかし、神さまは、ただ愛のゆえに、ふさわしくない私たちを選んでくださいました。今こうして教会学校に集い、聖書のお話を聞いているということも、神さまからの招きの中にあるからです。お父さんお母さんが決めたのでも、自分で決めたのでもなく、まず神さまが、みんなが教会へ来るように決めてくださったのです。
2. しかし、神様を「信じる」ということは、私たちが自分ですることではないでしょうか。しかし、聖書とカテキズムによれば、そこには聖霊の働きがあります。そして、聖霊のその働きには失敗がありません。このことを、有効召命と言うのです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

31日（月曜日）

テサロニケの信徒への手紙一4章13～18節

Q. 何が鳴り響くと主が天から降って来られる？

1日（火曜日）

テサロニケの信徒への手紙一5章1～11節

Q. あなたがたはすべて何の子？

2日（水曜日）

テサロニケの信徒への手紙一5章12～28節

Q. いつもどうする？ 絶えずどうする？ どんなことにもどうする？

3日（木曜日）

テサロニケの信徒への手紙二1章1～12節

Q. 主イエスは何の中を来られる？

4日（金曜日）

テサロニケの信徒への手紙二2章1～12節

Q. 主の日は既に来てしまった？

5日（土曜日）

テサロニケの信徒への手紙二2章13～17節

Q. パウロが何で伝えた教えを固く守るべき？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書15章1～10節

旧約聖書では、神様は神の民をぶどうに喩えて語ってきました（イザヤ書5:1-7、エレミヤ書2:21、詩編80:9）。それは、神様がイスラエルの民を奴隷の地エジプトから、約束の地カナンに連れて行かれ、イスラエルの民が神様の豊かな恵みと祝福によって導かれていることを語るものでした（詩編80:9）。ところがイスラエルは、主なる神様の御前で罪を犯し、神様から離れて行きました。それ故、神様は預言者を通して、このように語りました。「よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。……しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった」（イザヤ書5:2）。

主イエスは、このヨハネ福音書15章において、神様と神の民である私たち、そして仲保者キリストとの関係を改めて示してくださいました。

旧約のイスラエルの民にとって、ぶどうの木である仲保者は、おぼろげであり、未完成な予型に過ぎませんでした。しかし、ここで主イエスは「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」（1）とお語りくださり、私たちの霊的ないのちは、キリストに結ばれることにより、主なる神様つながっていることをはっきりと宣言してくださいました。キリストにつながることで、霊的な栄養は、神様から全て与えられ、神の子としての必要な養いがなされていくのです。

これはすべて主なる神様から私たちに与えられた一方的な恵みです。なぜならば、ぶどうの木に「豊かに実を結ぶように手入れをなさる」（2）農夫は、まぎれもなくキリストが「わたしの父」とお語りくださる主なる神様だからです。

そしてキリストは、「わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている」（3）と宣言してくださいました。キリストの十字架により罪の赦しがなされ、永遠の生命が与えられたことを受け入れる者は、既に神様によって聖められているのです。これは仮定でも、推測でもなく、神様による決定事項なのです。

一方、キリストにつながろうとしない人々は、一見、この世の生活を自らの力で生き抜こうとする勇ましさはありますが、まことの救いをもたらしてください、ぶどうの実を結ばせてくださるキリストからの霊的栄養が与えられないため、霊的な実りを結ぶことができないのです（4,5b-6）。

だからこそ、私たちは、キリストに結ばれることにより、神様の御言葉を受け入れ、御言葉に聞き従うことにより、神様からの豊かな霊的な恵みと祝福を受け続けることが求められています。

（辻 幸宏）

カテキズム 子どもカテキズム問30

子どもカテキズム

問30 神さまの恵みは、どのようにして私たちに与えられますか。

答 聖霊なる神さまが私たちに信仰を与え、

私たちを主イエス・キリストと一つに結び合わせてくださることによってです。

伝言ゲームにおいて、最初に伝えられた言葉が最後の人に到達するときには、歪められています。アイスクリームを買って帰るとき、保冷剤をもらわないと、家で食べるときには溶けていることがあります。問30が問い掛けていますことは、神さまが用意してくださった恵みが、どのようにして、私たちの手元に届けられるかです。折角の恵みも、届け方が悪いと、私たちが受け取る時には恵みの有り難さが半減しているかもしれません。

神さまは、宅急便の配達人のように誰かを遣わして、恵みの小包を届けてくださるかもしれません。しかし、そのときも、実は、神さまご自身がお出でくださっているのです。神さまご自身であるイエス様が、救いを十字架と復活において達成してくださったように、神さまご自身である聖霊が私たちに恵みを届けてくださいます。ですから、決して、間違っただけ配達されたり、途中で紛失することはありません。確実に恵みは届けられます。

聖霊なる神さまが確かに届けてくださっても、もしかしたら、私たちがそれを受け取るときに、落としてしまうかもしれません。しかし、聖霊なる神さまは、私たちの心のうちに働いて、神さまの恵みを受け取る信仰という両手を、支えてくださいます。信仰は、私たちが信じる信仰であり、私たちが主に従おうとする決心です。その信仰とは、実は、もうすでに聖霊なる神さまによって与えられ育まれた神さまからのプレゼントです。聖霊なる神さまによって与えられた信仰の手で、イエス様の救いの恵みを受け取るのです。

更に、この問30は、恵みとは何かをも端的に説明しています。イエス様は、神さまが私たちと共にご一緒に「インマヌエル」の救い主です。私たちは、イエス様と共にいる限り、神さまから離れることはありません。聖霊なる神さまは、私

たちに信仰を与え、二度と離れることがないように、私たちをイエス様と一つに結び合わせてくださり、神さまと結びつけてくださいます。罪深い私たちがイエス様と一つにされたこと自体が、私たちにとって一番の恵みです。イエス様がいつも共にいてくださることにまさる恵みはありません。

その結び合わせ方は、性質の違う二つの物をロープで縛るような仕方ではありません。また、一つに結ばれるとは、私たちとイエス様とが溶け合って、イエス様でもなく私たちでもない、イエス様と私たちが融合した新しい何かが生ずるということでもありません。私たちは私たちのままで十字架の血に滑められ、イエス様と一つに結び合わされ、イエス様はイエス様のままで私たちと結ばれてくださいます。人であり同時に神であられるイエス・キリストにおいて、人性と神性とは混合することなく、融合することなく、しかし、統合されています。この神秘的なイエス様が、私たちとも一つに結びつくことを望んでおられます。その意味で、イエス様と一つに結びつくとは、私たちの思いを超えた神秘的結合です。

その際の一致のイメージは、ヨハネによる福音書15章に記されているように、イエス様のぶどうの幹に接ぎ木されたフドウの枝となるような一致です。ぶどうの幹の養分がすべてぶどうの枝に行き巡り実を实らせるように、一つの身体に同じ血液が流れているように、イエス様と私たちは、聖霊なる神さまによって、結び合わされています。聖霊なる神さまが、私たちをイエス様と結び合わせてくださったおかげで、イエス様のうちに宿る恵みが私たちを養います。イエス様が十字架と復活において私たちのために獲得されたすべての恵みが、イエス様と一つに結び合わされていることによって、私たちのものとなります。(岩崎 謙)

テキスト ヨハネによる福音書15章1～10節
カテキズム 子どもカテキズム 問30

(単元のねらい)

キリストを信じる者の命のありかたということが的確に、鮮やかに表現されたたとえである。私たちは主イエスにつながっているときにはじめて生きることができること、主イエスから離れた私たちの命はあり得ないことを覚えたい。

「わたしにつながっていなさい」

一本の木を思い浮かべてみてください。太い幹が深く根をはって、しっかりと立っています。そして、幹から枝が分かれて伸びています。枝は青々とした葉をしげらせています。季節によって、木は花を咲かせ、豊かな実をみのらせます。

さて、皆さんに考えてほしいのは、木の幹と枝との関係です。枝はなぜ生きているのでしょうか。なぜ葉をしげらせ、木の実をみのらせることができるのでしょうか。

それは、枝が幹とつながっているからです。幹からじゅうぶんな水や栄養が枝々にまで、梢にまで運ばれます。だから枝は生きることができるのです。実を結ぶことができるのです。もしも枝が幹から折り取られてしまったら、どうなるでしょうか。もちろん枯れてしまうのです。そのように、枝は幹としっかりとつながっているときにこそ、命を保つのです。枝はひとりでは生きていけないのです。

実は、幹と枝の関係は、イエスさまと私たちの関係によく似ています。イエスさまは仰せになります。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」(5節)

イエスさまはぶどうの木、私たちはその枝です。そして、イエスさまこそ私たちに命を与え、私たちの命を養い守り、豊かに実らせてくださるお方です。枝が幹につながることで初めて生きることができるように、私たちがイエスさまにしか

りにつながっていることで、はじめてほんとうの命を生きることができるのです。私たちが生きるときに必要なものすべては、命の君であられるイエスさまから来るからです。

皆さんは、私は自分ひとりでちゃんと生きていける、イエスさまがともにいてくださらなくても、自分の人生は自分の手できりひらいていけると思いませんか。けれども、それはまちがいです。イエスさまにつながってなければ、イエスさまがともにいてくださらなければ、私たちは一日たりとも生きてはいけません。イエスさまから離れることは、命のみなもとを断ち切られてしまうことだからです。「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながってなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながってなければ、実を結ぶことができない。」(4節)

永遠の命の祝福をいただくことができるように、イエスさまとしっかりとつながっていきましょう。

さて、イエスさまとつながっているということを考えるときには、そのつながりかたということもとても大切です。つまり、中途半端につながっているのではなく、かたく、しっかりとつながってなければならぬのです。イエスさまのみ声を片方の耳で聞いて、もう片方の耳はほかの声のほうにかたむけるというのではないのです。イエスさまに半分だけ信頼して、もう半分はこの世の

何かに頼るというのではないのです。そういうつながりかたをしているかぎり、わずかな風でぼきりと折れてしまうでしょう。ほんの少しの試みにも耐えることができないでしょう。

私たちの命の君は、イエスさまおひとりです。私たちの命を生かす力は、ただイエスさまからだけ来ます。ですから、イエスさまにしっかりとつながっていきましょう。ただイエスさまを見上げて歩みましょう。

イエスさまは、私たちがしっかりとご自分とつ

ながっていることができるように、さまざまな恵みを備えていてくださいます。ちょうど幹が枝に水や栄養を送るようにです。それはイエスさまのみ言葉であり、イエスさまの教会であり、祈りです。教会の礼拝を大切にしましょう。日々聖書を読み、祈りましょう。そうすることで、イエスさまとしっかりとつながることができます。イエスさまの命の恵みに生かされて生きることができます。
(木下裕也)

「今週の暗唱聖句」 ヨハネによる福音書15章5節

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、

その人は豊かに実を結ぶ。

わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。



〈主題〉

イエスさまにしっかりつながって生きる。

〈ねらい〉

イエスさまの祝福を感謝し、洗礼の恵みを思い起こす。

〈展開例〉

みなさんは、お母さんのお腹の中にいたときへその緒でつながっていたことを知っていますか。そうですね、みんなオヘソがありますね。お父さんや、お母さんとお手をつないで道を歩くときはとてもあんしんですね。でも、自分から手を離して、車の前に飛び出したりしたらとっても危ないですね。それと同じように、わたしたちはしっかりイエスさまにつながって生きることがとても大事です。つながるということは、その人と一つになる、ということです。一つになる、ということは、その人と良いものを分かち合って生きる、

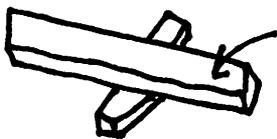
ということです。おなかの中の赤ちゃんがお母さんから栄養をもらうように、わたしたちも、イエスさまから、みことばという栄養、生きる恵みをしっかりといただくことがとても大事です。

洗礼式は、このイエスさまの恵みによってイエスさまを信じているお父さんや、お母さんの子どもにも授けられます。それは、イエスさまにしっかりとつながっています、という小さなしるしなのです。ここからいつもイエスさまにつながって生き、洗礼の恵みにもいっしょにあずかりましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエスさまにしっかりとつながることができるよう。洗礼の恵みを忘れないで、生きることができるよう。イエスさまのとういお名前によってお祈りいたします。アーメン。

♡ ふみこみ 玉入れゲーム



ココへ

やわらかい玉、

(しんぶんしを丸めて作ってもよい)

◎ 片側をふんで玉入れをして遊ぶ。

〈ねらい〉

神様との結びつきが私たちが生かしていることを理解する。

〈分級教師へのアドバイス〉

実際に鉢植えなどがあれば、比べて見せるのも方法でしょう。ふさわしい植物がなければ、電気製品とコンセントなども現代的でよい譬えになるかもしれません。

〈展開例〉

①礼拝の時には、教会にお花が飾ってありますね。でも、月曜日か火曜日には、このお花は捨ててしまいます。どうしてかわかる？

- ・枯れてしまう

②そうですね。花瓶に生けていた花はすぐに枯れてしまいます。

でも、鉢植えの花はそんなにすぐには枯れないでしょ？ どうしてだろう？

- ・土があるから
- ・根っこがあるから

③そうです。そうです。鉢植えの花は、根っこがあるから、栄養や水をたっぷり吸い込んで、たくさん花を咲かせて、長生きすることができるんです。

④お花はキレイですけど、根っこがなければ、花を咲かすことはできないんですよ。

⑤みんなは、イエス様を信じて、教会に来ることが、みんなの根っこになるんです。教会に来ないでいると、その時はキレイに花が咲いていても、すぐにしおれて、新しいお花をつけることができなくなってしまうんですよ。

⑥みんなキレイなお花をつけることができるように、イエス様のお話をよく聞いて、教会に来るようにしましょうね。

〈祈り〉

天のお父様。私たちがいつでも元気にいられるように、イエス様にいつも結びついていられるようにしてください。イエス様の聖名によってお祈りします。

✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて(ヨハネ15:1~10)なんて書いてあるのかな？両端をそろえてタテに読むとわかります。



			っ	た	た	な	な	わ
		て	に	し	さ	が	た	
い	つ	も	て	っ	し			
			る	な	あ	。	て	に
		。	が	な	わ	い	つ	

✝ かんがえてみよう

- 質問①あなたは、「ぶどう」が好きですか？甘くて、大粒のぶどうの実を突らせるためにはどんな世話が必要だと思いますか？
- ②わたしたちは、どうしたら、イエスさまにつながる事ができるのですか？つながり続けて豊かな実を結ぶためにはどうしたらよいですか？

✝ いってみよう (しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

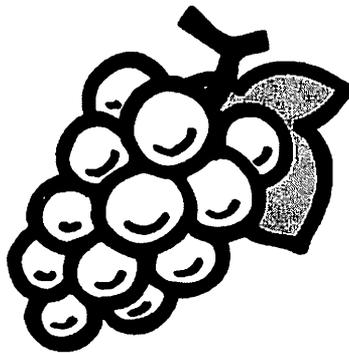
問30 神さまの恵みは、どのようにして私たちに与えられますか。

答 聖霊なる神さまが私たちに信仰を与え、私たちを主イエス・キリストと一つ

に結び合わせてくださることによってです

✝ やってみよう

イエスさまにつながっているわたしたちは、聖霊なる神さまのお働きによってどんな実を結ぶのでしょうか？ガラテヤ 5:22~23を見ましょう。色画用紙にぶどうの実を大きく描いて、「喜び・平和・寛容・親切・善意・誠実・柔和・節制・愛」とことばを書き込みましょう。



〈聖書をさらに深く〉

1. イエスさまと結ばれるという恵みにあずかり、その恵みの中に生き続けるためには何が必要でしょうか。一つは、「御言葉」です。イエスさまは「わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている」(3節)と言われ、また、「わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば」(7節)と言われます。イエスさまの言葉、聖書の言葉が、どれぐらい私たちの心の内にあるでしょうか。暗唱聖句をしっかりと覚えて、心に御言葉を蓄えましょう。
2. もう一つ大切なことは、「掟を守る」(10節)ことです。御言葉は、聞くだけ、覚えるだけで終わってはいけません。しっかりと守らなければなりません。しかし、そのこともまた、イエスさまから流れ出てくる恵みの力によってのみ可能であることを覚えておきましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. イエスさまと一つに結び合わされるということは、とても不思議なこと、神秘です。イエスさまは今、どこにおられるでしょうか。天です。それでは、私たちはどこにいるでしょう。地です。天と地にある両者が、どうして一つになれるのでしょうか。神様はその両者を、聖霊の絆によって結んでくださるのです。
2. 目に見えないこの絆と結合が、洗礼と聖餐において目の前に現れます。洗礼は、その人がキリストと結ばれたことのしるしであり、聖餐はその結びつきが強くされていくことのしるしです。洗礼を受け、また信仰告白をして聖餐にあずかり、イエスさまと結ばれていることを味わいましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

7日(月曜日)

テサロニケの信徒への手紙二 3章1～5節

Q. 主はどのような方？

8日(火曜日)

テサロニケの信徒への手紙二 3章6～18節

Q. あなたがたはどのようなパンを食べるべき？

9日(水曜日)

テモテへの手紙一 1章1～11節

Q. 律法はどのような者のために与えられた？

10日(木曜日)

テモテへの手紙一 1章12～20節

Q. そのまま受け入れるに値する真実の言葉とは？

11日(金曜日)

テモテへの手紙一 2章1～7節

Q. 神と人との間の仲介者は誰？

12日(土曜日)

テモテへの手紙一 2章8～4章1節

Q. 男はどこでもどうすべき？ 婦人は何を
もって身を飾るべき？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書18章9～14節

信仰は、私たちが神様の御前で自分をどのような立場に置くかで、その位置づけがまったく異なってきます。主イエスはここで、ユダヤ人の代表としてファリサイ派の人と、罪人の代表としての徴税人のそれぞれの祈りの姿からたとえを話されることにより、神様によって救われるとはどういうことであるかを問いかけます。

主イエスが前にしていた人たちは、「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」(9)でした。これは具体的にはファリサイ派の人や律法学者たちユダヤ人のことを指していることですが、ここで問われてくるのは、ではあなたはどのようなかということです。「自分は正しい人間だ」と考えるには、そこに自分なりの判断基準があるのですが、それを定めているのはあくまで自分なのです。従って彼らは、一方で「神様」と語りつつ、もう一方で義の基準が、神の御言葉とはならず、それをういつつも自らの都合の良いように解釈するのです。こうしたことは私たちキリスト者も陥りやすい危険ですから、注意しなければなりません。

ファリサイ派の人は「立って」祈ります(11)。彼は自分が義(ただ)しいと思い、胸を張り誇りを持って神様の御前に立ったのでしよう。その思いが、彼の祈りに表れています。彼は二つの点で、自らの義しさを主張します。第一は、他人の罪を暴き、自らがそうした罪を犯していないことを語ることにより(11)、消極的方法により、自らの義を主張します。そして第二に、自らが神様から

課せられた断食することと献金することを果たしていることを語ること(12)により、自らの正当性を主張します。

一方、徴税人は神殿の前でも、「遠くに立」ちます(13)。自らを誇ることの出来ない後ろめたさの故でしょう。彼は神の義がどのようなものであるかを知っており、神様は人間に要求しているその神の義を満たすことができないことを知っていました。だからこそ、自らの力では罪の赦しを求めることも、救いを獲得することもできないことを、主の御前に率直に告白し、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」(13)と祈ります。

神の義は、完全な義です。そして神様によって創造された人間は、この神の義を満たすことにより、神の子としての資格を得るのです。しかし、「ただの人は、墮落以来、この世では、だれも神の戒めを完全には守れず、日ごとに思いと言葉と行ないにおいて破っています。」(ウェストミンスター小教理問82)。従って、神様の御前では、誰一人、自らの義を誇ることはできません。だからこそ自らの罪を率直に受け入れ、神様に憐れみを願うしかできないのです。

そして、神様は、この様に自らの罪を受け入れ、神様を信じ、神様に全てを委ねる者に対して、キリストの十字架による罪の赦しと永遠の生命をお与えくださいます。そしてこのような歩みを行うことが許されている者は、すでに神様によって義と宣言されているのです。(辻 幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問31

子どもカテキズム

問31 救いとは何ですか。

答 神さまの子どもとされることです。

そのために、神さまは私たちの罪を赦して義と認めてくださいました。

ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、

「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」とお呼びします。

問30では、恵みの伝達的手段としてキリストとの神秘的結合が扱われ、問31では、救いの内容が義認と神の子とされることに限定して説明され、問32では、救われた者の歩みとして聖化が取り上げられている。一度に多くを語るができないので、このように問いは細分化されざるを得ないが、救いの事柄は一体的である。義認も聖化も神の子とされるのも、キリストとの神秘的な結合においてである。また義認と聖化は、神の子とされるという恵みの法的な側面（義認）と実質的な側面（聖化）である。救いへの選び、義認、子とされること、聖化、これらすべては憐れみ深い神さまから溢れ出る救いの恵みである。異なった問いであるが、同じ救いの恵みと触れ合っている。

「救いとは何か」という問いは、重要である。人は、「救われた」と語る時、何を語っているのだろうか。すべての人は、苦しみや悲惨や貧しさからの救いを希求している。苦しい状態からの脱出が、一般的に救いと呼ばれている。確かに、キリスト者にとっても救いとは、キリストの十字架を通しての罪の裁きからの解放である。しかし、自分にとっての苦しみからの解放である救いが、この問31において、救いとは神の子とされることである、と神さまとの関係概念で説明されている。子どもたちは、主の祈りで「私たちの天のお父さま」と祈ることに、もう既に救われているのである。救いに加えられるとは、神の子と呼ばれたことがない者が神の子と呼ばれて、喜びをもって、「ハイ」と応答できるようになることである。天地の造り主なる神さまに対して、神の子として近づくことができる関係を結ぶことが、私たちにとっての救いである。

そして、その救いを成立ならしめる法的根拠が、義認である。神さまが私たちを義と認めてくださるとき、私たちは神さまとの関係を回復する。神さまと私たちとの関係は、神さまが私たちを義と認めてくださることにより、神さまによって回復される関係である。また、この義と認めることに、罪の赦しが先行している。ここでの罪とは、個々の悪しき業であるよりむしろ、神さまとの関係を遮るものである。罪のゆえに、神さまとの関係を断ち切られていた者が、罪を赦され、義と認められ、神さまとの関係を回復する。更に、神の子という特別な関係へとまで高められるのである。

この罪の赦しを語る際、私たちは、キリストとの結合に立ち帰らねばならない。キリストとの結合において、キリストが獲得してくださった恵みが私たちに与えられるだけでなく、私たちの罪もまたキリストへと結びつけられているからである。キリストにあって選ばれていた者の罪は、キリストによって担われ、キリストがその罪の裁きとして十字架を受けてくださった。その十字架において、罪の裁きは終わり、復活において、罪の赦しが宣告された。キリストは、十字架において私たちの罪と結びつき、私たちは、復活においてキリストによる罪の赦しの宣言と結びついている。神さまは、キリストの贖いが完全であったことを承認し、キリストと結ばれて、キリストが身代わりに罪の裁きを受けたその罪人に対しては、罪赦された者と認めてくださる。私たちはキリストを信じた後も罪を犯す罪人である。しかし、神は、キリストと結びついている私たちを、キリストの十字架をもって罪赦された者として、いつも神の子と認めてくださるのである。（岩崎 謙）

テキスト ルカによる福音書18章9～14節
カテキズム 子どもカテキズム問31

〔単元のねらい〕

問31は二回に分けて説く。一回目は、主イエスのなされた「たとえ話」を通して、「罪の赦しと義認」に焦点をあてて学ぶ。今の子どもたちは、テレビゲームなどの影響で勧善懲悪の世界に没り切っている。全てを善悪二元論でかたづけようとする傾向にある。悪い者は裁かれて当然、暴力的に痛めつけてもかまわないという考え方である。こういう原理主義な考え方がまた新たな憎しみを増殖させ、争いの循環を生み出していく。この争いの循環を断ち切るためには、どうしても赦しが必要である。善悪二元論ではなく、全ての人が罪人であることを子どもたちに伝えたい。また、その罪を心から悔い改めるならば、どんな罪であっても、主イエスの十字架の贖いによって赦されることを子どもたちに伝えたい。また教師は、子どもたちにも、この赦しの心が芽生えるようにと真剣に祈り求めながら準備にあたっていただきたい。

「ファリサイ派の人と徴税人のたとえ」

今日のイエス様のたとえ話には、全く正反対の二人が登場します。まず一人目は、ファリサイ派の人です。当時のユダヤの社会では、ファリサイ派の人というのは、「とってても善い人」と思われていました。また、ただ「善い人」と思われていただけではなくて、実際に彼らは、人々から尊敬されるような立派な生活をしていました。もしタイムマシンというものがあって、このファリサイ派の人が、2000年の歴史を飛び越えて私たちの教会にやって来たならば、きっと素晴らしいクリスチャンに見えることでしょう。礼拝に一日も休まずに通い続け、色んな奉仕を一生懸命やって、頭もよく、優しく、困っている時にはいつでも助けてくれる、本当に頼りになる人に見えると思います。

逆に徴税人は、「とってても悪い人」と思われていました。実際に徴税人は、人々からたくさんのお金をだまし取っていましたから、人々から嫌われても仕方がないような人でした。

このような全く正反対の二人が神様に向かって祈りをささげました。ファリサイ派の人は、立ったまま、心の中でこう祈りました。「神様、わたしは他の人たちのように、悪いことをしていま

せん。隣にいる徴税人のような罪人でないことを感謝します。わたしは週に二度断食しています。また全収入の十分の一を献金しています。」

どうでしょう。このお祈りを聞いて、みんなはどう思いましたか。「少し、おかしなお祈りだなあ」と思ったお友だちもいるかもしれません。まるで自慢話をしているかのようですね。でも、よく考えてみると、私たちがこのファリサイ派の人と同じような思いになっていることが、よくあるのだと思います。テレビでニュースやワイドショーを見ていると、よく悲しい事件や芸能人のだらしない生活が暴かれます。そういうテレビを見た時に、みんなはどう思うでしょうか。「馬鹿だなあ。あんなことをやって」と得意満面になって、その人をけなしていることはありませんか。もし、そういうことがあるのなら、みんなもこのファリサイ派の人と、そんなに変わらないということです。

さて、もう一人の徴税人は、神殿から遠く離れて、うつむきながら、また胸を打ちながら言いました。「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と。今、私たちは、ふつう目をつむって、下を向いてお祈りしますね。でも当時のユダヤ人たちは、

顔を天に向けて、目をしっかり開いて、手をあげながら大きな声で祈った、と言われていました。でも、この時の徴税人の姿は、それとは全く違いますね。ここには「胸を打ちながら言った」と言われています。「祈った」とは言われていません。「自分には祈る資格がない」おそらく、そういう思いが彼にはあったのでしょうか。しかし、それでもこの徴税人は神殿にやって来たのです。「もう手も足も出ない。自分ではどうすることもできない。神様から助けをいただかなければ、もうどうにもならない。」彼はそういう思いで、この神殿にやって来たのです。神様の前に立つことができないからといって、それであきらめてしまったのではない。神殿から遠く離れていても、目を天に向けてすることができなくても、たとえ、その資格がなくても、「神様、あなたが教してくださなければ、わたしはもう立つことができません。どうか、この罪深いわたしをお教しくください。」本当に低く低くなって、ただ神様によりすがる思いで、お祈りをしたのです。

イエス様は、このたとえ話を話された後に、「神様が正しい者と認めてくださるのは、この徴税人のような人であって、あのファリサイ派のような人ではない」と言われました。神様が喜ばれるのは、立派な行いを積み上げることではありません。そうではなくて、自分にもこんな悪いところがある、あんなだらしないところがある、ということを素直に認めて、「神様、助けてください。教してください。あなたが教してくださる以外に、わたしの救いはありません。」こうお祈りする心を神様は喜んでくださるのです。

結局、神様が正しい人間と認めてくださったのは、自分一人でも何とかやっていけると思い込んでいたファリサイ派の人ではなくて、本当に自分

の罪に絶望して、自分ではどうすることもできなくて、神様の教しに依りすがるしかなかった、この徴税人の方でした。

イエス様は、私たちの罪を全部背負って十字架の上で死んでくださいました。もう私たちの罪は、このイエス・キリストの十字架のゆえに、全部赦されたのです。また、私たちが本来しなければならぬ善い業も、イエス様が私たちの代わりに全部成し遂げてくださいました。ですから、もう私たちは、何か善い業をしなければ救われないということはありません。私たちはただ、このイエス様からの恵みを素直に受け取るだけでいいのです。本当に嬉しいことですね。

今、みんなには「あんなひどいことをする子は絶対に教せない」そう思っているお友だちがいるかもしれません。でも、イエス様は「こんなひどいことをする子は絶対赦さない」とは言われません。みんなの失敗や欠点や醜いところを全部ご存じの上で、「そのまんまのあなたをわたしは愛しているよ」とイエス様は言ってくださいました。そして、そういうみんなの罪を洗い流すために、イエス様は十字架の上で死んでくださったのです。このイエス様の十字架の愛を知ったなら、みんなもお友だちのことを教すことができるようになると思います。みんなにはその力が無くても、神様が少しずつみんなの心を造り替えてくださるでしょう。今日のたとえ話に登場した徴税人のように、みんなも心を素直にしてお祈りしてください。「神様、ごめんなさい。わたしはあなたからせつかく教していただいたのに、どうしてもあのお友だちのことが赦せませんでした。どうか、あなたが助けてください。わたしに教す力を与えてください。」と。 (吉田 謙)

【今週の暗唱聖句】 ローマの信徒への手紙 3章23節～24節

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。

〈主題〉

イエスさまの恵みによって、罪をゆるされる者のさいわい。

〈ねらい〉

イエスさまのもとに来る人は、罪をゆるされ、義と認められることを信じる。

〈展開例〉

みなさんは、おいのりをするときに、神さまのことを「わたしたちの父なる神さま、わたしの天のお父さま」と呼びますね。それは、イエスさまが、神さまの愛するひとり子で、わたしたちのために、十字架にかかって、罪人の身代わりに死んでくださったおかげです。イエスさまは、十字架の上で、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」とさげび声をあげられました。世の中で、いちばんおそろしいことは、

神さまから見捨てられることです。罪を神さまがただしく裁かれるとき、わたしたちはイエスさまと同じように、神さまから見捨てられる……。考えただけでも、おそろしいことです。でも、イエスさまのもとに来るひとは、もう、おびえなくても大丈夫です。イエスさまが、いちばんおそろしいものを負ってくださったからです。「罪の赦し」と「義認」とは、このように、イエスさまのもとに来て、ほんとうのこころの平安を得ること。そして、イエスさまの恵みと平安の中を、安心して生きること、どんな時にも、イエスさまといっしょにお祈りをささげる恵みそのものです。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエスさまの恵みによって、ほんとうの平安を与えてください。イエスさまのとうといお名前によってお祈りいたします。アーメン。

ブーブーマイクをならそう

- ① トイレットペーパーのしんに穴を開ける
- ② ホリ袋を切って穴にすきまのないように
ビニールテープで はりつけます
- ③ □をつけてブーブーならす



〈ねらい〉

罪の赦しと悔い改めの関係をまなぶ。

〈分級教師へのアドバイス〉

悔い改めと罪の赦しの関係を因果関係（悔い改めたから罪を赦してもらえる）や交換条件（悔い改めた代わりに罪を赦してもらう）としてしまわないように注意しましょう。罪の赦しは、あくまで神様からの恵みであり、むしろ悔い改めの方が、神様の赦しの結果与えられるものです。

〈展開例〉

①みんなは、悪いことをしたことがあるかな？

- ・ない
- ・ある

②今まで一度も怒られたことがない、嘘をついたこともない、喧嘩をしたこともないって人はいる？

③やっぱりいないねえ。でも神様は、私たちに怒ってはいけない、嘘をついてはいけない、喧嘩をしてはいけないっておっしゃってるんですよ。どうしましょう？

④どんなに隠しても神様は、私たちが怒ったり、嘘をついたり、喧嘩をしたりしたことをみんな

ご存じなんです。だったら、ちゃんと神様に謝らなければいけないですよ。

⑤神様は、きちんと謝った人はちゃんと赦してくださるんです。でも、もし私たちが謝らないでいたら、神様は私たちのことを赦してくださりません。

⑥今日のお話のファリサイ派の人は、本当は、嘘をついたこともあるし、喧嘩をしたこともあるのに、神様にそれを謝ろうとしなかったから、赦してもらうことができませんでしたね。でも徴税人の人は、神様に赦していただけることを知っていましたから、自分が悪いことをしたのをきちんと謝りましたね。

⑦みんなは、知らんぷりして、赦してもらえないのと、きちんと謝って赦してもらうのとどっちがよいかな？

⑧きちんと謝って神様に赦してもらいましょう。

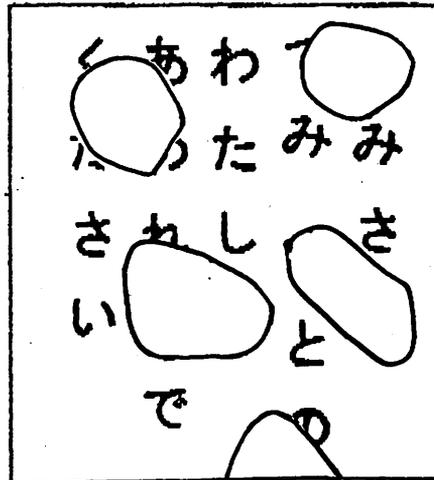
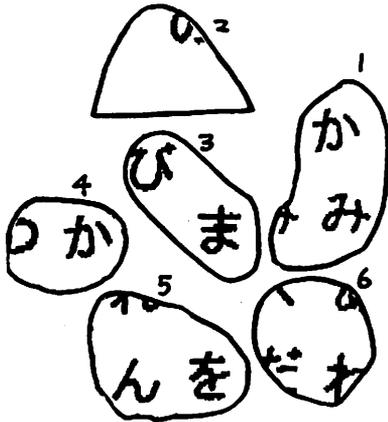
〈折り〉

天のお父様。私たちは、嘘をついたり、喧嘩をしたり、神様に罪を犯す者であることを心から悔い改めます。神様どうか私たちの罪を赦してください。イエス様の聖名によってお祈りします。



ワークシート✕

✦ 聖書をひらいて(ルカ18:9~14) みことばを書いた紙が、涙でぬれて破れてしまったよ
元にもどすと1枚だけ余る紙切れがあるよ。何番かな。



✦ かんがえてみよう

質問① イエスさまは、このたとえ話を、どのような人々に話されましたか？ (18:9)

② 神さまは、どんな人を義(罪のゆるし)とされるのですか？ (18:13、14)

✦ いてみよう (しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

問 31 救いとは何ですか。

答 神さまの子どもとされることです。そのために、神さまは私たちの罪を赦して

義と認めてくださいました。ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」とお呼びします。

✦ やってみよう

ファリサイ派の人は、正しい生活をしていました。しかし「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下して」いました。時には、ひどく批判したり、軽んじたりしていたでしょう。それは、弱い人に対する見下しから、神さまを見下してしまうという罪に陥りやすいのです。わたしは正しいわたしは強い、だから神さまに頼らなくても、神さまなしでも人々から十分な尊敬をうけることができる……そして「わたしは、神さまよりも正しくて、強い人間だ」と……。 「人をさばくな。あなたがたもさばかれないようにするためである。」(マタイ7:1)

友達や兄弟を見下したり、さばいたりする心を神さまにゆるしていただいて、そのような罪をおかすことがないようにお祈りしましょう。

〈聖書をさらに深く〉

1. 当時、罪人として嫌われていた徴税人が、聖書の中でイエスさまにどのように取り扱われているか、思い出しながら確認してみましょう。イエスさまに招かれて従ったマタイは徴税人でした（マタイ9:9）。イエスさまがその家にお泊まりになったザアカイも徴税人でした（ルカ19:1～）。イエスさまは、「正しい人を招くためではなく、罪人を招くため」（マタイ9:13）に来られたのです。今日の箇所も、イエスさまが罪の赦しの救い主であるという聖書の中心点をよく物語っています。
2. 私たちは毎日、どんな祈りをささげているでしょうか。感謝の祈り、お願いの祈り、誰かのための祈り。どれも大切な祈りですが、それでは、赦しを求める祈りはささげているでしょうか。今まで祈ったことのない人は、今日から祈ってみましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 「信仰義認」と言われる重要な教理ですが、この恵みを覚えるためには、罪の認識が不可欠です。罪と言われても、ピンと来ない人もあるかもしれません。しかし、誰もが日常的に経験する失敗や人間関係のトラブルの中で、「何かがおかしい」と感じることはないでしょうか。そうした小さな経験をじっくりと掘り起こす中で、自分も隣人も赦しを必要としているという認識へと導かれましょう。
2. 自分に自信が持てないということはあるでしょうか。しかし、神様が義と認めてくださるということは、自信をもって生きてよいというメッセージでもあることを受け止めたいと思います。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

14日（月曜日）

テモテへの手紙—3章1～7節

Q. 監督は信仰に入って間もない人でもいい？

15日（火曜日）

テモテへの手紙—3章8～16節

Q. 神の家とは何？

16日（水曜日）

テモテへの手紙—4章1～5節

Q. 捨てるべき食物がある？

17日（木曜日）

テモテへの手紙—4章6～16節

Q. パウロが行くときまでテモテは何に専念すべき？

18日（金曜日）

テモテへの手紙—5章1～16節

Q. やもめとして登録するのは何歳以上？

19日（土曜日）

テモテへの手紙—5章17～25節

Q. テモテは胃のために何を少し用いるべき？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ローマによる信徒への手紙8章12～17節

キリスト者は、キリスト・イエスに結ばれて、神の霊に属し、霊に従って歩むことが求められています(8:1-11)。ですから、12節で語られているわたしたちに求められている義務とは、キリスト者として、主なる神様から課せられている義務となります。しかしここで語られている「義務がある」(12)という言葉調べてみると、「負債を負っている人」のことで(参照:マタイ6:12)。つまり、キリスト者は、主なる神様に対して、自らの罪の故に、負債があり、この負債を償うという義務を負っているのです。

しかしこの負債を償うための義務は、「肉」(12)、つまりこの世に対するものではありません。ですから、私たちが罪の償いを行うために、人間的な努力で倫理的・社会的に責任を果たすことによって、成し遂げることができるようなものではありません。そうした行いは、自分自身のためになされる行為とされるのであり、主なる神様に対して私たちが負っている負債を償うための行為とはならないからです。だからこそ、いわゆる善行によって、救われることはなく、行き着くところは死です。

「しかし、霊によって体の仕業(新改訳:からだの行ない)を絶つならば、あなたがたは生きます。」(13)。つまり、神様の御霊によりたのみ、積極的に生きることが求められているのであり、功

績主義と共に、禁欲主義は否定されています。

では私たちはどのようにすれば、神の霊によって生きることができるのでしょうか。「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。」(14)。つまり自分の力で何とかして生きようとするのではなく、主なる神様によってとらえられ、主なる神様に全てを委ねることができればよいのです。ここには私たちが何をしたという結果は求められていません。ただ主なる神様を信じて、主なる神様の御言葉を全て受け入れ、主なる神様に全てを委ねて生きていけばよいのです。そうすれば、そうすれば私たちの全ての負債は償われ、私たちの行いの故ではなく、神様の一方的な恵みとして、全ての義務を果たした者としての「神の子」としての身分が与えられるのです。これは、神様を「お父さん」と呼ぶ(15)ことがゆるされる神様の子どもとしての特権です。

そして神様の子どもだからこそ、「神の相続人」(16)として、神様の持つておられるものをすべて受け継ぐことが許されているのです。それは永遠の生命であり、義であり、聖であり、真実であり、サタンと罪に対する勝利です。だからこそ、私たちは、この世における困難の中にあっても、勝利の希望により、神の霊に従って行くことができるのです。(辻 幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問31

子どもカテキズム

問31 救いとは何ですか。

答 神さまの子どもとされることです。

そのために、神さまは私たちの罪を赦して義と認めてくださいました。

ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、

「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」とお呼びします。

今週は、神の子とされることが中心主題である。まず、義認との関係を確認しておきたい。罪赦され義と認められた者が、神の子とされている。ここで義と認められるとは、実質の変化ではなく、関係の変化である。神が、キリストにおいて構築された新しい関係を義と認めると宣言してくださった。義認とは、法廷的な宣言的な事柄である。それにより、神と私たちとの関係が決定的に変化した。罪を犯した者であっても、キリストのとりなしによって無罪が宣言され、神との関係を回復することができたのである。

新しい関係は新しい呼び名を双方に与える。例えば、恋人同士の段階では、お互いの関係は「妻」と「夫」の関係ではない。結婚すると、お互いの関係は結婚という契約関係となり、関係が定まり、妻と夫になる。それと同じように、義と認められるという神からの裁可を得て、私たちは神の子という新しい身分を獲得するのである。もし私たちが、見ず知らずの子どもから「父よ、母よ」と呼び掛けられたとしたら、どうするだろうか。戸惑うしかない。しかし、キリストの父なる神さまは、私たちから父と呼ばれても、戸惑われない。神は、キリストに結ばれた者に対して、その罪を赦し、その人を神の子として受け入れるという新たな契約関係を結んでくださった。だから、罪人であっても、キリストと結びついている者は、キリストの父なる神さまに、「わたしの父よ」と呼び掛けることが許されているのである。

契約の子は生まれたときから神の子であり、幼児洗礼においてそのことが宣言され、信仰告白において契約に入れられていることへの感謝を子どもが自ら言い表し、契約の当事者たる責任を引き

受けることになる。未信者の子は、洗礼を受けることをもって神の子としての身分が確定する。聖書学校の現場では、未信者の子と契約の子がともに礼拝をしているので、心においてイエス様と結びついている人は神の子とされていますと語ることも許されるであろう。

神が、キリストと結ばれた者を「我が子」として受け入れてくださるのであるから、私たちは、大胆に神さまを「私たちの父」と呼ぶことができる。だから、喜んで、大胆に主の祈りを祈りたい。主の祈りだけでなく、日々の祈りを「父よ」と呼び掛けて祈りたい。これは私たちの勝手な呼びかけではない。本当にキリストの父なる神が私たちの父なる神になってくださったのである。神が、私たちの父なる神として、私たちに特別に父としての配慮を日々してくださっているのである。私たちに理解できないことがあっても、父なる神はいつも最善の備えを私たちのためにしておられる。その父なる神を信頼して、キリストにあって「父なる神さま」と呼び掛けるのである。

また、神が「私たち」の父なる神であることを覚えたい。神がキリストに結ばれている者たちの父なる神になってくださったおかげで、神を父と呼ぶ「私たち」の群が形成された。教会に集まる個々人が、キリストの父なる神を共通の父なる神としてもつ、主にある兄弟姉妹とされている。キリストを遣わしてくださった父なる神への感謝と、キリストの十字架の贖いへの感謝と、キリストにあって見ず知らずの者たちを神の子たちとしてまとめてくださった聖霊なる神への感謝をもって、「私たちの父なる神さま」と御名を呼ぼう。

(岩崎 謙)

テキスト ローマの信徒への手紙8章12～17節

カテキズム 子どもカテキズム問31

(単元のねらい)

31問の二回目。今回は神の子にされる教理を説く。神様は、私たちの有り様とは全く関係なく、ありのままの私たちが価値高く、貴いと言ってください。子どもたちは、友人と比較して「自分の方が勝っている」と優越感に没ったり、「自分は駄目だ」と劣等感にさいなまれたりしがちである。しかし、神は「ありのままのあなたが大好きだよ」と言ってください。優しい父であることを子どもたちに伝えたい。そして、子どもたちがビクビクすることなく、喜んで、神を「天のお父さま」と呼ぶことができるように導きたい。

「アッパ父よ」

「アッパ」というのは、赤ちゃんがお父さんと呼ぶ時の言葉です。赤ちゃんは、まだしっかりと言葉がしゃべれない時に、お父さんやお母さんに向かって「アバ、アバ」と言いますね。これは万国共通語です。「アッパ、父よ」というのは、そういう小さな子どもがお父さんに親しみを込めて「アバ、アバ」と言うように、私たちも神様に向かって、親しみを込めて「お父さん」と呼ぶことができる、ということです。これは本当に嬉しいことです。赤ちゃんはお父さんやお母さんが大好きです。それはお父さんやお母さんが自分のことを愛してくれているということ、ちゃんと知っているからです。おねしょをしても、夜泣きをしても、何にもできなくても、それでもお父さんやお母さんは自分のことを愛してくれている。そのことを赤ちゃんは知っていますから、安心して「アバ、アバ」とお父さんやお母さんと呼ぶのです。私たちも、同じようにして、神様のことを「アッパ父よ」と呼んでいい、と今日の聖書の御言葉は教えてくれています。

みんなは神様のことを、そうやって親しみを込めて「お父さん」とお祈りしていますか。もしかすると、ビクビクしながら、小さな声で「お父さん」と呼びかけているお友だちもいるかもしれませんね。でも、今日、神様がどんなお方であるかを知ったなら、きっと、みんな大きな声で、神様

のことを「お父さん」と呼ぶことができるでしょう。

神様は、みんなことが大好きです。勉強ができるから、優しいから、強いから、かっこいいから、可愛いから、「大好きだよ」と言われるのではなく、ありのままのみんなが大好きなんです。勉強ができなくても、かっこわるくても、けんかばかりしていても、そのまんまのみんなが大好きです。もちろん、勉強をしなくていいということではありません。仲良くしなくてもいいということでもありません。一生懸命、勉強して、賢くなる。けんかをやめて皆で仲良くする。神様はそのことを喜んでくださいます。でも、賢くなったから、けんかをやめたから、何かができるから「大好きだよ」「愛しているよ」と神様は言われません。賢くなくても、なかなかけんかがやめられなくても、「それでもみんなを愛しているよ」「大好きだよ」と言ってください。それが私たちが信じている神様です。神様のことを、親しみを込めて「お父さん」と呼べないのは、おそらく、そういう神様のことがまだよく分かっていないからだだと思います。

自分の能力や立派さを証明しなければ、自分は見捨てられてしまう。こういう辛い経験をしたことがあるお友だちもいるかもしれません。可愛くなければ、優しくなければ、あの子に嫌われてしまう、そういう心配をしながら友だち付き合いを

しているお友だちもいるかもしれません。あるいは、中学生のお兄さんやお姉さんたちは、受験の時にそういう経験をするのかもしれませんがね。やがて大きくなって就職する時には、もっともっとそういうことを味わうことでしょう。そのようにして自分の立派さを証明しなければ認められないというのは、本当に辛いことだと思います。

でも、嬉しいことに神様と私たちの関係はそういう関係ではありません。私たちがどんなに勉強ができなくても、力が弱くても、魅力がなくても、神様は私たちのことを子どもとして受け入れ、喜んでくださいます。子どもというのは、本来、そういうものでしょう。親は成績が悪いと怒ることがあると思いますけれども、でも本当は可愛くて仕方がないんですね。親は子どもが悪いことをすると怒るんですけれども、本当は悪いままでも可愛くて仕方がないのです。神様は、私たちのことを、そのようにして子どもとして受け入れてくださいます。「アッパ父よ」と呼んでいい、と喜んでくださるのです。

みんな放蕩息子のお話はよく知っていますね。好き勝手に生きて、全てのお金を使い果たして、ポロポロになった息子を、お父さんは遠くの方から見つけて、走り寄って抱きしめたのです。ポロポロのまんまの息子を、この父親は愛し、受け入れました。神様はそういうお父さんなのだ、とイエス様は教えてくださったのです。「僕にはなん

のとりのえもないから、神様は僕のことを愛してくれないだろう。」「わたしにはこんな汚い心があるから、神様に嫌われるだろう。」そうじゃないんです。神様は私たちの有り様とは全く関係なく、一方的に私たちを愛してくださいました。「あなたはわたしの愛する子どもだよ」と言ってくださいます。

赤ちゃんは、まだ何にもできない時に、もう既に子どもなんですね。はいはいができるようになり、やがて立って歩くようになる。しゃべるようになる。その時になって初めて子どもになるというわけではありません。産まれた赤ちゃんの時から、もう既に子どもなのです。私たちも同じです。もう私たちは既に神様の子どもです。みんなも赤ちゃんのようにまだ何にもできないかもしれませんが、それでもいいんですね。ありのままのみんなが神様の子どもなのです。「アッパ父よ」と呼んでいい、と喜んでくださいます。みんなで、神様のことを「アッパ父よ」「お父さん」と呼んでみましょう。何度も何度も、繰り返し呼んでみましょう。ピクピクしながらではなくて、「ありのままのみんなが大好きだよ」と言ってくださる神様のことを思い浮かべながら、大きな声で呼んでみましょう。きっと「あなたはわたしの愛する子、わたしの目にあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛している。」この神様の御声が心に響いてくるでしょう。 (吉田 謙)

[今週の暗唱聖句] イザヤ書43章4節

わたしの目にあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛している。

〈主題〉

イエスさまの恵みによって、神の子とされる者のさいわい。

〈ねらい〉

イエスさまのもとに来る人は、神の子として互いに成長することを信じる。

〈展開例〉

みなさんは、イエスさまがだれの子であるかを知っていますか。そうですね。イエスさまは神のひとり子ですね。イエスさまは永遠の神さまで。でも、イエスさまは、わたしたちを罪から救い出すために、十字架の上ではりつけにされて殺されました。そして、聖書に書いてあるとおり、十字架の死から三日目によみがえって、天にあげられました。このイエスさまのもとに来る人は、みんな、「神の子とされます」と聖書は教えています。

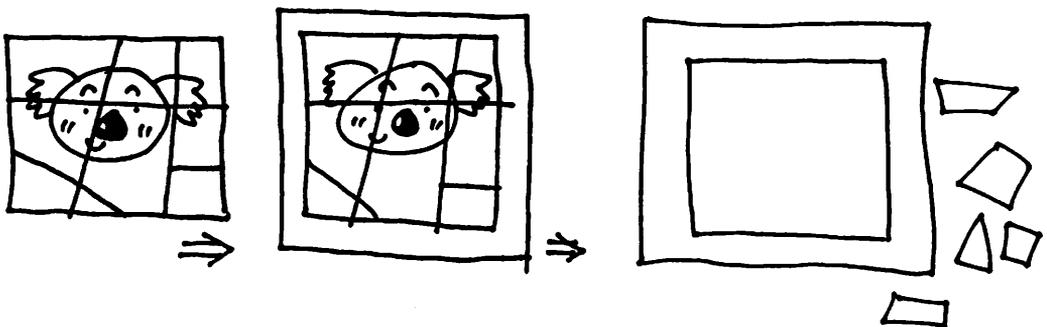
神さまのひとり子は、イエスさまおひとりなのに、イエスさまが、わたしたちを神さまの兄弟姉妹にしてくださるために、十字架の死からよみがえってくださったので、わたしたちは、イエスさまの兄弟姉妹、神さまの子どもなのです。まるで、神さまがわたしたちの父であるように、「天の父なる神さま」とお祈りできることも、ほんとうに大きな恵みですね。神さまの子とされる祝福をこころに覚えて、ますます、イエスさまの恵みによって生きようになりましょう。きっと、神さまは、わたしたちをますますイエスさまに似たものにして下さいます。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、あなたの子として、イエスさまに似るものにして下さい。イエスさまのとうとお名前によってお祈りいたします。アーメン。

♡小さなペズルを作る

- ① おりがみに ペズルをかく。
- ② ダンボールに おりがみを のりづけぼろ。
- ③ カッターで ペズルを切りぬく (* 危険なので注意して ⚠)
- ④ 切りぬいた ロクと もういちまいの ダンボールを はり合わせる。
- ⑤ ペズルを はりあそぶ。



〈ねらい〉

「父なる神」がどんなお方かを知る。

〈分級教師へのアドバイス〉

何回か繰り返していますが、子どもたちの具体的な状況（今回の場合では父親）について触れる時は、子どもたちがその状況で不快感を覚えなどうかどうか確かめておきましょう。父親との関係が複雑であったり、父親を亡くしていたりすると、そのことが引っ掛かって、譬えの内容に集中できなくなってしまいます。子どもたちが内容に集中できるような譬えを選びましょう。

「母なる神」という言い方はありませんが、ここで言う「父」は、男性的というわけではありません。神様のイメージとして、「母親」のような姿も、持つことが大切です。

〈展開例〉

①みんなは、自分のお父さんとお母さんが誰だか知っている？ もちろん知ってるよね。

- ・知ってる
- ・知らない

②◇◇君のお父さんは〇〇さん。□□さんのお父さんは△△さんですよね。

③もし◇◇君が□□さんのお父さんを「お父さ

ん」って呼んだら変ですよ。□□さんが自分のお父さんに、「オモチャ買って」って言うのなら普通だけど、◇◇君のお父さんに、「あれ買って、これ買って」って言ったら変ですよ。みんな自分のお父さんを「お父さん」って呼ぶんだし、自分のお父さんに色々なものを買ってもらうんだよね。

④神様のことも「父なる神様」とか「天のお父様」とか呼ぶでしょ。神様はみんなのお父さんになってくれたんですよ。

⑤だから、みんなは神様を「お父さん」って呼んで、神様にたくさんのをいただくことができるんですよ。

⑥どんな時でも、私たちのお父様である神様をお願いすることで、私たちは助けていただけるんですよ。

〈祈り〉

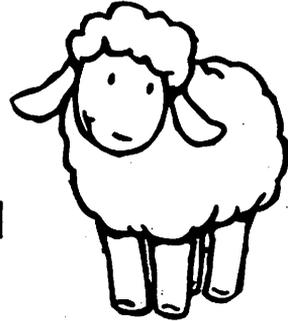
天のお父様、あなたが私たちの父となってくださってありがとうございます。どうか私たちがあなたの子となっていくことができるようにしてください。イエス様の聖名によってお祈りいたします。

✂️ ワークシート ✂️

✝️ 聖書をひらいて(ローマ8:12~17)最初の、一文字を並べてみてね!

- | | |
|---------------------|------|
| ① 神さまが最初に創造された人 | □□□ |
| ② 天まで届くように作ったレンガの塔 | □□□ |
| ③ 「銅い葉桶の中に寝ている〇〇〇〇」 | □□□□ |
| ④ 「救いをもたらす神の〇〇〇」 | □□□ |
| ⑤ 母マリヤの夫 | □□□ |

こたえ □□□□□



✝️ かんがえてみよう

質問①「私の天のお父さま」とお呼びしたとき、あなたはどんな気持ちになりますか?

②「神の相続人」(ロマ8:17)とは、どんな意味だと思いますか?何を、受け継ぐのでしょうか?

✝️ いってみよう (しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

問 31 救いとは何ですか。

答 神さまの子どもとされることです。そのために、神さまは私たちの罪を赦して義と認めてくださいました。ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」とお呼びします。

✝️ やってみよう

ほうとう息子の話(ルカ15:11~32)を、よく知っているでしょう。毎日毎日、息子の帰りを待っていたお父さんは、「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけ、あわれに思い、走りよってくびを抱き、せつぷんした。」と書いてあります。「あの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。」と、大きな喜びを表現しています。あなたは、一日のうちで何度、「わたしの天のお父さま」とお呼びしますか?一日のうちで「わたしの愛する子よ」と語りかけてくださる神さまの声を何度、聞いていますか?一度も聞いていない、と思うあなたがもしいるならば、まず朝、目めざめた一番に布団の上に座って「ぼくの天のお父さま」と呼びかけてお祈りしてください。……「待っていたよ、私の愛する子よ」と、静かな声がきこえるでしょう。



〈聖書をさらに深く〉

1. 「神の子とされる」ことを、パウロは「奴隷」との対比で語ります。「あなたがたは人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく」(15節)、「あなたはもはや奴隷ではなく、子です」(ガラテヤ4:7)。当時においては、奴隷であるか、相続人としての子であるかは、大きな違いとしてリアリティがありました。今日の私たちには分かりづらいかもかもしれませんが、私たちにもよく知られた言葉で言えば、これは自由の問題です。神の子とされるということは、罪の奴隷状態から解放されて、自由になることです。そのような自由を感じているでしょうか。
2. その自由の現れは、「アッバ、父よ」という祈りです。クリスチャンは「祈らなければならない」のではなく、「祈ることができる」自由を持つ、世の中で唯一の存在なのです。

〈教理を響かせるために〉

1. 救いについての教理的な概念は通常、「義認」と「聖化」の二つです。しかしウェストミンスターは、その間に「子とすること」を独立した救いの内容として取り上げています(信仰告白12章、大教理74、小教理34)。子とすることは、義認と同様、身分・立場についての神様からの一回的な決定です。
2. 神の子とされることは、とても大切な救いの恵みです。なぜなら、義であり聖であるイエスさまは、何よりもまず神の子であられるからです。イエスさまは、私たちを義とし、聖とされますが、何よりも子とすることによってご自身に近い者としてくださるのです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

21日(月曜日)

テモテへの手紙一6章1～10節

Q. 何があればそれで満足すべき?

22日(火曜日)

テモテへの手紙一6章11～21節

Q. わたしたちにすべてのものを豊かに与えてどのようにしてくださる神に望みを置くべき?

23日(水曜日)

テモテへの手紙二1章1～7節

Q. テモテの祖母の名は? 母の名は?

24日(木曜日)

テモテへの手紙二1章8～18節

Q. キリストは何を滅ぼし、福音を通して何を現してくださった?

25日(金曜日)

テモテへの手紙二2章1～13節

Q. わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に何であられる?

26日(土曜日)

テモテへの手紙二2章14～26節

Q. 主の僕たる者はどうすべき?

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書13章1～11節

この箇所は、主イエス・キリストが極みまでへりくだって、奴隷となってくださった物語です。今回のテキストは11節までとなっていますが、20節までをぜひお読みいただいて、その上で、聖書の学びのときをお持ちください。

〈奴隷となられた主イエス〉

「夕食のとき」(2)とは、逾越祭の前の夜の夕食であり、一日早い逾越の食事であったと推測されます。ヨハネ福音書においては、これが最後の晩餐です。のちに弟子たちは、この最後の晩餐を思い起こして、パンを裂き、ブドウ酒を飲むようになりました(主の晩餐の礼典)。このとき、すでに主イエスは、御自身が十字架につけられて死に、御父の御心を成し遂げる時が来ていることを悟っておられました(3)。その十字架の意味について、この最後の晩餐の席上で、あらかじめ弟子たちに教えようとなさったのです。

それは、主イエスがへりくだり、奴隷となられたということでした。「上着を脱ぎ」(4)とは上半身裸になったということです。「手ぬぐいを取って」(4)、この手ぬぐいは小さなタオルではなく、一方の端を腰にまとい、もう一方の端が床に長く垂れる大きな布です。足を洗ったあと、その布で足を拭きます。このような、上半身裸で大きな布を腰にまとう姿は、奴隷の姿です。ひざまずいて足を洗い、足を拭くことは奴隷の行為です。福音書は、弟子たちにとって教師であり、「主」(9)であるお方が奴隷となってひざまずかれたのであると、この出来事を印象深く語り伝えています。

〈十字架を指し示す〉

奴隷となられた主イエスを前にして、弟子たちはたいへん驚きました。福音書には、ペトロの言葉しか書き留められていませんが、弟子たち皆、同様であったでしょう。ペトロは、「わたしの足など、決して洗わないでください」(8)と言いました。これは、「わたしのしていることは、今

あなたには分かるまい」(7)という主イエスの言葉に対応しています。主イエスの御業は、このときのペトロには分からない。それは、主イエスのこの行為が十字架を指し示すものだからです。

主イエスの十字架の御業は、神の御子のへりくだりの極地です。奴隷となってくださったのです。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」(フィリピ2:6-8)。罪人の奴隷となり、罪人に仕えて、罪人の罪を洗い滑めてくださる御業が十字架です。奴隷となられた主イエスの十字架の御業により、私たち罪人のすべての罪が洗い滑められたのです。

ペトロと弟子たちが、この真実を悟ったのは、実に、主イエスの復活のさらにのち、ペンテコステにおいてでありました。

〈聖化の恵み〉

「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」(8)。この言葉は、洗礼と結びつけて理解することができます。主イエスに足を洗っていただくことは、主イエスに結びつけられていることの目に見えるしるしです。それと同様に、私たちは、主イエスを信じて生きるしるしとして、洗礼を授けられます。洗礼は、罪の洗いの目に見えるしるしです。

そして、水の洗いは、ひとたび洗っていただいたならば、すべてがきよいのです。十字架によってまったく清くされるのです。洗礼も同じであり、洗礼の恵みをいただいて、「まったくきよくされている！」と言うことができます。地上の歩みにおいて、なお多くの罪を犯す私たちです。しかし、そうであっても、十字架の故に「きよくされている！」と確信することがゆるされています。

(望月 信)

カテキズム 子どもカテキズム問32,33

子どもカテキズム

問32 救われたあなたはどうなりますか。

答 聖化の歩みを始めます。

問33 聖化の歩みとは何ですか。

答 神さまの子どもとして、

罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。

神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神さまを愛して歩みます。

二週にわたって問32と問33を学ぶ。義とされ神の子とされた者が聖化の歩みを始めることである。確かに義認は一時的な裁可であり、聖化は継続的に行われるのであるから、義とされた者は聖化への途上に置かれている。義認と聖化の関係を理解する際、時間軸を持ち込むことは有効である。それは、聖化されたのちに義と認められるという過ちに陥ることがないためである。聖化が義認に先行することは、決してあり得ない。

ただ、問32の「救われたあなた」に、過去において救われたあなたが現在聖化の歩みを始める、というような時間的区分を持ち込まない方がよい。あくまでも「今救われているあなた」が、「今聖化の道を歩む」のである。私たちが今罪を犯すときにも、神は、キリストにあって義とされた私たちを、キリストの十字架に立ち帰って義と見なし続けてくださる。義と認められている今、神は、私たちを神の子として聖化し続けてくださる。

義認と聖化は、内実において密接に結びついている。キリストは、私たちの罪の裁きを受けてくださったことに加えて、義の道を十字架の死に至るまで歩み通されて、神の義を全うしてくださった。そのキリストが成し遂げられた義が、キリストに結びつく者に転嫁され、キリストを信じる者が行った義のごとくに認められたのである。自分が行うことができず、キリストお一人が行われた義であったにもかかわらず、キリストの義が、神の恵みによりキリストに結びつく者の義と認められた。このキリストの義を自らの義と認められた者は、自らもまたキリストの義を行いたいと動機づけられている。キリストにあって罪赦された感

謝と、キリストの義を自らの義として認めて頂いた畏れを覚え続けることが、聖化の内実である。

この聖化は、キリストとの神秘的結合の具体化である。聖化は聖霊なる神の働きであるが、聖霊なる神は常に、キリストの御業と御言葉との結びつきのなかで聖化を進める。キリストから切り離された聖化は修行であり、自己完成への道である。本当の聖化の道とは、自己と向き合う内面化の作業ではなく、キリストとより深く結びつく作業である。キリストにより完全に贖われているのであり、罪を犯すことがあっても、キリストに属する聖なる者である。何があってもキリストから離れず、キリストが私たちのためになしてくださったことに感謝し続けることが、聖化の道である。

私たちは、キリストにあって義と認められて神の子とされたが、自分が神の子としての実りを未だ宿していないことを知っている。父なる神との関係においては、まぎれもなく神の子である。しかし、神の子として整えられてはいない。聖化とは、神の子とされた者が実質的に神の子へと変えられていくプロセスである。そこにおいては、罪に死ぬことを繰り返し経験させられる。肉の古い自分が死ぬことなく神の子としての新しい自分を形成することはできない。聖化とは、終わりなき悔い改めである。そして、聖霊なる神は、キリストに似た者になるようにと整えてくださる。聖化は自分の努力目標ではなく、聖霊によって自分を変えられる憧れである。どのように罪の現実に沈んでも、失うことのない希望である。聖化はこの地上において完成しないが、必ずイエス様の似姿に変えてくださる神の御業である。(岩崎 謙)

テキスト ヨハネによる福音書13章1～11節
 カテキズム 子どもカテキズム問32,33

(単元のねらい)

主イエス・キリストは、神が選んでくださった人々を、ご自分（キリスト）の形に似るようにしてくださる。それは聖霊の絶えることのない働きによる。聖霊によるきよめの働きは、それを受ける人間の努力によるのではなく、客観的なめぐみであり、また地上にあるあいだ続く継続的なめぐみである。子どもたちも、そのような恵みに信頼し、自分のなかですでに神の御霊が働いておられることを信じることができる。自分を嫌いになったり、自分について極度に自信をなくしたり……。子どもたちも、自分のあり方をそれなりに真剣に、ときには苦しみをこめて考えている。聖化という神のめぐみの業を、ここから受け入れることによって、ゆがんだ重荷から解かれることが、現代人への福音であるから、子どもたちにもぜひ届けたい。

「私たちもきよくされる」

みなさんは、イエスさまと弟子たちが、「さいごの晩餐」という食事をしたことを知っているでしょう。イエスさまは、ユダヤ人によって捕らえられるその夜、弟子たちとさいごの食事をされました。とても大切な記念の食事でした。教会の大人の人びとが、聖餐（式）のときに、パンをたべ、ぶどう汁（酒）を飲んでいきます。あれが聖餐（式）です。世の続くかぎり教会はこの食事を続けなさいと、イエスさまは命令しておられます。

そのような大切な最後の食事の席で、イエスさまは立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰にまどわれました。そしてたらいに水を汲み、弟子たちの足をひとりひとり、洗いはじめられたのです。弟子たちのおどろきは、どれほどだったか。想像してみてください。イエスさまが、弟子たちのまえにひざをついておられる様子を、思いうかべることができますか。目をつぶって、そのイエスさまの姿を想像してみましょう。

そして、ひとりひとりの弟子たちの順番がやってきます。目をつぶると、足をあらう水の音、たらいの中におちる水のしずくの音も聞こえるようではありませんか。昔から、教会の人びとはこの情景を、絵に描いてきました。イエスさまが弟子の足を洗っておられるところの絵です。どの弟子

たちも、いったい何がはじまったのかわからないで、途方にくれているようです。驚いて身をかたくしている弟子もいます。目をつぶって、からだを固くして、じっとイエスさまのされるままになっている弟子もいます……。

弟子たちが歩いた道は、今のように舗装されたきれいな道ではありません。ほこりと砂と石ころだらけの道を、はだし同然の足であるいたのです。サンダルのようなものを履いていたとも言われています。どちらにしても、弟子たちの足はほこりだらけです。その足をひとつ、またひとつ、イエスさまが洗ってくださったのです。

弟子のペトロが、だれよりも驚いています。「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」。「主」であり「先生」であるイエスさまが、弟子たちの足を洗う！ そんなことがあって良いものでしょうか。ペトロは自分はとてもそんなことをされては困る、と思ったのでしょうか。「わたしの足など、決して洗わないでください」とお断りしました。

ところが、イエスさまはそれをゆるされません。「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と言われるのです。イエスさまに足を洗っていただかな

ければ、イエスさまと何の関係もないひとになってしまう。それはいったい、どういうことでしょうか。

イエスさまは、この最後の食事がおわると、その夜のうちに捕らえられ、裁判をうけられ、夜が明けると十字架につけられてしまいます。十字架のいたみ、十字架のくるしみ、十字架のはずかしめ。そして十字架の上でイエスさまは死んでくださいました。十字架の苦しみと死は、いったいなんのためですか？ だれのためにイエスさまはあれほどの苦しみを味わっておられるのですか？

私たちの罪がゆるされ、私たちが神の子とされ、イエスさまに似るひとに造り変えられ、そして天国の命、永遠の命に生きるようになるためです。

イエスさまが、弟子たちの足を洗ってくださったのは、その十字架の意味を、ひとりひとりによく教えるためでした。イエスさまの教えは、言葉だけではないのです。弟子たちが、じぶんの体でイエスさまの教えを覚えるために、その足を洗ってくださいました。奴隷のように弟子たちの足元に膝をついて、弟子の足を手ぬぐいできれいにふいてくださったのです。イエスさまの愛、イエスさまの命によって、新しくなり、きれいにしてもらったので、私たちも神の国にはいることができるのです。ですから、私たちもみんな、イエスさまに足を洗ってもらったことになりましたね。

イエスさまに足を洗ってもらった人は、もうイエスさまのものです。足だけではなく、手も、口

も、目も、耳も、体ぜんたいがイエスさまのものになったのです。自分を中心にして、自分のことしか考えない人間ではなく、イエスさまを心の中心に受け入れて、イエスさまとともに生きる人になるのです。

もちろん、私たちの心のなかには、まだまだ古くからの、自分を中心を考える性質が残っていますから、イエスさまのものになっていても、まだ罪をおかします。イエスさまに従うことを何度も決心しても、また失敗することがあるのです。その点では、わたしも皆さんと同じです。でも、私たちはあきらめません。イエスさまが、十字架についてまで、私たちが神の子として生きる道を開いてくださいました。そして、神様の霊、聖霊である神様は、もう私たちのうちで働いておられますから、かならず私たちをイエス様に似るひとに、造り変えてくださるのです。

『こどもさんびか』（2002年改訂版、日本基督教団出版局）に「わたしはしゅの こども」という歌がありますね。その2節にはこうあります。

「わたしは主の こどもです
ひとを愛し 助けあい
主のちからに はげまされ
あかるい日を おくります」

イエスさまの力によって、あかるい希望をいだいてあゆむ。そんな神の子として私たちも日々、よろこんで歩きましょう。 (小野静雄)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書13章1節

イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、
世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。

〈主題〉

イエスさまの恵みによって、神の子として歩み始める。

〈ねらい〉

イエスさまは、わたしたちひとりひとりを誠実に愛してくださっていることを知る。

〈展開例〉

みなさんは、あかちゃんが少しずつ歩けるようになっていくのを見たことがありますか。みなさんも、皆、同じように、ハイハイから始まって、だんだんと歩けるようになってきたんですね。イエスさまは、お弟子さんたちの足をひとりひとりていねいに洗って下さいました。それは、イエスさまがお弟子さんたちひとりひとりを本当に愛しておられたことのアかしです。みなさんも、イエスさまから、「わたしはあなたを弟子の足を洗っ

たように、愛しています」と言われています。ですから、足が洗われるということは、わたしのすべてをイエスさまにおまかせして生きるということです。

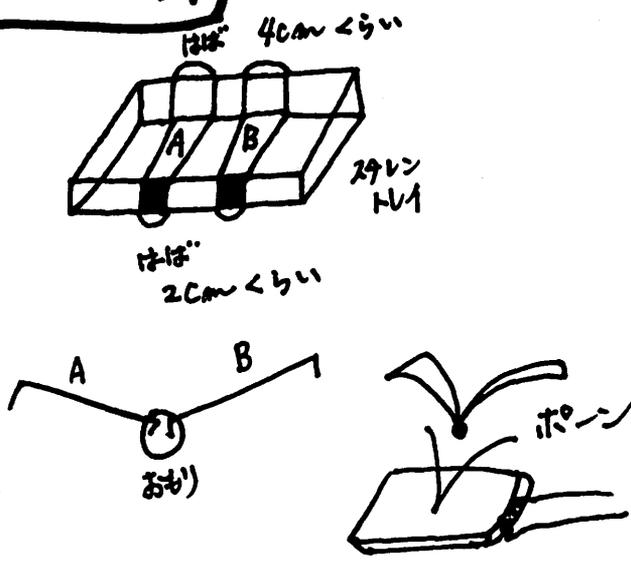
みなさんの、一生は、はじまったばかりですね。これから、イエスさまといっしょに、一歩、一歩、歩くように大きくなりながら、どこの道を歩いたらよいかをイエスさまに教えてもらいながら、進んでいきましょう。イエスさまは、わたしたちひとりびとりにかけがえないののないものとして、愛しておられることを、いつも信じつつ、イエスさまに喜ばれる、神の子として大きく育っていきましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、あなたの子として、一歩、一歩、歩いていけますように。イエスさまのとういお名前によってお祈りいたします。アーメン。

クルリン羽根つきをしよう!

- ① スタレンのトレイを 四角いように切る
- ② AとBをおもりにするもの (しぼんしを丸めてテープでとめたものなど) とはばんでビニールテープでとめる
- ③ はごいたもスタレンのトレイを使ってポーンポーンうらあおう!



〈ねらい〉

神様が私たちを実際に聖い者としてくださることを、よごれが洗い落とされることとの対比で理解する。

〈分級教師へのアドバイス〉

間に「子とすること」が挟まっていますが、聖化は義認とセットで考えるとわかりやすくなります。

〈展開例〉

①みんな、泥だらけになって遊んだことがあるかな？

- ・ある
- ・ない

②先生は、小学生の時に、泥だらけの水たまりで、遊んで洋服まで泥だらけになったことがあります。泥だらけで家に帰ったら、お母さんに怒られるよね。

③それからどうする？

- ・着替える
- ・手を洗う
- ・シャワーを浴びる

④泥遊びをしたら、手にも、顔にも、洋服にもたくさんたくさん泥がついてるから、落とさなきゃいけないよね。

泥は手を払ったくらいでは落ちないね。

水で手を洗わなきゃいけないね。

石鹸も使わなきゃいけないね。

⑤私たちが罪を犯した時も、きちんとその罪を洗い落としてもらわなければいけないですよ。

⑥この前、13日の日曜日に、罪を犯したら神様に謝って赦してもらわなきゃいけないってことを教わったよね。

今度は、その罪を神様にきちんと洗い流してもらって清めていただかなければいけないんだよ。

⑦よごれが付いたらきちんと落とさなきゃダメだよね。

〈祈り〉

天のお父様。私たちが犯した罪をイエス様がきれいに洗い流してくださいますように。私たちが清めてください。イエス様の聖名によってお祈りいたします。



✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて(ヨハネ13:1~11)

い	ま		な
	に	は	わ
か	る		い



上のような暗号文が届きました。ヒントは、「あたまを使って読め」です。わかるかな？

✝ かんがえてみよう

質問① イエスさまの弟子たちへの気持ちを表している御言葉はどこにありますか？

② ペトロは、はじめイエスさまになんと言いましたか？その後あわててなんと言いましたか？「なんのかかわりもないことになる！」とは、どんなこと？

✝ いってみよう (しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

問 32 救われたあなたはどうなりますか。

答 **聖化の歩み**を始めます。

問 33 聖化の歩みとは何ですか。

答 神さまの子どもとして、**罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せら**

れていくことです。神さまに愛されている喜びのうちに、私たちが神さまを愛して歩みます。

✝ やってみよう

洗面器やバケツ、足ふきタオルを用意します。イエスさまが、弟子たの足を洗ったように、わたしたちも、実際に足を洗いあいましょう。どんな気持ちができるかな？ 上着を脱ぐ行為は、命を捨てる行為を象徴し、手ぬぐいを腰にまとうのは、奴隷のみなりを現しています。「御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることをさと、食事の席から立ち上がって」弟子たちに、心からの愛をしめした行為でした。弟子たちのために、そしてぼくたちのために命をささげる決心でもありました。そんなイエスさまの御心を思いながら再現してみましょう。



「聖書をひらいて」のこたえは、ヨハネ13:7にかくされています。

〈聖書をさらに深く〉

1. イエスさまとペトロの会話を読みながら、どのように感じるでしょうか。何も分かっていないペトロの言動がおかしくもあります。しかし、ペトロの姿は私たち自身の姿ではないでしょうか。イエスさまが何をしてくださるお方か、なかなか理解することができず、自分の思いや考えの中にイエスさまを押し込めてしまうことがあります。しかし、大切なことは、そのような私たちのために、イエスさまは足を洗い、十字架にかかってくださり、罪人を聖なる者へと変えてくださったということです。
2. 「聖徒」という言葉を聞いて、どのような人のことを考えるでしょう。とても優れた信仰者、立派な働きをした信仰者、でしょうか。しかし、イエスさまを信じ、イエスさまによって洗われた人はみな聖徒なのです。教会は、聖徒の交わりと言われます。それは、立派な人だけではなく、信仰を持つすべての人のことなのです。

〈教理を響かせるために〉

1. 聖霊の働きによって救われた私たちは、これからも聖霊の働きの中で歩いていくことになります。洗礼を受けたら、信仰告白をしたら、これからは自分の力で歩いていかなければならない、ということではありません。義認・子とすること・聖化、それぞれの救いの内容の違いを確認する前に、すべては聖霊の働きによる恵みであるという共通点を押さえておきましょう。
2. その上で、聖化が義認や子とされることとは区別される性質を持つことを理解しておくことは重要です。特に、それは生涯をかけてゆっくりと進行していくものであることを覚えておきましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

28日（月曜日）

テモテへの手紙二3章1～9節

Q. モーセに逆らったのは？

1日（火曜日）

テモテへの手紙二3章10～17節

Q. 聖書はすべて何の下に書かれた？

2日（水曜日）

テモテへの手紙二4章1～8節

Q. 主が来られるのを待ち望む人がかの日に授けられるものは？

3日（木曜日）

テモテへの手紙二4章9～22節

Q. 誰だけがパウロのところにいる？

4日（金曜日）

テトスへの手紙1章1～4節

Q. 神は、何を通して御言葉を明らかにされた？

5日（土曜日）

テトスへの手紙1章5～16節

Q. パウロがテトスをクレタに残したのは何のため？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書13章12～20節

足を洗う主イエスの御業をきっかけにして、足を洗う主イエスの姿を模範とすることが教えられている御言葉です。

〈後で分かることと今分かること〉

奴隷になられて足を洗う主イエスの姿が十字架の御業を指し示していることは、今は分からないこと、後で分かるようになることでした(7)。その「後で」とは、聖霊降臨(ペンテコステ)にはほかなりません。主イエスが復活され、天に上げられ、聖霊が弟子たちの群れに与えられて、その聖霊によって十字架の真理が分かるようにされたのです。しかし、聖霊が与えられてなお、私たち人間の理解は未熟であり、不十分です。私たちが十字架の真理を悟るとは、キリスト者の生涯をかけて、信仰の歩みの中で徐々に徐々に分かってくるものです。本当の意味で主イエスの十字架の真理が十分に分かることは、天上の主イエスにまみえてはじめて与えられる恵みなのでしょう。

そして、ここで足を洗う主イエスの姿から学ぶべきことがもう一つあります。主イエスは、「わたしがあなたがたにしたことが分かるか」(12)とおっしゃって、この12節以下では、「いま分かる」ことを求めておられるのです。12節以下の御言葉の焦点は、主イエスの十字架ではなく、主イエスを模範として生きることにあります。主イエスを模範として生きる、それは、十字架の真理が十分に分かってから始めるというものではない、「いま」すぐに、主イエスを模範として生きる生き方を始めるべきなのです。

〈互いに愛し合うこと〉

主イエスは、「先生」また「主」と呼ばれる御自身が弟子たちの足を洗ったことを取り上げて、「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならぬ」とお命じになりました(14)。主イエスは、弟子たちに対して模範をお示しになったのです。

それは、互いにへりくだって仕えあうということです。誰が偉いのかと言い争うのではなく、互いに謙そんにへりくだることが求められるのです。

主イエスがへりくだって足を洗ってくださった、それは、弟子たちを愛して、愛し抜かれたからです(1)。弟子たちを愛して、その愛の故に、十字架を引き受けて、罪の洗いを成し遂げてくださいました。ですから、ここで主イエスが命じておられることは、互いに愛し合うということにほかなりません。使徒パウロも、互いに愛し合い、へりくだることの根拠を主イエスの十字架のへりくだりに求めました(フィリピ2:1-8)。主イエスの十字架の故に、すなわち神の愛の故に、キリスト者は互いに愛し合う。これが、主イエスによって足を洗われた者の新しい掟なのです。

〈愛がすべてを完成させる〉

罪を悔い改め、主イエスを信じる信仰を与えられている私たちです。私たちは、洗礼を授けられ、その水の洗いの故に、神の御前に罪赦され、義とされ、まったくきよくされていると確信することができます。それはもちろん、完全聖化ということではありません。しかし、キリスト者はキリストの義の衣をいただいて、神の御前に聖なる者として立ち得る幸いにあずかっているのです。

その私たちの地上の歩みは、主イエス・キリストの恵みに感謝して、主イエスを模範として歩むところに成り立ちます。神を信じて信仰に生きるものであり、またへりくだって人に仕えて生きるのです。神を愛し人を愛する、その一つの愛に生きるということにほかなりません。愛こそ律法を完成させるのであり、「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」(コリント二13:13)とあるとおりです。十字架の道は愛の道なのです。

(望月 信)

カテキズム 子どもカテキズム問32,33

子どもカテキズム

問32 救われたあなたはどうなりますか。

答 聖化の歩みを始めます。

問33 聖化の歩みとは何ですか。

答 神さまの子どもとして、

罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。

神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神さまを愛して歩みます。

聖化とは、滑くなるための自己訓練ではなく、キリストと一つに結ばれること（神秘的な結合）の深まりである。キリストとより深いところで結びついた者は、自ずとキリストにより深いところで似る者となる。キリストの贖いの恵みに感謝するなかで、聖霊なる神の働きによって、キリストに似る者へと変えられる恵みである。

キリストに似るとは、二つの段階がある。一つは、謙卑のキリストに似ることである。地上におけるキリストの歩みは、神の御子として父なる神の御心に従うことにあった。父なる神への服従をもって、ご自分が神の御子であることを表された。私たちも神の子とされ、父なる神に服従することにおいてキリストに似た者となるのである。

その際、神に従いたくない罪と日々戦わざるを得ない。罪に死ぬことがキリストに似る道である。これは、キリストご自身がゲッセマネにおいて自分の思いではなく、父なる神さまの御心を求めて祈られたことに表れている。また、キリストに似るとは、キリストが受けられた迫害をも身に受けることである。聖化は自分が立派になる自己実現の道ではない。自分の思いとは異なる様々な試練や迫害を受けることを通して、十字架の死に至るまで従順であられたキリストに似るのである。虐げられる中で、憎しみに生きるのではなく、キリストから柔和さと謙遜さを学ぶのである。

また、聖化は、自分の命を捨てて友を愛したキリストの道を歩むことである。仕えられるためではなく、仕えるためにお出でくださったキリストに似るのである。互いに愛し合いなさいというキリストの戒めは、キリストが仕えてくださったこ

とへの感謝によって実行されるものである。愛し合うとは、仕え合うことである。互いに仕え合う姿のなかに、キリストの似姿が宿っている。

そして、大切なことは、キリストの父なる神の愛顧のうちにキリストに似ることである。キリストの父なる神は、キリストと結びついた私たちに對して、父として接してくださる。私たちは神の独り子キリストを長男とする神の子たちであり、神の子として、父なる神の愛をいつも受けている。キリストに注がれている父なる神の愛を、いつも受けることによって、私たちは神の子として、神の御子であるキリストに似た者となるのである。

御父を愛し、御父から愛されたキリストと私たちが神秘的に結合することにより、私たちは、愛においてキリストに似る。御父とキリストの間で交わされる愛の充溢の中で、キリストに似るのである。神に愛されている喜びの中で、神と人を愛する者へと造りかえられていくのである。これは、人を愛することができない悲しみに涙する中で、そのような私を愛してくださる神の愛を経験することの積み重ねによって、もたらされる。

キリストに似る第二の段階は、高举のキリストに似ることである。キリストの再臨において、私たちは栄光のキリストに似る者に変えられる。十字架で死んだキリストが復活されたように、謙卑のキリストに似る下降の道は、再臨のキリストの現れと共に、上昇の道へと変わる。その時、被造物全体が更新される中で私たちも栄光のキリストに似る者とされる。死が私たちの終着点ではない。私たちが栄光のキリストの高さまで引き上げられることをもって、聖化は完成する。（岩崎 謙）

テキスト ヨハネによる福音書13章12～20節
 カテキズム 子どもカテキズム問32, 33

〔単元のねらい〕

イエス・キリストは、私たちの贖いとしてご自分の命をささげてくださった。贖いの恵みは、キリストを信じて洗礼を受けることによって、まさに一回かぎりの決定的な出来事として完了している。その贖いの恵みは、キリストの弟子として生きる私たちのなかで、継続的で止むことのない聖化の道をつくる。聖化も、神の無償の恵みのわざ（ウ小教理問答35）であるから、それは決して人間の努力や功績の問題ではない。むしろ、キリストとひとつの命に結ばれる恵みは、キリスト者のうちに新しい生活を生み出す原動力となる。子どもたちの日々の歩みも、キリストの足跡をたどる。自分の生活や、言葉、ふるまいについて、子どもたちもその年齢に応じて、思い迷うことをつづけているはず。そのような思い悩む私たちに、すでにキリストという模範が与えられていることを感謝して受けとめ、キリストとともに、キリストにしたがう生活の祝福を感謝をこめて覚えたい。

「イエスにならうわたしたち」

先週は、イエスさまが、弟子たちの足を洗ってくださったことを学びましたね。イエスさまは、十字架にかかり、私たちの罪の身代わりに死んでくださり、私たちが神の子として生きる恵みをあたえてくださいました。弟子の足を洗うことは、その十字架の恵みをあらわしていました。

弟子たちは、イエスさまのされることを、ポカンとして見ていたのでしょうか。自分の目を疑うような気持で、イエスさまのされる様子を見ていたのでしょうか。ところが、弟子たちの足を洗って席についたイエスさまは、言われました。

「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」（14）。「主であり、師であるわたし」。イエスさまは、私たちの主です。私たちを罪と死のなかから救い出してくださいました、まことの神さまです。そして、イエスさまは私たちの先生（師）です。学校にも教会にも「先生」がいます。また世のなかにはいろいろな「先生」がいます。でもほんとうの意味で「先生」と言える方は、ただひとりイエス様だけです。

そのようなまことの主であり、ほんものの先生であるイエス様が、弟子たちの足を洗ってくだ

さったのです。それならば、イエス様の「弟子」である私たちは、イエス様がされたように、ほかの人の足を洗う人になりなさい、と命じておられます。イエス様の弟子たちは、おたがいにイエスさまがされたように、足を洗うひとになるのです。

「足を洗う」。それは実際に友だちの「足」を石鹸やタオルをつかって洗う、ということではありません。イエスさまが、弟子たちの足を洗ってくださったとき、イエスさまは弟子たちに仕える奴隷のように、自分を低くしておられましたね。人の足を洗うためには、自分の姿勢を低くし、体を折り曲げるようにしなければなりません。ふんぞり返って、威張り散らしているようなところでは、とても足を洗うことなどできません。

イエスさまが求めておられるのは、まず他の人に対して、低いところ、謙遜なところ、へりくだった愛のころをもつことです。インドで、もっとも貧しい人々のためにその生涯をささげた、マザー・テレサという女性のことは、知っているひとも多いでしょう。食べるものもなく、道端で死んでゆく人びとが、いまもインドをはじめ世界の国で、数え切れないほどたくさんいます。私たちは、ふだん、そのような人びとのことを忘れてい

ますが、マザー・テレサのような大きな愛をもつ人のことを学んで、思い出すことが必要です。

「私たちは、のけものにされ、愛されず、嫌われている人びとに、やさしい愛の手をさしのべてお世話しています。それが、世界での私たちの使命なのです。イエスさまが、この世に来てくださいましたから、私たちも、そのイエスさまの愛を選びつづけるのです。神が、世を愛していらっしゃることを証しするために、イエスさまは、つかわされたのです」(『生命あるすべてのものに』、講談社現代新書)。

イエスさまは、神様の愛を伝えるために、私たちの先頭をあるいてゆかれました。そして、イエスさまを信じる人びとが、イエスさまのあとについてくることを願っておられます。

それでも、だれかを愛するということは、なにかとてもむずかしいことに思えます。私たちは、自分の気持を抑えることができなくて、怒ったり、うらやんだり、ときには憎しみをいだくこともあります。そんな自分をふりかえって、なんと私はイヤな人間だろう、と悲しくなることが多いのです。それなら、イエスさまのあとを付いて行くのを諦めるでしょうか。イエスさまの弟子になることを、やめてしまうのですか。けっして、そんなことはできません。イエスさまのあとに従うことをやめて、私たちはいったいだれのところに行け

ばよいのでしょうか。イエスさまこそ、永遠の命をもつ神さまです。イエスさまの歩かれた道こそ、ほんとうの人間の道です。

「霊の結ぶ実には愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」(ガラテヤ5章22、23節)。これは、聖霊がどんな実をむすぶかを記した言葉です。ちょっとむずかしい言葉でしたが、どれか一つでも分かる言葉がありますか。「喜び」「平和」は分かりますね。喜んで生きること。不平や不満ではなく、平和なところで生きるとは、イエスさまのあとに続くひとの大事なすがたです。ほかのひとが、なにか私たちに迷惑をかけるときに、すぐに怒ったりせずに、がまんするところも、聖霊がくださる実ですよ。

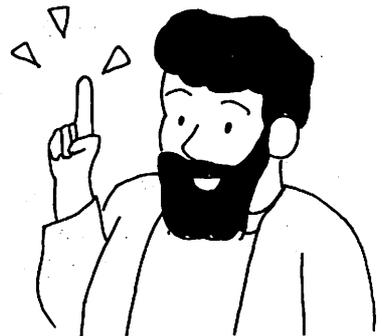
『こどもさんびか』(2002年改訂版、日本基督教団出版局)に、「主にしたがうことは」(主にしたがいは)がありますね。その1節にはこうあります。

「主にしたがうことは なんとうれしいこと
心の空 晴れて 光は照るよ
主のあとにつづき ともに進もう
主のあとにつづき 歌って進もう」

主イエスにしたがう生活は、ほんとうはなによりも楽しくうれしいことです。くらいこころも明るくしていただけますね。(小野静雄)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書13章14節

主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、
あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。



〈主題〉

イエスさまの恵みによって、神の子の完成に向かって歩いていく。

〈ねらい〉

イエスさまは、わたしたちひとりひとりをまっただき神の子としてくださることを知る。

〈展開例〉

みなさんは、新しい服を着るとき、なんだかうれしい気持ちになりませんか。イエスさまはわたしたちひとりびとりに、とっておきの、新しい服を着せてくださいます。それは、「救いの服」です。この服は、わたしたちのところが汚くても、ただ、「イエスさま、どうか、このみにくいところをゆるしてください」と、あやまるときに、与えられる「永遠の服」です。

ですから、この服をイエスさまから着せられ人は、決して、この服を自分で脱ぐことはできません。

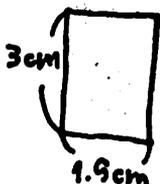
ん。かえって、この服のきよさに似合うように、すこしずつ、こころのなかから新しく、きよいものとなっていくことを、お祈りしていくように変えられていきます。ちょうど、学校に入学して、卒業していくように、みなさんも人生の入学をして、ずっと、イエスさまの学校で大きくなって、死でも、イエスさまのまたこられるときに、みにくいところもからだも、まったくきよめられて、イエスさまのよみがえられた体、神さまの栄光に満ちた体に変えられるのです。ほんとうにうれしいことですね。みんなとっしょにまっただき神の子となりましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、あなたの子として、かんぜんにきよくなることができるよう。イエスさまのとうといお名前によってお祈りいたします。アーメン。

♡ ペットボトルから ビーズ かざりをつくらう

- ① ペットボトルの真ん中のとこを切り取る
(ポコポコしているところは使わない)
- ② 油性マジックで切り取ったビーズのもとに π のような線をかく。
- ③ ビーズのものを 絵が描いてある方を上にして アクリルの土の上に並べ オブスターで 焼く。
- ④ くる、くる、と丸まったビーズをつがって くびがけ プレスリッドをつくる



← ペットボトルは
さしは
この大きさに切る。

〈ねらい〉

先週とセットで、私たちの信仰の歩みについて覚える。

〈分級教師へのアドバイス〉

ここでも、罪の赦しとの因果関係の順番に注意し、また子どもたちの人間関係に注意しなければなりません。子どもたちの人間関係は、大人の想像以上に冷たいことがあります。無理に、親切にするように「強要」すると、かえって反発を生むかもしれませんので気を付けましょう。

〈展開例〉

①今日の聖書のお話は先週の続きでしたね。先週のお話を覚えてるかな？

- ・覚えてない
- ・イエス様がお弟子さんの足を洗った

②弟子たちは、びっくりしてましたよね。そしてその後イエス様は、弟子たちに「あなたがたも互いに足を洗いあわなければならない」とおっしゃったんです。

③イエス様は、お弟子さんたちだけでなく、私たちにも同じように「私あなたがたにした通りに、あなたがたもするように」とおっしゃっているんですよ。

さあ、じゃあみんなは、お友だちに何をしてあ

げる？

- ・足を洗ってあげる

④残念でした。

イエス様がお弟子さんたちの足を洗ったのは、人が一番いやがる仕事を人のためにしてあげることが大切なことを教えるためだったんですよ。だから、イエス様のようにするというのは、みんなお友だちを大切にすることということなの。

⑤みんなは、何が友だちの喜ぶことだと思う？

- ・親切にする
- ・仲良くする
- ・おやつを分けてあげる

⑥みんなお友だちと喧嘩したり、いじめたりしないで、お友だちのことを大切にしなければいけないね。

そうやってお友だちや他の人たちと仲良くできることをイエス様も待っていてくださるんですよ。

〈祈り〉

天のお父様。イエス様が私たちのことを大切にしてくださり、私たちの罪を赦し聖めてくださったように、私たちも私たちの周りの多くの人を大切にしていけるようにしてください。イエス様の聖名によってお祈りします。

✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて(ヨハネ13:12~20)

ユダ(ゆだ)の文字を消してください。同じ絵文字には同じ文字を入れてください

ぼ	わ	♪	だ	た	♪
	だ	ら	に	も	ゆ
ら	な	ゆ	♪	だ	
ゆ	け	い	し	た	ゆ
	だ	♪	だ	が	た
い	れ	ゆ	を	い	が



✝ かんがえてみよう

質問①「たがいに足を洗い合わなければならぬ」と、おっしゃったイエスさまは、何を弟子たちに伝えたかったのでしょうか。

✝ いってみよう (しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

問 33 聖化の歩みとは何ですか。

答 神さまの子どもとして、罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。 神さまに愛されている喜びのうちに、私達も神さまを愛し

て歩みます。

✝ やってみよう

イエスさまは、わたしたちの模範となってくださいました。「あなたがたもするようにと、模範を設けたのである。」(13:15)わたしたちが、「イエスさまにならう者」ものになるために、たとえば今週どんなことをしたいか話し合しましょう。家族に、友達に、教会学校の仲間に……。どんなに小さくてもかまいません。来週の報告を楽しみにしています。聖霊なる神さまに助けられて…



〈聖書をさらに深く〉

1. 聖書の中のどのようなイエスさまのお姿にあこがれるでしょうか。説教しておられる力強いお姿、病人をいさやれる頼もしいお姿、子どもたちを抱き上げておられる優しいお姿、どれも私たちがあこがれるイエスさまのお姿です。そのような中で、イエスさまが特にはっきりと模範として示されたお姿が、この弟子の足を洗われるお姿です。そこには、イエスさまのへりくだりと、そして大きな愛がありました。これこそ私たちが見習うべきイエスさまのお姿です。実は、説教されるお姿も、いやしをされるお姿もすべて、それらはイエスさまの愛のお姿です。私たちも、生活のあらゆる場面において、このへりくだりと愛の姿に倣わなければなりません。

〈教理を響かせるために〉

1. イエスさまのお姿に倣う聖化の歩みは、生涯をかけて、しかも地上の生涯においては完成されることのない戦いの歩みとして続きます。中学生という年頃は、いい加減などころがありつつも、完全な理想を求める純粋さをも併せ持つところがあるでしょう。聖化という課題の前に、大人以上に悩むことがあるかもしれません。教理的な正しい理解をまずは確認しておきましょう（特に大教理77～81）。
2. 聖化において大事なことは、行いやふるまいである前に、内面的な事柄です。つまり、イエスさまとの人格的なふれあいの中で培われていく、喜びであり、愛であり、感謝です。特に、ハイデルベルク信仰問答は、救われた者の歩みは全生活にわたる感謝の歩みであるとしています（問86）。こうした内面的な成熟は、御言葉に親しむことと祈りから生まれてきます。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

7日（月曜日）

テトスへの手紙2章1～10節

Q. 若い男にはどのように勤めるべき？

8日（火曜日）

テトスへの手紙2章11～15節

Q. キリストが御自身を献げられたのは、わたしたちを何から贖い出すため？

9日（水曜日）

テトスへの手紙3章1～7節

Q. 神は救い主イエス・キリストを通してわたしたちに何を豊かに注いでくださる？

10日（木曜日）

テトスへの手紙3章8～15節

Q. 神を信じるようになった人々は、何に励もうと心がける？

11日（金曜日）

フィレモンへの手紙1～7節

Q. この手紙を書いているのは？

12日（土曜日）

フィレモンへの手紙8～25節

Q. この手紙は誰のことでフィレモンにお願いがされている？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書18章1～11節

〈主は無力であられたのか〉

ヨハネによる福音書18章は、主イエスの逮捕の模様について記します。松明や灯火や武器を手にしたユダヤの役人たちやローマの兵士たちが、イスカリオテのユダに手引きされて主イエスを待ち伏せし、捕らえます。

ところで、福音書に記されている主イエスの受難と十字架の死の記事を読むと、そこでの主イエスのお姿はいかにも無力で、惨めにうつります。荒れ野で悪魔の誘惑をしりぞけ、ガリラヤの嵐をただ一言でしずめ、神殿で鞭をふるって商人たちを追い出したもうた力に満ちたお姿はそこには見られず、ご自分を葬り去ろうとする者たちによくように引き回され、もてあそばれているように見えます。

しかし、主イエスはほんとうに無力であられたのでしょうか。罪人らの思うままに十字架につけられ、死なれたのでしょうか。

そうではなかったのです。この箇所を通して私たちがはっきりと知るべきことは、ひとり子を十字架につけることは父なる神の救いのご計画であり、それゆえに主イエスはみ父のみ心に従って、みずからすすんで十字架への道を歩み出し、歩み通されたのだということです。

〈「わたしである」〉

そのことは、このヨハネ18章1節以下からも明白です。

まず、主イエスはご自分の身に起こることを何もかも知っておられました(4節)。そして、ご

自分のほうから進み出て、ご自分を捕らえようとする者たちに「だれを捜しているのか」とお問いになりました(4節)。彼らが「ナザレのイエスだ」と答えると、主イエスは「わたしである」とお答えになりました(5節)。

この「わたしである」はきわめて重要なみ言葉です。原文のギリシア語では「エゴー・エイミ」です。これを旧約聖書のヘブライ語に直すなら、出エジプト記3章でモーセが神のみ名を尋ねたときに、神が「わたしはあるという者だ」(14節)とお答えになった、あの言葉です。

「わたしはある」—これはまことの神だけが語ることのできる自己紹介の言葉なのです。そのみ言葉を、主イエスはご自分を捕らえようとしている者たちに向けてお語りになったのです。すなわち、わたしは永遠から永遠に生きている全能の神であり、終わりの日に世を審判する者であって、そのわたしに今ここであなたがたは対面しているのだと仰せになったのです。

そのみ言葉を聞くと、彼らは後ずさりして地に倒れました(6節)。聖なる神のみ前で立てられる人間はひとりとしてないのです。彼らがどんな武器をたずさえていたとしても、このお方を倒すことはできないのです。

そのお方が、彼らに捕らえられ、十字架の道に従っていかれました。ご自分が十字架に死なれることが罪人を救う道であり、み父がお与えになった杯である(11節)ことを知っておられたからです。

(木下裕也)

テキスト ヨハネによる福音書18章1～11節

【単元のねらい】

本日から復活祭までは、教会暦にあわせたテキストが整えられました。本日のテキストからは、キリストの苦難は、徹底的に、私どものためであることが鮮やかにされています。教理の主題としては、『子どもカテキズム』問27の「王なるキリスト」です。苦難をお受けになられた主は、勝利の主であり、真の神よりの真の神なるお方であることを示します。子どもたちが、苦しいとき、悲しいときにもこの王なるキリストを仰ぎ、慰めを受け、前進できるように励ましてください。

「イエスさまは逃げ出さない」

イエスさまが十字架につけられる前の夜。深夜のことです。イエスさまとお弟子さんたちは、暗い夜道を、いつもの祈りの場所に歩いて行かれます。しかし、弟子の一人のイスカリオテのユダは、イエスさまを律法学者たちに売り渡してしまっているのです。そのユダの手に引かれるようにやってきたのは、ともし火や剣をもった兵隊たちです。その数は、100名はいます。たった10人程度を逮捕するために、あまりにも大勢です。律法学者も兵隊たちも、本当は、イエスさまのことが怖かったのでしょう。

暗闇の中をともし火をかかげた大勢の兵隊たちがイエスさまを逮捕しに近づいて来ました。イエスさまは、彼らを見てどうなさるのでしょうか。夜中に、たいまつを灯した大勢の人たちが近づくのですから、すぐに気がついたはずですが。普通なら、逃げたり隠れたりするのではないかと思います。ところが、イエスさまは、御自分の方から、声をかけられます。「だれを捜しているのか」。兵隊たちはすぐに答えました。「ナザレのイエスだ」。兵隊たちはイエスさまを捕まえることが一番の目的なのです。だから、その通りのことを言いました。すると、イエスさまは、こうお答えになりました。「わたしである」。

僕たち私たちは、朝、小学校や幼稚園で、先生から名前を呼ばれます。「〇〇君」とよばれたら、「はい」と返事をします。イエスさまはここで、お返事をされました。でも、このお返事は、僕たち

私たちの返事とはまったく違っていました。何故なら、イエスさまが「わたしである」と仰せになられると、筋骨隆々に鍛え上げられた大きな兵隊たちは後ずさりして倒れてしまったからです。先生は、昔、テレビで合気道の達人と呼ばれる人の術を見たことがあります。忘れられません。その先生が、一人の人をにらみつけ、「エイッ！」と大きな声とともに手をその人に向けて押し付けたのです。手はその人に触ってはいません。ところが、その人は押し倒されてしまったのです。イエスさまは、まるで合気道の達人のようです。いえ、それ以上です。100人もの人たちを、大きな声を出すのでもなく、押し倒すような手つきをするのでもなく、簡単に押し倒してしまったのです。

「わたしである」という返事の言葉は、「わたしはあつてあるもの、わたしは神である」という意味を持つ言葉なのです。つまり、イエスさまは真の神さまであると、自己紹介されたのです。

何故、イエスさまは名乗り出られたのでしょうか。それは、イエスさまがこれから起こることをすべてご存知だからです。

今、イエスさまの一番の問題は、弟子たちが一人も殺されることがないようにということでした。だからイエスさまは御自分の方から名乗り出られたのです。イエスさまは、弟子たちのためにここでも戦ってくださるのです。そのために、イエスさまは進んで、逮捕されるのです。イエスさまは進んで苦しみをお受けくださるのです。イエ

スさまは、進んで十字架につけられるのです。それは、僕たち私たちの罪を赦すために、避けることができない道だからです。イエスさまは、どんなに苦しいこと、恥ずかしいこと、悲しいこと、痛いことであっても、お弟子さんたち、そして僕たち私たちを救うためなら、祝福するためなら、いやいやではなく、進んで、喜んでしてくださるのです。

そのイエスさまは、今も、同じように、僕たち私たちを敵から守ってくださいます。敵とは悪魔です。イエスさまから離れさせよう、教会に来させなくさせる敵です。先週も守られました。そして今週も守ってくださいます。このイエスさまの後ろに入れば、イエスさまが戦い、敵に勝ってくださいます。イエスさまの後ろにつくというのは、イエスさまを救い主として信じる事です。そして、「僕たち私たちは、弱いですから助けて下さい」とお祈りすることです。それはかっこ悪いことではありません。僕たち私たちは、本当に弱いからです。けれどもイエスさまと一緒にいてくだされば僕たち私たちも強くなれるのです。

イエスさまは、兵隊たちを倒されました。けれどもそれは、ただ兵隊をやっつけるためではありません。実は、先生も、イエスさまに倒されたこ

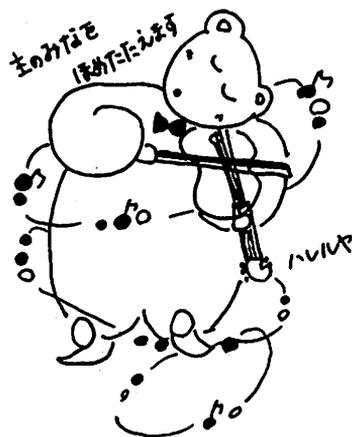
とがあります。でも、それは、今思い返すと嬉しく、すばらしいことです。何故なら、今は、イエスさまによって立ち上がらせられているからです。つまり、倒されるというのは、イエスさまを信じない生き方、イエスさまに逆らうあなたではだめだと教えられることです。けれどもイエスさまは、決して、その人を倒したままに放っておかれるのではありません。神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわして生きるように立ち上がらせてくださるのです。

今週の暗唱聖句を皆でもう一度読みましょう。「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした。」天のお父様がイエスさまに与えられた人とは誰のことですか。僕たち私たちのことです。神さまが神さまの子にしようと選んでくださったのが、僕たち私たちです。その中の一人もイエスさまから離れてしまう人、失われる人はいないと約束してくださいます。イエスさまの命がけの、激しい愛を見ているなら、イエスさまから離れられる人はいません。今週も、僕たち私たちを守るために、血を流し、勝利してくださった本当の王様、イエスさまを信じて行きましょう。お祈りを忘れずに過ごしましょう。

(相馬伸郎)

【今週の暗唱聖句】 ヨハネによる福音書18章9節

それは、「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」と言われたイエスの言葉が実現するためであった。



〈主題〉

イエスさまの言葉には罪と死の力に打ち勝つ力がある。

〈ねらい〉

力あるイエスさまの言葉を信じる。

〈展開例〉

みなさんは、イエスさまが海を上を歩いたときのお話を覚えていますか。そのとき、弟子たちは朝方、イエスさまが荒海の上を歩いて船に近づいて来るのを見て「幽霊だ」と思って、怖くて叫び声をあげてしまいました。でもこのとき、イエスさまは「安心なさい、わたしだ。恐れることはない」と弟子たちを励ましてくださったのです。

十字架にかけられるとき、イエスさまは捕らえる人たちに「わたしだ」と言いました。それは、ほんとうに、力のある言葉でした。それは、イエ

スさまご自身から「ここにわたしはいる」という言葉です。わたしたちはイエスさまのみ体を見ることはできません。でも、わたしたちの方から、イエスさまはどこにいるの、とさがしまわらくてもいいんです。そうではなくて、イエスさまの方で、しっかりとわたしたちを見てくださって、「わたしはここにいます」と言ってくさっています。

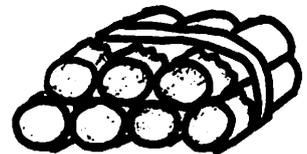
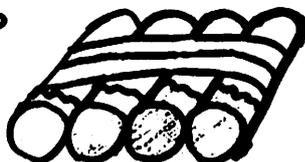
イエスさまはじつは、自分から進んで十字架に向かっていたんです。それは、ほんとうにイエスさまには、罪と死の力に打ち勝つすごい力があつたからです。イエスさまの言葉を信じましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエスさまの言葉を、その十字架への道において知ることができますように。イエスさまのとういお名前によって、お祈りいたします。アーメン。

カラフル色メガネをつくろう

- ① トイレットペーパーのしんに、いろいろな色のカラーセロハンを切って、穴をふさぐようにはる。
- ② 3.4本ならべて、ビニールテープでとめる。
- ③ つつの中をのぞいてたのしむ。(二つ重ねて遊んでも、面白い)



〈ねらい〉

イースターに向けて、イエス様の受難物語を知ることが第一の目的。神の子としての御自身の証しや、困難の中での弟子たちへの配慮を学ぶことが第二の目的。

〈分級教師へのアドバイス〉

弟子が相手の耳を落とす話しは、幾つかのバリエーションがあります。それぞれの福音書の物語をうまく補いあうかたちで理解することは悪いことではありません。しかし、全てを混ぜ合わせた一つのお話にしてしまって、それぞれの書物の主題を見失わないようにしましょう。

〈展開例〉

①イエス様がゲッセマネの園におられる時に、兵隊たちがイエス様を捕まえに来ましたよね。兵隊がイエス様を探している時、イエス様は、どうしていたかな？

兵隊たちを怖がっていたかな？ 逃げようとしたかな？ 兵隊と闘おうとしたかな？

- ・違う
- ・「私である」って答えた
- ・兵隊を倒した

②弟子のペトロさんが敵の耳を切り落としたときに、イエス様はどうしたかな？

- ・やめさせた

③どうしてイエス様は、逃げ出したり、戦ったりしなかったんだろう。

- ・わからない

- ・イエス様は優しいから
- ・イエス様は神の子だから

④イエス様がこうやって捕まって十字架にかけられることが、弟子たちや、他の人たち、私たちが救われるために必要なことだったんですよ。だからイエス様は、逃げ出さなくて、十字架につけられるために捕まってくださったんです。

⑤十字架というのは、痛くて、辛くて、苦しいことなんだけど、イエス様は私たちのために、その痛くて辛くて苦しい十字架を受けてくださったんです。このことが大切なんです。

⑥イエス様は、私たちや弟子たちだけでなく、自分を捕まえに来た兵隊たちのことまで心配していますね。争いになったらみんなが怪我をするから、それを止めているんですね。

⑦この優しいイエス様が、私たちが救うために十字架についてくださったんですね。それだから私たちも、みんなも、命をいただく者にされているんですね。

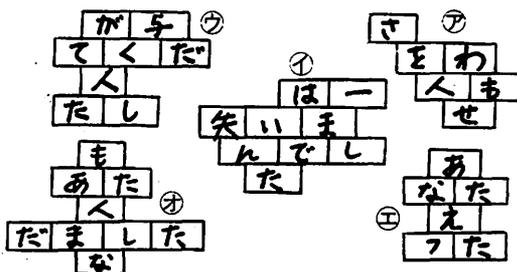
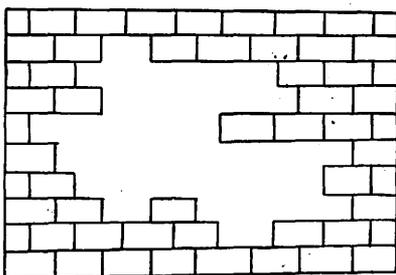
〈祈り〉

天のお父様、御子イエス・キリストが、私たちが罪から救うために、十字架につけられたこと、そのためにとらえられた時も、弟子たちや敵の兵隊たちのことを考えてくださいましたことを覚えて感謝します。どうか私たちをこのイエス様の命に生きる者としてください。イエス様の聖名によってお祈りします。

✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて(ヨハネ18:1~11)

キドロン谷の城壁がこわれています。直そうとすると、一つだけ合わないものがまじっています。それはどれでしょう。壁を直すときどんな言葉が出てくるでしょうか。



✝ かんがえてみよう

質問① イエスさまが「わたしである」と言われたとき、捕らえようとやってきた人々は、どうおぼえましたか？

出エジプト記3:14で神さまは御自分の名を、なんと言いましたか？
似ていると思いませんか。

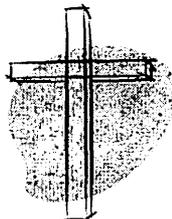
✝ いってみよう

(暗唱聖句を覚えましょう)

それは、「あなたが与えて下さった人を、わたしは一人も失いませんでした」と言われたイエスの言葉が実現するためであった。(ヨハネ18:9)

✝ やってみよう

天のお父さまがイエスさまに与えられた人とは誰のことでしょうか？ほくたち、わたしたちのことです。神さまが、神さまの子どもにしようと選んでくださったのが、ほくたち、わたしたちです。その一人でもイエスさまから離れてしまう人、失われる人はいないと約束してください。今週も、イエスさまが先頭に立ちほだかって、私たちが命をかけて守ってください。感謝して、お祈りして過ごしましょう。



〈聖書をさらに深く〉

1. 強そうで怖い人たちに取り囲まれたとき、私たちはどうするでしょうか。誰かの後ろに隠れるでしょうか。隠れても自分の名前を呼ばれたらどうでしょう。もう走って逃げるしかないかもしれません。しかし、イエスさまは、そのような状況の中で、「わたしである」と堂々と名乗り出られました。イエスさまのこの言葉は、実はこれまでも何度か出てきています。特に9章58節は、ご自身が神であることをはっきりと宣言された重要な箇所です。
2. イエスさまが堂々と名乗り出られたことは、ただ私たちにも同じようにしろということではありません。イエスさまも、剣を抜いたベトロをいさめておられます。また、この後ベトロは三度イエスさまのことを裏切ってしまうのですが、そのときに発した「違う」(18:17, 18:25)という言葉は、「わたしである」というイエスさまの言葉の否定形です。つまり、ベトロはイエスさまとまったく反対の姿をさらしてしまったのです。このときイエスさまが経験しておられることは、イエスさましか飲むことのできない特別な「杯」でした。それは、私たちの罪を赦し、また私たちを悪い力から守るための杯でした。私たちにできることは、ただイエスさまの力により頼むことです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

14日(月曜日)

ヘブライ人への手紙1章1～4節

Q. 御子は何の反映? 何の完全な現れ?

15日(火曜日)

ヘブライ人への手紙1章5～14節

Q. 天使たちは皆何をする霊?

16日(水曜日)

ヘブライ人への手紙2章1～4節

Q. 聞いたことにいっそう注意しないと、どうなる?

17日(木曜日)

ヘブライ人への手紙2章5～9節

Q. イエスが栄光と名誉の冠を授けられたのは何のゆえ?

18日(金曜日)

ヘブライ人への手紙2章10～18節

Q. イエスは神の御前において何となった?

19日(土曜日)

ヘブライ人への手紙3章1～6節

Q. イエスは誰より大きな栄光を受けるにふさわしい?

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書19章28～37節

〈「成し遂げられた」〉

ヨハネによる福音書19章28節以下は、主イエスが十字架上で息を引き取られる場面です。ここはまさに主イエスの受難の頂点であり、同時に福音書全体の頂点と見ることもできます。28-30節のわずか三節の間に「成し遂げられた」という言葉が主イエスご自身のみ言葉も含めて二度（28、30節）、「聖書の言葉が実現した」という言葉も一度出てきます（28節）。

主イエスは「成し遂げられた」と叫んで息を引き取られました。すなわち神のひとり子は、み父から委ねられたみわざをみ父のご計画のとおり成し遂げられました。み子はみ父の杯を飲み干されました。それゆえに、罪人を救う神の救いのみわざが成就したのです。

口語訳聖書ではここを「すべては終わった」と訳しています。もちろん万事休すという意味ではありません。み子のなすべきみわざが完了したということです。み子が十字架に死なれたことによってサタン力は打ち破られ、ひとり子を信じる者は罪と死の力から解放され、永遠の命を得るに至ったのです。

それゆえ十字架は何よりも神の勝利のしるしであり、神の栄光があますところなく示された場所なのです。

〈真実な証し〉

主イエス・キリストが神のひとり子、まことのメシアであり、主イエスの十字架によって罪人を救う神の救いのみわざが成し遂げられたことは、

19章31節以下に記されている主イエスの葬りの記事も証明しています。

ゴルゴタの丘には三本の十字架が立てられました。主イエスのほかにも二人の囚人が処刑されました。囚人を十字架からとりおろし、その足を折ることが慣例でした。死を早めるためです。

しかしローマの兵士たちは、ほかのふたりの囚人の足は折りましたが、主イエスの足は折りませんでした。これは、過ぎ越しの犠牲の小羊の足は折ってはならない（出エジプト記12章46節、民数記9章12節）と規定されていたからです。主イエスこそ世の罪を除く犠牲の小羊であることがこうして証しされたのです。

さらに、兵士のひとりが槍で主イエスの脇腹を刺すと、血と水とが流れ出しました（34節）。水は罪からの清めを表し、血は命そのものを表します。すなわち主イエスを信じる者たちに与えられる永遠の命です。小羊の贖いによって、信じる者たちに罪からの清めと命が与えられるとの約束が、今こそ成し遂げられたのです。

36節では詩編34編20～21節のみ言葉が引用されます。主なる神はわれらの罪をかわりに引き受け、本来われらが受けるべき悲惨と災いと呪いのすべてを身代わりに受けたもうた。それゆえわれらはいかなるわざわいが襲いかかるときにも主の守りのうちに置かれる。主は骨の一本も損なわれることのないようにわれらを守りたもう—このみ言葉は、今まさに成し遂げられたのです。

（木下裕也）

テキスト ヨハネによる福音書19章28～37節

【単元のねらい】

十字架を直に語るテキストが与えられています。ここからいくつものメッセージが聴き取れますが、一つに集中しなければ、説教はまとまりを失います。この説教例を参考にして、奉仕者御自身が聴き取ったメッセージを伝えてください。キリストの臨在を告げる説教によって、十字架の直下に子どもたちを立ててあげたいと願います。それは、聖霊のお働きによる以外にありえませんが、奉仕者だけでなく、教師会全体の祈りが不可欠です。祈る教師会を……。『子どもカテキズム』問24を参照。

「どんな罪でも、誰の罪でも赦される」

今日から受難週が始まります。イエスさまが十字架につけられ復活されるまでの一週間を覚えて過ごすのが受難週です。そして、来週の日曜日は、イエスさまの御復活を皆でお祝います。

イエスさまは、真夜中に捕まえにきた兵士に進んで捕まえられました。その夜の間に形だけの裁判にかけられて、十字架につけられてしまいました。その一部始終を見ていた弟子は、この福音書を書いたヨハネさんです。ヨハネさんは、イエスさまのお母さんマリアさんと一緒に十字架の下にいました。

イエスさまが、十字架の上で死なれたとき、その前にどのような言葉を語られたのでしょうか。「渴く」という言葉と「成し遂げられた」という言葉です。とても短い言葉です。もちろん、苦しみ、痛みのなかで、もうしゃべる力もなかったのでしょうか。短い言葉ですけれど、とても重たい言葉です。二つとも、イエスさまが十字架にはりつけられたのは偶然なのではなく、天のお父様とイエスさまが自ら進んでなしてくださったということが分かるのです。

「渴く」と言うのはどの渴きですね。もちろん、イエスさまは喉がどんなにカラカラになっておられたことでしょう。でも、これは、ただ「喉が渴いた」という意味ではありません。イエスさまは、「この水を飲む者は誰でも渴きます」と仰いました。神さまが与えて下さる命の水を飲まなければ、人間は心が干からびて死んでしまうので

す。ところが多くの人たちは神さまではなく、違うもので満たそうとして、罪を犯してしまいます。そして自分だけではなく接している人をも傷つけてしまいます。しかし、今、イエスさまは神さまから引き離され、渴いてしまわれます。それは、僕たち私たちの身代わりになって、神さまからの裁き、苦しみ、呪いを受けておられるのです。けれどもイエスさまは、神さまを呪ったり、信じるのをやめているのではありません。

イエスさまは、最後の最後にこう仰いました。「成し遂げられた」これは、どんな意味でしょうか。皆は、何か工作やプラモデルを完成させたことがあるでしょう。宿題を全部成し遂げて、やったあーと嬉しくなったことがあるでしょう。でも、自分が何かしていることを成し遂げる、やり遂げることはあっても、自分自身を成し遂げるなんてことは、人間にはできません。だって、僕たち私たちは、自分で決めて生まれてきたわけではありません。男になろうとか女になって生まれようと自分で決めませんでしたし、決められません。自分で死ぬことを決めることもできません。

でも、イエスさまは、なんでも御自分のお考えでおできになられます。イエスさまが地上でしなければならぬことは全部なしに遂げられたのです。「もう、やり残すことはない」「すべきことは全部終わった！」こう宣言されたのです。

それは、どんなことでしょうか。それは、僕たち私たちの罪を赦し、神さまの子どもにするため

の救いの御業、お働きです。イエスさまは、僕たち私たちの罪を償うために、同じ人間となってくださいました。しかもまったく罪を犯されませんでした。そのイエスさまが、十字架について命をお捨てになることが、天のお父さま、イエスさまのご目的なのです。それが、ついに今、十字架で死なれることによって完成されるのです。

「成し遂げられた」、小さなふりしぼるようなお声であったかもしれませんが。けれども、この一言は、勝利の宣言なのです。誰が勝ったのですか。神さまです。イエスさまです。それだけではありません。イエスさまを信じる僕たち私たちも勝ったのです。どうしてでしょうか。イエスさまを信じたからです。僕たち私たちは、罪を赦されたのです。神さまの子にいただいたからです。だから、僕たち私たちは、もう、神さまに呪われることはありません。裁かれることはありません。どんなに悲しいこと、つらいことが自分に起こっても、それで、神さまの愛を疑うことはできなくなりました。神さまは本当に、イエスさまに苦しみを与え、その命を奪われてしまわれたのです。僕たち私たちを救うため、愛を与えるため、命を与えるためです。信じる僕たち私たちは、神さま

から祝福だけを受けることができるのです。

イエスさまは、息を引き取られました。兵隊は、本当に死んだかどうかを確かめました。あまりにも早く死んで不思議に思ったのかもしれませんが。兵隊が槍でわき腹を突き刺すと、血と水が流れ出しました。あるお医者さんは、水が出たということは、イエスさまの死因は、心臓破裂だろうと言いました。先生は、神さまの怒りを受けたからだと思います。十字架につけられたお体の痛み、苦しみだけがイエスさまのお苦しみではありません。神さまに捨てられること、呪われること、裁かれることこそこの上ない痛みなのです。

イエスさまは、僕たち私たちを愛して、救うために、この恐ろしい苦しみのすべてを受けられたのです。だから、僕たち私たちはどんなに弱くても、小さくても、お祈りが上手にできなくても、けんかしても、お父さんやお母さんに叱れてばかりでも、罪をおかしてしまっても大丈夫です。安心です。僕たち私たちの罪は完全にイエスさまのおかげで、赦されているからです。この十字架のイエスさまに喜ばれるように一週間をすごして行きたいと思いませんか。

(相馬伸郎)

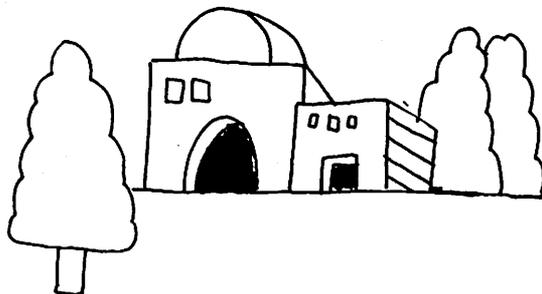
[今週の暗唱聖句]

ガラテヤの信徒への手紙 3章13節

キリストは、わたしたちのために呪いとなって、

わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。

「木にかけられた者は皆呪われている」と書いてあるからです。



〈主題〉

イエスさまの十字架のそばにいた弟子の証言。

〈ねらい〉

イエスさまの愛された弟子のあかしをありのままに信じる。

〈展開例〉

みなさんは、イエスさまの十字架を聖書から知ることができますね。とくに、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書は、イエスさまが十字架にかけられたときのことが、よく書かれてあります。ヨハネさんは、イエスさまの愛するお弟子さんの一人で、イエスさまの十字架にかけられたときにもイエスさまのことを一番近くで見ていた人です。ですから、イエスさまの小さな声も、よく聞いていたんでしょう。また、イエスさまの体を、兵士が、やりでつついたときに、血と水が流れ出たことも、目も前で見ていました。それは、ほんとう

に、かわいそうなものでした。このような、とてもかわいそうなイエスさまの姿を見た人のお話をわたしたちはよく知ることが大事です。そして、自分もまるで、その場所にいたように、感じることもとても大事です。

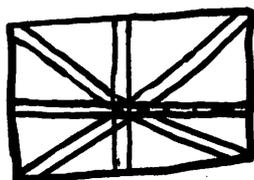
聖書は、このイエスさまのかわいようなお姿の中に、永遠の神さまの深いご計画があり、それが実現したことを伝えています。「かわく」「なし遂げられた」とのイエスさまの言葉は、ほんとうに、神さまの深いご計画がイエスさまのお体をとおして全部終わったことのアかしです。聖書を信じましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエスさまの言葉を、弟子たちのあかしをとおして、こころから信じることができますように。イエスさまのとういお名前によってお祈りいたします。アーメン。

ボールでポンポン

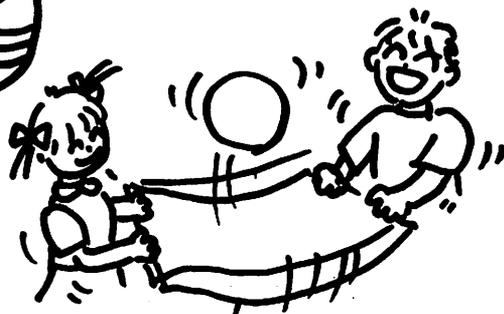
①新聞紙を1枚開き、タテ、ヨコ、ナナメにテープをはる。



②新聞紙をボールのかたちにするめ、ビニールテープでとめる。



③二人でボールを新聞紙の上ではねあげてあそぶ。



〈ねらい〉

受難の物語を読みます。キリストの苦しみを
 することを目指します。

〈分級教師へのアドバイス〉

十字架の痛みと苦しみの描写は残酷なもの
 になります。場合によっては配慮が必要な
 ことがあります。釘の大きさについて、イメ
 ージを広げるためにテントのペグなどを持
 ってきててもよいかもしれません。

〈展開例〉

①みんなは、手にトゲが刺さったことがある？

- ・ある
- ・ない

②トゲが刺さると、本当に小さなトゲでも
 痛いんですね。

じゃあ、針が刺さったことがある人？

③じゃあ、釘が刺さったことある人？

④刺でも針でも痛いのに、こ～んな釘が刺
 したら大変だよ

⑤でもイエス様は、その大きな釘を打た
 れる中で、みんなのことを考えて、「ああ、
 これでみんなのためにやることは全部
 やった。『成し遂げられた』とおっしゃ
 ったのです。

⑥イエス様が十字架につくことで、み
 んなの罪が赦され（義認）、神様に結
 びつけられ（子とすること）、罪を清
 められ（聖化）るんです。これこそ神
 様がずっと願っておられた私たちの救
 いなんです。

⑦今週は、イエス様が十字架にかかっ
 てくださった週です。私たちのために
 イエス様が苦しんでくださったこと
 をしっかり覚えなければなりませんね。

〈折り〉

天のお父様。私たちが救うために
 イエス様が十字架にかかってくださ
 ったことを感謝します。どうか私
 たちがその恵みを感謝をもって覚
 えることができるようにしてくださ
 い。イエス様の聖名によってお祈
 りします。

✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて(ヨハネ19:28~37)

市 海 外 ゲ 神 し 名 川
 ヲ 梳 掃 加 写 ク 外 休
 写 し 多

漢字の中で汚れて見えなくなっているところにカタカナを入れて、カタカナを読んでね。

✝ かんがえてみよう

- 質問 ① イエスさまは、何を「成し遂げられた」とおっしゃったのですか？
 ② 兵士は、なぜ槍(やり)で、イエスさまのわき腹をさしたのですか？

✝ いってみよう (暗唱聖句を覚えましょう)

キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖いだしてくださいました。(ガラテヤ3:13)

✝ やってみよう 受難週を覚えて、聖書を読みお祈りしましょう。

日にち	主 題	聖書箇所	チェック
21日(日)	エルサレム入城	(マルコ11:1~11)	
22日(月)	宮清め	(マルコ11:15~19)	
23日(火)	ぶどう園の農夫のたとえ	(マルコ12:1~12)	
24日(水)	ベタニヤで香油を注がれる。	(マルコ14:3~9)	
25日(木)	最後の晩餐とゲツセマネの祈り	(マルコ14:22~42)	
26日(金)	十字架	(マルコ15:21~41)	
27日(土)	墓の中	(マルコ15:42~47)	
28日(日)	復活	(マルコ16:1~8)	

〈聖書をさらに深く〉

1. 十字架上のイエスさまの言葉で、他の福音書も含めて知っているものがあるでしょうか。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ27:45)、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのかわからないのです」(ルカ23:34)など。他にもありますから、探してみましょう。
2. その中で、「渴く」、「成し遂げられた」という言葉を、どのように思うでしょうか。自由に話し合ってみましょう。
3. ヨハネによる福音書が強調していることは、イエスさまの十字架の死が、旧約聖書の預言の成就であったということです。旧約聖書以来、人類にとっての大問題は何だったでしょうか。それは、カテキズムでも学んできたとおり、罪という問題です。この問題を解決するために、イエスさまは十字架にかけられ、「成し遂げられた」とおっしゃってくださいました。そして、それは、あなたのために「成し遂げられた」ことです。まだ自分の信仰について何か悩んでいる人はいないでしょうか。イエスさまは、「成し遂げられた」と語ってくださいています。私たちはこの言葉に信頼するだけです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

21日(月曜日)

ヘブライ人への手紙3章7～19節

Q. 最後まで何を持ち続けるなら、キリストに連なる者となる？

22日(火曜日)

ヘブライ人への手紙4章1～11節

Q. 神はダビデを通して何と語られた？

23日(水曜日)

ヘブライ人への手紙4章12～16節

Q. 大祭司イエスは罪を犯された？では試練に遭われた？

24日(木曜日)

ヘブライ人への手紙5章1～10節

Q. キリストは、肉において生きておられたとき、どのように祈りと願いをささげられた？

25日(金曜日)

ヘブライ人への手紙5章11～14節

Q. 幼子では何を理解できない？

26日(土曜日)

ヘブライ人への手紙6章1～12節

Q. わたしたちは何を指して進むべき？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書21章1～14節

〈宣教の実りの約束〉

ティベリアス湖、すなわちガリラヤ湖のほとりで、復活された主イエスは弟子たちにふたたび出会ってくださり、大漁の奇跡を見せてくださいました。これは弟子たちがこの後福音宣教の働きに出ていくにあたって、主イエスが見せてくださったみわざです。弟子たちはここであらためて、福音宣教の働きは人間の経験や技術によるのではなく、神のみ言葉に信仰をもって聞き従う（6節）ときにこそ豊かに祝福されるのだということを確かめさせられたのです。

11節の「百五十三匹」という数字については、当時地中海に棲息していた魚の種類だとの見解があります。当時は地中海の周辺が全世界であると考えられていましたから、つまり全世界の人々がやがて彼らの宣教のわざを通してイエス・キリストの福音に招かれるとの大いなる祝福を示していると考えられるでしょう。主イエスのみ言葉への信仰と服従の中で、主のご委託と導きに従って福音が宣べ伝えられるなら、このような収穫を見ることができるのです。大きな希望です。

〈主の食卓を囲む〉

復活の主イエスは、弟子たちの霊の目をお開きになります。最後の食事のおりには、ほんとうには主イエスが見えていなかった彼らは、今はっきりと主のお姿を仰ぐことができます。三度主を否んだペトロがこの大漁の奇跡を見て、上着をまどって海に飛び込んだ（7節）のも、復活の主のみ前で、自分のほんとうの罪と汚れを理解したためでしょう。

さて、陸に上がった主イエスと弟子たちとは食事をとものにします。ここで配られるのはパンと杯ではなく、パンと魚です。けれどもこれはまさしく、主イエスが信じる者たちを招いてくださる聖なる食卓です。

主イエスは私たちに命を与えるために、ご自身を分け与えてくださいます。そして主の食卓にあずかる者は、文字通り主に結びつけられ、主ひとつにされるのです。それが主のみ体を飲み食いする食卓で起こることです。もはや私たちは、主はどこにおられるのかと探し回る必要はないのです。私たちとともに食卓を囲み、私たちのためにご自身のみ体を取り分けて与えてくださるとき、主はまさにそこにおられるからです。

そして聖餐の食卓においてこそ、主の弟子たちはみ霊によって開かれた霊のまなこをもって復活の主を見る幸いをとものにします。

21章4節には、夜が明けた頃、主イエスは岸に立っておられたのに、弟子たちはそれが主イエスとはわからなかったとあります。しかし12節にはこう記されています—「弟子たちは誰も、『あなたは何なたですか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。」

この朝の食卓では、弟子たちの誰もが、自分たちとともにおられるお方がどなたであるのかを知っていたのです。皆の目が開かれていて、皆が復活の主を拝する幸いにあずかっていたからです。まことに祝された食卓であったと言うほかはありません。私たちの誰もが今そのような食卓に招かれているのです。 (木下裕也)

テキスト ヨハネによる福音書21章1～14節

〔単元のねらい〕

世界中でこの喜びの聲がこだまする主日を迎えます。さまざまな楽しい復活祭のプログラムをもって、主イエスの復活を喜びましょう。何よりも、子ども礼拝式で復活のキリストの御姿を描き出し、復活者が聖霊によって今この礼拝式にも臨在しておられることを告げましょう。主イエスに何度も出会っていただきながら、なおうなだれ、後ろ向きになる弟子たちの姿。それは又、私どもの姿でもあります。牧会する主イエスの愛に燃えるお姿を感謝して示したい。『子どもカテキズム』問24を参照。

「一生忘れられない朝食」

復活祭（イースター）おめでとう！

毎週日曜日、僕たち私たちはここに来て、礼拝をささげます。それは、イエスさまが日曜日に復活されたからです。それだけではありません、あれからおよそ2000年間、復活されたイエスさまは、日曜日のたびごとに僕たち私たちを教会に呼び集めて、出会ってくださるのです。だから、世界中の教会は、この日曜日に礼拝を捧げるのです。

ヨハネによる福音書によるとイエスさまは、これまで二回、お弟子さんたちに御姿をあらわされました。最初の日曜日、お弟子さんたちは、イエスさまを見て大喜びでした。その次の日曜日には、その場にいなかったトマスさんのためにもイエスさまは御姿をあらわしてくださいました。こうして、お弟子さんたちは、イエスさまが本当にお甦りになられたことを確信したのです。

でも、今日の聖書の物語は、不思議です。お弟子さんたちの中の指導者のようなペトロさんが、ぼそつと言いました。「わたしは漁に行く。」ペトロさんは、もともと漁師でした。でも、復活されたイエスさまはペトロさんたちに、「昔の仕事に戻りなさい」などとは仰いませんでした。反対に、「これからますます弟子として、生きて行きなさい。お友だちにわたしが十字架についたのは、罪を赦すためなのだから、わたしを信じたら誰でも、どんな罪でも赦されることを伝えなさい。」こうお命じになられたのです。だから、本当は、漁をしている場合ではないはずです。ところが、ペト

ロの言葉を聞いた他のお弟子さんたちも「わたしたちも一緒に行こう」と、ついて行ってしまったのです。

漁に出るのは、もう三年ぶりです。けれどもガリラヤの湖のことなら子どもの頃からよく知っています。自信があったのです。皆で船に乗り込んで、さあ、「出発」。ところが何時間たっても、網の中には一匹も入りません。彼らは焦ってしまいます。「そんなはずはない。いくらなんでも一匹も取れないなんてあるもんか。このまま漁を終えてなるもんか。絶対に獲ってやるぞ！」必死になって、漁を続けていると夜になってしまいました。そして、とうとう一晩中働き続けて朝になってしまいました。ところがそれでも、小魚一匹も取れなかったのです。皆は、どんな気持ちがしたと思いますか。本当に悲しかったでしょう。惨めな気持ちになったでしょう。そして……、お腹もすいたと思います。

朝の光の中で、岸辺に一人立っている男性がいました。イエスさまです。ところが、弟子たちは、イエスさまだと気づきません。イエスさまは言いました。「子たちよ、何か食べる物があるか。」彼らは答えました。「ありません」弟子たちは、朝一番のお客さんだと思ったのかもしれませんが。悔しいですが、正直に答える以外にありません。

するとどうでしょう。そのお客さんが確信に満ちた口調でこう言ったのです。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」言われ

るまま、網を打ってみました。するとどうでしょう。たったそれだけで、網の中に魚がどっと入ってきました。あまりにも多くて引き上げられなかったほどです。

そのときです。ペトロが叫びました。気が付いたのです。「まだ。」ペトロは裸であったので、上着をまといました。裸でお会いするのは失礼だと思ったのです。そして一気に、海に飛び込みました。すぐにでもイエスさまのもとに行きたかったのです。泳ぎながら心の中で叫んだと思います。「イエスさま、分かりました。イエスさま、今はっきりと分かりました。私たちは漁師をしている場合ではありません。イエスさまの弟子として生きて良いのです。わたしは改めて主にお従いします。」先生は、ペトロさんは、うれし涙の中で泳いだと思います。舟に乗っていたお弟子さんたちも、イエスさまがおられる岸を目指して舟を漕ぎました。100メートルくらいですが、ペトロさんと競争です。

陸につくと、イエスさまが炭火をおこして待っていて下さいました。そして今獲れたばかりの大きなお魚を焼いて朝ごはんを食べたのです。どんなに美味しいご馳走だったでしょう。網の中には、153匹の大きな魚でいっぱいでした。一匹一匹数

えたのです。弟子たちはその数を一生忘れることができないほどに嬉しかったのです。

イエスさまが、お弟子さんたちにお甦りになられた御姿をお示しになられたのはこれで三度目です。イエスさまは、お弟子さんたちが、自分のことを、イエスさまを裏切ってしまったのだからもう弟子となる資格なんかない、自分を救せない気持ちで、心が傷ついていることをご存知で、それを放っておかないのです。本当に心が元気になるように、本当に立ち直れるように、何度でも、優しく接して下さるのです。そしてこのお弟子さんたちは、もう決して漁師にもどりませんでした。人間をとる漁師になったのです。イエスさまの弟子として、イエスさまのことを、神さまの国のことを世界中に伝えたのです。

皆さんの中で、イエスさまがお甦りになったことを信じられない人がいますか。そのお友だちは、独りぼっちでお祈りするだけではだめです。これまでのように、いやもっと真剣にこの礼拝式でお話を聞いてください。イエスさまは事実お甦りになられました。そして今、この説教を通して僕たち私たちに会って頂くのです。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書11章25節

イエスは言われた。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」。

〈主題〉

復活の日、朝の食事に招かれた「主」イエスさま。

〈ねらい〉

わたしたちのこころも体も、「主」イエスさまの恵みによって養われることを知る。

〈展開例〉

みなさんは、朝の食事をいつもとっていますか。お食事は、イエスさまが備えてくださるものです。ですから、いつも感謝していただくようにしましょう。

もともと漁師さんだったお弟子さんたちは、イエスさまの「さあ、朝の食事をしなさい」との声を聞いて本当にうれしかったことでしょう。イエスさまは十字架にはりつけにされて殺された、と思っていましたから。イエスさまから前に、十字架にかけられて殺される。しかし三日目に復活する、と何度も聞いていたのに、その言葉をこころ

から信じることはできなかったのです。でも、本当に墓からよみがえらえたイエスさまを見て、弟子たちはこころからイエスさまを「主」と受け入れました。それは、ほんとうの神さま、わたしたちの従っていくほんとうの救い主という、こころからの信仰の告白です。

今日は世界中のキリスト教会で、イースターのお祝いをしています。ほんとうにうれしい日ですね。今も、生きておられるイエスさまは、毎日、毎朝、「さあ、朝の食事をしなさい」とわたしたちを恵みの食卓に招き、また、み言葉の恵みのもとに招いてくださいます。こころも体も、主のものです。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエスさまの招きの言葉に従って、こころもからだも、主を喜ぶものにしてください。イエスさまのとうといお名前によってお祈りいたします。アーメン。

♡ ハーパー・リッターを見よう

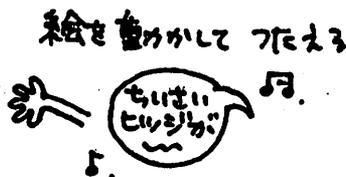
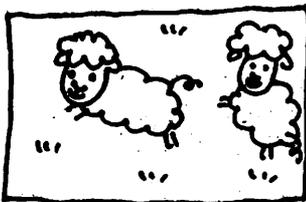
① フリース布地をパネルに はる



どうぶつ人物や どうぶつを
紙にかき 切りぬく。

③ クッキングペーパータオルに 切りぬいた糸食を のりで はって
ふちを ていねいに 切り取る

④ さんぴかを うたいながら、 また せいしよものがたりを はなしながら



〈ねらい〉

復活節の喜びを、主と共にあずかる食卓の喜びに見いだす。

〈分級教師へのアドバイス〉

イースターに聖餐式をしない場合は、翌週の話とします。①の応答は低学年では難しいでしょう。先生がリードするようにします。子どもたちが聖餐式をうらやましく思うように導くことができれば大成功です。

〈展開例〉

- ①金曜日に十字架について死なれたイエス様は、三日目の日曜日に復活されましたね。そして弟子たちのところにもいらっしゃったんですよ。ほんとですよ？ 信じられる？
- ・幽霊だ
 - ・他の人と間違えたんだ
 - ・ホントじゃない、嘘ついているんだ
 - ・夢を見てたんだ
- ②復活って言っても、幽霊じゃないですよ。その証拠に、イエス様はお弟子さんたちと一緒に魚を焼いて食べたんです。
- ③誰か別の人と間違えているのでもないです。弟子たちはイエス様を見たら、もうあらためて「あなたはどなたですか」と聞く人はいませんでした。もうみんなそれがイエス様だってことは確かめなくてもはっきりわかったのです。
- ④弟子たちが嘘をついているのでもないです。弟子たちはそのとき捕れた魚が153匹だったこともはっきり間違いなく覚えていたんです。
- ⑤夢を見てたのでもありません。イエス様はこれでもう三回も弟子たちにお会いになっているんです。
- ⑥弟子たちは本当にイエス様とお会いして、イエス様と一緒に食事をしたんです。そして、この後イエス様は、天に帰って見えなくなってしまうんですけど、その後もずっと弟子たちはイエス様とのお食事をするようになったんですよ。
- ⑦みんなもこの後の大人の礼拝で、パンとぶどう酒が配られるのを知ってるでしょ？ 聖餐式で言うんだけど。
- ・知ってる
- ⑧聖餐式の時は、目に見えないけれど、神様と私たちが一緒に食事をするんですよ。
- ⑨みんなは大好きな人と一緒に食事をしたら嬉しいでしょ。聖餐式も大好きな神様と一緒に食事だから嬉しいんですよ。
- ⑩今日も聖餐式があります。みんなは聖餐式をできないけれど、一緒に見ていてください。楽しい食事の時にありますよ。

〈祈り〉

天のお父様。今日、イースターの喜びの時を感謝します。イエス様がよみがえって、私たちと共にいてくれることを感謝します。どうか私たちがイエス様とともにいるこの喜びを感じることができるようになってください。イエス様の聖名によってお祈りします。

✂ワークシート✂

✚ 聖書をひらいて(ヨハネ21:1~14)

ここに出てくる人物の名前が記号で書いてあります。規則を見つけて名前を探してください。の

① ▲◎◆

② ○×○◎※

③ △♪◆

④ ☆△×

⑤ ♠♣♪

イエス トマスペトロ ヨハネタナエル

✚ かんがえてみよう

- 質問 ① なぜ、ペトロたちはガリラヤ湖にもどって漁をしようとしたのでしょうか?
② ペトロは、「主だ」と聞いてなぜ、海に飛び込んだのでしょうか?

✚ 聞いてみよう (暗唱聖句を覚えましょう)

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じるものは、死んでも生きる」

(ヨハネ11:25)

✚ やってみよう

ゆで卵にシールをはったり、絵をかいたり、色をつけたりします。そしてセロファンでくるんだり、透明なふくろに入れて、リボンを結びます。たくさんつくって、みんなに配りましょう。近くの「施設」に届けたり、家族や、教会に来ていないお友達にプレゼントできたらよいですね。

「イースターおめでとう！」のごあいさつを忘れないでね。なぜなら、イエスさまがおよみがえりになったので、イエスさまを信じる人は誰でもすばらしい体によみがえって、イエスさまといつまでもともに生きることができるようになったのだからね。



〈聖書をさらに深く〉

1. この箇所が出来事と同じような場面を思い出す人はいないでしょうか。ルカによる福音書5章には、ペトロがイエスさまに従うことになったきっかけが記されていますが、そのときも、魚がとれないペトロにイエスさまが網を降ろせと命じられたのでした。イエスさまは、ペトロに以前の記憶を呼び起こすような仕方でご自身を現されました。私たちも、前にあった出来事を思い出すことで、イエスさまの恵みに気付くようなことはないでしょうか。
2. 復活のイエスさまに出会う喜びは、服を着たまま湖に飛び込んでしまうほどの大きな喜びです。イエスさまが復活された日曜日の朝に教会に行くのは、復活され今も生きておられるイエスさまに出会い、礼拝するためですが、このペトロのような喜びをもって、湖に飛び込むようにしていつも教会へと向かっているでしょうか。何としてでもイエスさまに会いに行く、教会が2000年間一度も欠かすことなく日曜の礼拝をささげてきたことの原点には、そのような喜びがあるのです。
3. イエスさまは、弟子たちに食事をふるまわれました。礼拝の中でも、聖餐式は特別な時間であり、祝福です。このイースターを機会に、信仰告白、受洗の恵みにあずかる子どもたちがあれば、その祝福を祈りましょう。また、そのことを考えるきっかけの時となるように祈りましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

28日（月曜日）

ヘブライ人への手紙6章13～20節

Q. わたしたちが持っている希望は、安定した何のようなもの？

29日（火曜日）

ヘブライ人への手紙7章1～10節

Q. アブラハムはメルキゼデクにいくら分け与えた？

30日（水曜日）

ヘブライ人への手紙7章11～19節

Q. わたしたちの主は何族出身？

31日（木曜日）

ヘブライ人への手紙7章20～28節

Q. イエスはレビの系統の祭司？

1日（金曜日）

ヘブライ人への手紙8章1～6節

Q. わたしたちの大祭司は今どこに着いておられる？

2日（土曜日）

ヘブライ人への手紙8章7～13節

Q. 神が、イスラエルの家、ユダの家と何を結ぶときが来る？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

「創立20周年記念宣言と今日的意義」(三)

牧田吉和(神戸改革派神学校)

V. 生ける神学の実践的性格—『神学』の項
神学

従って、神の言葉の体系的把握すなわち神学こそ、教会の生命的形成に不可欠である。聖書に啓示されているキリスト教真理を、歴史的改革派神学の光に導かれつつ体系的に学び取るとは、われらが常に第一におく努めである。もとより神学は、単なる観念的思弁ではなく、生けるキリストが人間の現実に語りたもうみ言葉の学であって、非宗教化されつつある現代の世俗主義的社会に対して、神の主権に基づく明確な生活原理を提示することは、生ける神学の急務である。誤りなき聖書の規範により、創造主なる神の主権と、ひとり子イエス・キリストの十字架のあがないによる罪のゆるしと、聖霊による新生ときよめとに基礎をおく、キリスト教有神論を提示し実践することは、全教会が一体となって従事すべき霊の戦いである。

われらは、教会のこの神学的戦いが、われら自身の言葉によるわが教会の信条として、神と世の前に告白されることを期待する。

1. 神学の実践的性格

—『礼拝』と『神学』との関係

『神学』の項の内容に入る前に、まず叙述の取り扱いの順序という形式的な点で注目したいことがあります。それは、なぜ20周年宣言においては『神学』の項が『礼拝』の項の後に続くのかという点です。

創立宣言は教会形成との関連で「信条」の必要性を力説しました。20周年宣言も「神の言葉の体系的把握すなわち神学こそ、教会の生命的形成に不可欠である。聖書に啓示されているキリスト教真理を、歴史的改革派神学の光に導かれつつ体系的に学び取るとは、われらが常に第一におく努めである」と主張しています。私たちの場合には、これは信条の学びと直結していますから、この点

では創立宣言と20周年宣言は一つの線で繋がっていると見てよいでしょう。さらに、20周年宣言は「われらは、教会のこの神学的戦いが、われら自身の言葉によるわが教会の信条として、神と世の前に告白されることを期待する」と記し、新信条への期待を表明しています。この点でも創立宣言の路線を継承しています。

しかし、創立宣言に比べて、20周年宣言は、神学の問題をより実践的な角度から扱っていると言えるでしょう。より実践的な角度とは、20周年宣言が、礼拝論的に規定された、もっと言えば説教論的に規定された“神学”の問題を扱っていると解釈することができるからです。

『神学』の項を見ると、“従って”という言葉から始まっています。この“従って”は、正確には何を受けての“従って”なのかは宣言本文においては必ずしも明確ではありません。しかし、素直に読めば、それは、直接的には先行する『礼拝』の項との関係において、特に「礼拝におけるみ言葉の説教と聴従」との関係において語られていると理解すべきでしょう。宣言は「神学は……生けるキリストが人間の現実に語りたもうみ言葉の学」と述べていますが、“生けるキリストが人間に語りたもう”とはまさに説教の課題そのものです。従って、20周年宣言においては、神学は“み言葉のより聖書的な説教とそれへの聴従のための神学”として定義することが許されるのではないかと私自身は考えています。そうだとしますと、神学研究は机上の学ではなく、神の言葉の説教に仕えるべき学として学ばれる必要があるということです。この意味において、20周年宣言においては「神学の実践的性格」が強調されているといえるでしょう。

「生けるキリストが人間の現実に語りたもう」。このような内実を有する説教に仕える神学であれば、「非宗教化されつつある現代の世俗主義的社会に対して、神の主権に基づく明確な生活原理を提示する」ことのできる文字通り実践的な“生ける神学”でもありうるはずで

2. 20周年宣言の背景にある「神学」のあり方 についての反省

上記のような神学の実践的性格の強調には、当時の改革派教会の歴史的状況にも密接に関係しているはずで、といたしますのは、改革派教会が20周年を迎える頃に、神学校の「神学的姿勢」が激しく議論されていたからです。神学校の神学的姿勢が閉鎖的な信条主義に陥り、時代の問題と関わっていない、という手厳しい批判です。第16回大会で承認された「神学校抜本対策」においては、閉鎖的な信条主義ではなくて、時代の問題と真剣に関わる生きた神学を形成しなければならない、と指摘されています。このことは20周年以後の神学校の新しい校長に実践神学の吉岡繁先生が立てられたことにも象徴的に現れています。宣言が言及している「神学」は、何も限定的に実践神学のことだけを言っているわけではありません。そこでは神学そのものの実践的性格が強く主張されています。神学は、単なる知的満足や趣味の問題ではなく、教会に仕える学であり、み言葉の宣教に仕える学である必要があるということです。み言葉の宣教に仕える学とは、説教においては生けるキリストを提示することに眼目がありますから、神の言葉に仕えるべき学は生けるキリストとの関係がいつも意識されなければなりません。このような背景からも、20周年宣言が「神学は……生けるキリストが人間の現実に語りたもうみ言葉の学」と語っている点をよく理解できるはずで、

3. 神学の実践的性格と信徒の学びの姿勢

以上のような神学の理解は、信徒の方々の神学の学びの姿勢にも深く関係してきます。神学の体系的な学びは必要です。具体的に言えば、信条の体系的な学びは必要です。しかし、それは単なる知的満足や知識を誇るためのものではありません。むしろ、『信徒』の項で述べられているように、「信徒は各々おかれた現実の生活のただ中で、神の言葉を学ぶ」という実践的な姿勢が大切なのです。あるいは、上に述べた礼拝との関係で言えば、信徒の方々の学びは、突き詰めれば、説教の聴従のためのものだと言え言えます。み言葉を深く学び、み言葉の説教をより良く把握し、そのみ言葉に従うようになれば、それによって現実の生活の

中で神の言葉に従った生活をより良くなすことができるようになります。すなわち、宣言が主張する“神中心的・礼拝的人生観”に従って、現実の生活の中で生きることができるようになります。

信徒の学びに関しては、『信徒』の項のところで、あらためて取上げたいと思います。

4. キリスト教有神的人生観・世界観

このような神学の実践的性格は、有神的人生観・世界観との関係においても主張されることとなります。宣言は、次のように言っています。

「もとより神学は、単なる観念的思弁ではなく、生けるキリストが人間の現実に語りたもうみ言葉の学であって、非宗教化されつつある現代の世俗主義的社会に対して、神の主権に基づく明確な生活原理を提示することは、生ける神学の急務である。誤りなき聖書の規範により、創造主なる神の主権と、ひとり子イエス・キリストの十字架のあがないによる罪のゆるしと、聖霊による新生ときよめとに基礎をおく、キリスト教有神論を提示し実践することは、全教会が一体となって従事すべき霊の戦いである」。

「生けるキリストが人間の現実に語りたもう」とか、「生ける神学の急務である」という言葉がただちに目に飛び込んできますが、上に指摘しましたように、当時の神学的姿勢に対する批判が念頭に置かれています。ここでは、特に実践的性格が有神的人生観・世界観の提示の仕方にも現れている点に注目したいと思います。

第一に、実践的性格は、「キリスト教有神論」という表現にすでに表れています。単なる有神論ではない。キリスト教有神論である、という意図的な主張です。その内容は「誤りなき聖書の規範により、創造主なる神の主権と、ひとり子イエス・キリストの十字架のあがないによる罪のゆるしと、聖霊による新生ときよめとに基礎をおく、キリスト教有神論」というように表現されます。このようにキリスト教有神論を定義しますと、いよいよ礼拝が重要だということになります。キリストの臨在あふれる礼拝においてこそ“キリスト教”有神論はリアルに味わわれることになるからです。礼拝において生けるキリストが差し出されることがなければ、その意味において礼拝が生命的でな

ければ、キリスト教的有神論に基づいて生きるエネルギーは生まれません。従って、日常の現実の中で、礼拝的人生観としてのキリスト教有神的人生観に基づいて生き抜くことなどできません。

第二に、実践的性格は、「生活原理」という表現にも表れています。アブラハム・カイパーは、彼の『カルヴィニズム』の中で「世界観」という言葉を英語で「生活原理」と言い換えたわけですが、その「生活原理」という言葉を宣言も使用しています。執筆者の吉岡繁先生によりますと、「生活原理」という言葉を使うことによって倫理的な意味、生活全体を視野に入れた“実際の面”を強調したかったとのこと（『宣言の学び—創立宣言から40周年宣言まで』、神戸改革派神学校刊、37頁）。確かに世界観・人生観といえばイデオロギー、思想的な面が強く、具体性に乏しい感じがします。しかし、キリスト教有神論に立った“生活原理”と表現すれば、確かにより実践的な感じになります。これは“礼拝的人生観”という表現と一体的なものでしょう。生活原理という言葉を使用しても、必ずしも実践面ではすべてが明らかになるわけではありません。生活全体におけるキリスト教倫理の具体的展開が必要です。しかし、「生活原理」という言葉をもって言い換えたことによって、より実践的な表現になったことは確かです。有神的人生観に生きることが、礼拝的人生観をもってあらゆる領域において生きることが明確になったと言えるでしょう。

なお、宣言は、キリスト教有神論の提示と実践は“生活原理”として日常性の中で展開されるべきものであること、また、それは、教職だけではなく、「全教会が一体となって従事すべき戦い」であることも指摘しています。この関連では、信徒の役割の重要性が出てきます。この点は、『信徒』の項であらためて取り上げることにします。

以上のように20周年宣言における“神学の実践的性格”の強調をはっきりと読み取っていただけではないのでしょうか。

VI. 伝道の実践—『伝道』の項

伝道

キリスト教有神的世界観・人生観の主張と実践が、単なる文化運動にとどまることがないた

めには、信仰による罪のゆるしの福音をのべ伝える伝道が、教会によって力強く遂行されねばならない。われらは、聖霊ご自身が、み言葉をとおして直接罪人を救いたもうことを信ずるとともに、復活の主キリストが新約の教会に託された世界伝道の使命を、切に自覚するものである。教会の生命は、伝道の実践となって躍動する。

1. 伝道の強調

—特に創立宣言との比較において

『伝道』の項にもこの宣言の特徴が表れています。不思議なことですが、創立宣言には「伝道」という言葉が出てきません。創立宣言においては、やはり教派創立という事情の下で創立の理念を明確にするという点に重点がおかれています。また、その後の改革派教会の歩みも、出発したばかりの教会として、制度面の整備にエネルギーが奪われたことも事実でしょう。いずれにせよ、20周年の頃には、教会として、行き詰まりが自覚され、伝道の不振が真剣に議論されるといった状況にありました。そのような状況を背景にして、伝道の使命が強調されるに至ったことは当然と言えば、当然です。

すでに20周年宣言の枠組みとなっている恵みの契約とそれに基づく歴史観においては、福音の宣教が決定的な意味を持ちます。宣言の中で「歴史は、この契約に基づく神のご支配のもとに、キリストの教会による福音の宣教をとおして、終末的栄光へと向かいつつある」と記されているとおりです。

以上のように、20周年宣言は伝道を強調しているのですが、創立宣言との比較においては特に以下の点に注目したいと思います。

第一に、20周年宣言では、教会形成との関係で創立宣言では強調されなかった伝道を強調すると共に、創立宣言の第一点と伝道との関係を取上げている点に新しさがあります。これは、「文化命令」と「伝道命令」との関係と言っても良いでしょう。宣言は次のように言っています。

「キリスト教有神的世界観・人生観の主張と実践が、単なる文化運動にとどまることがないためには、信仰による罪のゆるしの福音をのべ伝える

伝道が、教会によって力強く遂行されねばならない」。

ここでは伝道命令の優先性が明確に主張されています。これはすでに触れました「キリスト教有神的世界観・人生観」という表現を採用したことも密接に関係しています。有神的世界観・人生観が、“キリスト教”有神の人生観・世界観として「創造主なる神の主権と、ひとり子イエス・キリストの十字架のあがないによる罪のゆるしと、聖霊による新生ときよめとに基礎をおく」ものであるならば、キリストの贖いを前提することなしに一切は無意味なものとなります。このことは、何よりもまさってキリストの贖いを中核とする福音の伝道が必要とされることを意味しています。伝道するためには、教会の生命が溢れていなければなりません（この点は、後ほど扱う「祈禱」と関係してきます）。霊的生命の溢れている教会は伝道へと躍動します。あるいは、伝道することによって教会が躍動する生命をもつことも事実です。これらすべては一体的です。このような生命力溢れる教会とその伝道の働きがあって、キリスト教有神的世界観・人生観の展開も可能になるのです。

元来、カイパーの主張したような有神の人生観・世界観は、いずれにしても「西欧キリスト教世界」を前提にした思想です。もちろん、それは普遍的な真理としての妥当性をもっています。従って、創立宣言でも、それが第一点として明確に主張されているのです。しかし、異教的な日本においては、何よりも先行させるべきことは伝道だと思えます。改革派信仰によれば、伝道だけでは“十分条件”とはなりません。キリスト教的有神論的の人生観・世界観として展開されなければならないからです。しかし、20周年宣言が主張するように、伝道は、そのための欠くべからざる“必須条件”であることを強く自覚すべきでしょう。

第二に、20周年宣言では、「全日本、否、地の果てに至るまでの伝道」、特に「世界伝道」のことが主張されていることです。これは、この宣言の枠組みをなす恵みの契約に基づく歴史理解から出てくる主張であり、その歴史理解においては終末に向けての福音宣教が中核的意味を持っています。それは、恵みの契約の仲保者である挙げられたキリストが命ぜられた地の果てにまで及ぶ伝道

の命令であり、聖霊の業としてなされるべきものです。

実は、この点は創立宣言にも触れられていました。

「この救いの福音はユダヤ人の不信を通して全世界に及びぬ。即ち神の救は旧約時代の一時的なるユダヤ民族的枠を脱して、本来の面目たる世界性を発揮し、使徒達によりて『万民の主、世界の光』として宣べ伝えられ、新約の基督教会は、斯くて全世界にその存在を見るに至れり」。

ここには新約の教会の民族性を超えた普遍性・世界性が言及されていますが、残念ながら、それが世界宣教を強力に促すメッセージには直接結びついていません。ここに創立宣言の一つの問題点があると思います。20周年宣言は、恵みの契約に基づく歴史理解において終末論的に方向付けられた福音宣教の責務、しかも世界宣教への責務を強調しました。これは、創立宣言と比較した場合、20周年宣言の一つの特徴であり、大切な点です。

2. 宣言における伝道の強調とその後の改革派教会

20周年宣言における「伝道」の強調が、その後、改革派教会の伝道面の歩みに大きな影響を与えることになりました。大会的には「宣教研究所の設置」、日本全土への伝道を意図して作成された「大会総合伝道計画案」（22回大会、1967年）、それによる表日本新工業地帯ベルト・ライン伝道計画、その具体化としての九州・福岡大会伝道などへと結びついて行きました。さらに、1972年には大会は入船尊教師の宣教師としてのインドネシア派遣を決定しています。特に入船先生のケースは初めての海外宣教のケースでした。これは20周年宣言の成果と言うべきものです。入船先生の宣教師派遣の頃には私はすでに教師になっていましたから、当時の議論を良く知っています。日本の伝道がまだ進んでいないのに海外伝道などは考えられない。「まず国内伝道だ！」という声が多かったです。海外伝道には必ずしも乗り気ではなかったと思います。今では信じられないことも知れません。しかし、当時はそのような状況でした。実際には、入船先生の海外伝道が始まったとき、逆に国内伝道も刺激され、伝道への熱心が燃やされ、

祝福を受けたと私は思っています。現在、後藤公子女性宣教師や川島利子姉の働きを列にして、海外伝道への献身者が現れていないのはかえすがえすも残念なことです。海外宣教の働きがもっと盛んになるように祈りたいと思います。20周年宣言の精神を生かす上でも、五十周年宣言の「伝道の宣言」を生かす上でも、海外宣教は大切な意味をもっていると思います。国内伝道にも必ず良い影響をもたらします。

国内伝道に関して、上に述べましたように、様々な伝道の方策が積極的に講じられました。しかし、国内伝道に関して個人的に考えさせられている一つの点にここで触れておきたいと思います。それは、CRCとの協力関係についてです。東部中会において、後には中部中会や東北中会においても、CRCとの伝道協力がなされました。東部中会では現在も進行中です。改革派教会の進展という点で、CRCの果たした役割は計り知れないものがあります。CRCとの協力伝道で次々と会堂が立ち、伝道は大変なスピードで進みました。改革派教会は成長したのです。この意味において、CRCにはどれだけ感謝しても感謝し過ぎることはないと思います。しかし、CRCとの協力による伝道の顕著な成果が、改革派教会に一種の錯覚をもたらした可能性があります。改革派教会が伸びている、という錯覚です。“改革派教会の成長は、必ずしも改革派教会の実力であったわけではないのではないか？”今になって考えさせられています。OPCにせよ、CRCにせよ、日本における働きを縮小する方向にある現在、改革派教会はあらためてその伝道力を問われているのだと思います。

同時に、海外の諸教会から派遣された宣教師を通しての伝道協力は、新しい形で考えるべきでしょう。もはや“援助を受ける”といった性格の協力は考えるべきではありません。日本の教会が経済的サポートを負担してでも、宣教師を迎え入れ、日本における伝道と教会形成に共に労する姿勢が大切です。それによって、主にあってはギリシャ人もユダヤ人もないというキリスト教会の普遍的本質が明らかにされ、また宣教師たちの教会の伝統から学び、賜物を分かち合っ、日本の教会自身がより成熟した教会となることができるからです。この意味において、近年韓国の方々を私

たちの教会の牧師として迎え入れ、協力し合う体制ができてきていることは本当にうれしいことだと思います。

3. 言葉による伝道と愛の行いによる伝道

20周年宣言は、言葉による伝道と愛の行いによる伝道を主張しています。宣言において次のように語られている点です。

「キリスト教伝道の実践にあたっては、み言葉によるのみでなく、愛の行ないにもよるべきことが、主イエス・キリストのみ教えと模範である。わが教会の伝道も、神学と愛の執事的奉仕とを一元的に実践するものでなければならない」。

この点にも20周年宣言の実践的性格がよく表れていると思います。この背後には、執事の位置の重視も含まれています。20周年の頃には、執事の働きの重要性がまだ十分には認識されていなかったように思います。今日では、執事の働きは重んじられるようになってきています。しかし、なお努力をする必要があります。阪神大震災におけるCRCの執事活動委員会の働きを直接見てその働きの充実を知らされました。もちろん、教会のスケールは違うのですが、それでももっと執事的な働きを、各個教会はもちろんのこと、大会的にも充実させるべきだと思います。さらに言えば、このような愛の行いを狭い意味における“伝道的な”観点からだけ捉えるのには個人的には不十分さを感じています。キリストの支配がキリストの愛を反映させる性格をもち、キリストの体なる教会の存在と働きはその性格を本質的に帯びるものです。したがって、教会の働きの全体が“愛の働き”であるべきです。狭い意味における“伝道”の働きだけではなく、キリスト教的有神的世界観・人生観の展開全体も、キリストの愛を反映させる性格を持たなければなりません。このような広がりにおいて、愛の問題を考えるべきでしょう。

VII. 諸教会との交わりと協力—『一致』の項 一致

われらは、キリストの教会の公同性を信ずるものとして、わが教会の使命遂行を、内外諸教会との交わりと協力とのうちに行なおうとするものである。これは、信仰の一致に基づく交わ

りであって、キリスト教真理の犠牲のもとに行われる妥協的教会合同運動とは、全く性質を異にする。われらは、靈的に一つである地上の教会が、教理と教会政治において、その統一性を可視的に表明することこそ、教会のかしらなるキリストのみ心であると思ふ。

1. 過去と現在

改革派教会は、創立宣言をもって教派創立をなし、当初の頃は様々な批判にもさらされ、とにかく教派として立つてゆくための自己整備にエネルギーを注がなければならなかったという事情がありました。そのために諸教会との交わりや共同作業ということよりも、歩み方としては“分離的な傾向”を強めたことは確かであり、避けられないことでもありました。しかし、創立後10年ほどからは、教派の歩みも落ち着き、諸教派との交流も深まっていったことは事実です。この辺りの事情は、『日本基督改革派教会史』をみていただければよく理解していただけると思います。

私個人の記憶にあることは、20周年前後には福音派との関係はかなり強いものがあったと思います。改革派の学生に関して言えば、「キリスト者学生会」(KGK)においては改革派の学生たちが指導的な役割を果たしていました。「福音主義神学会」においても改革派の先生方が中心的な働きをしておられました。さらに「日本プロテスタント聖書信仰同盟」(JPC)にも積極的にかわり、「聖書翻訳特別委員会」(委員長・松尾武)の働きの中から『新改訳聖書』も生まれ、それには改革派教会の教師たちがやはり中心的な役割を果たしました。「伊勢神宮対策特別委員会」(委員長・水垣清)からはやがて福音派の靖国神社国家護持反対運動が生まれてきました。一方、旧日基系との交わりは、「日本改革教会協議会」を通してなされ、現在も続いています。福音派との交わりに比べれば必ずしも強力なものではなかったように思います。

20周年宣言以降は、実際には福音主義諸教会との関係はどちらかと言うと、薄まって来ているように思います。福音主義神学会は関西や中部ではまだ交わりがありますが、東部ではほとんど関係が消えたと思います。「キリスト者学生会」(KGK)

との関係も、「改革派全国学生会」が組織されてからは、全体としては活発とは言えません。私自身にとってはこのことは非常に残念なことです。違った伝統の学生たちと交わりを持つことから多くのものを学びとることができ、また“井の中の蛙”状態から解放されるからです。むしろ、福音主義諸教会よりも、最近では、「日本キリスト教会」との公的な連絡関係ができ、「日本改革教会協議会」との関係も続いています。また、日本基督教団の内部の「連合長老会」関係の教会とのパイプも太くなってきていると思います。つまり、旧日基系との関係が強まりつつあります。結局は、長老主義的な伝統の肌があうということなのでしょう。

国際的な関係においては、私たちは今も「世界改革派協議会」(REC)の会員です。元々、同協議会は歴史的改革派神学に忠実な改革派・長老派諸教会によって構成されていました。しかし、同協議会の中核メンバーである「オランダ改革派教会」(GKN)が自由主義的傾向を強めたために、これまでに多くの保守的な改革派・長老派諸教会が脱退しました。その後、「オランダ改革派教会」(GKN)自身は、「国教会系オランダ改革派教会」(NHK)、さらには「オランダ・ルーテル教会」とも合同し、その合同教会のままで今もRECの会員としてとどまっている状況です。RECから脱退した保守的なグループは「国際改革派教会協議会」(ICRC)という新しい国際組織を組織しました。さらに、自由主義的な改革派・長老派諸教会を含む「世界改革派同盟」(WARC)という最大のエキュメニカルな国際組織もあります。

私たちは、現在のところ、RECにとどまりつつ、ICRCとWARCにはオブザーバーを派遣しています。率直に言って、私たちは、今後の国際的な関係をどのように考え、どのような方向に歩み出すか、緊急に問われていますし、決断が迫られている状況です。

2. これから

日本基督改革派教会は、創立宣言において「我が日本基督改革派教会は毫も所謂分派的精神に由来するものに非らざる一事なり。道に従って成る教会の公同性、一致性は我等の最も重んずる所、

我等の教会観の真髓なり」と宣言しています。この発言は私たちの教会が教派主義の壁の中にとどまり続けることを許さないものです。本来の意味でのエキュメニズムを追求しなければなりません。

この点を受けて20周年宣言も上に掲げたような一致についての宣言をしているのです。つまり「わが教会の使命遂行を、内外諸教会との交わりと協力とのうちに行おうとするものである」。さらに、「キリスト教真理の犠牲のもとに行われる妥協的な教会合同運動」ではなく、「教理と教会政治において、その統一性を可視的に表明することこそが、教会のかしらなるキリストのみ心であると信ずる」。

しかし、実際には「教理と教会政治において、その統一性を可視的に表明すること」は容易ではありません。国際的な観点では、上に見た REC の歴史経緯を見れば、それがどれほど困難かをすぐに理解できます。国内的にも簡単ではありません。ではどうすればよいのか、ということです。

基本的な姿勢として、あらためて確認しておくべきことは、教会的交わりを失ってはならないということです。エキュメニズムへの努力を放棄してはならないということです。「道に従って」・「教理と政治の一致において」というのは容易ではありませんが、その種の一致・合同の問題を常に念頭におかなければなりません。キリスト教会の公同性を告白する私たちはその努力を怠ってはならないからです。このような意味における一致は、関係する個々の教派との間で時間をかけて粘り強く詰めて行くほかありません。将来的には、このような教会合同の問題は現実的な課題になることは十分にありうると思います。しかし、その種のレベルだけではなく、様々なレベルで諸教会との広範なまた積極的な交わりを考えてよいのではないかと思います。緊密な宣教協力関係のレベルから、大会における公的な挨拶を交し合うレベル、オブザーバーのような形や情報を得るだけのレベル、様々な事業やムーブメントへの参加を通しての交わりなど、色々なレベルにおける交わりが可能です。創立宣言において明らかにされた改革派教会のアイデンティティーを堅持しつつ、同時に諸教会に対して開放的な姿勢を保つことは可能だと私は思います。特に、60周年を迎える今日、私たち

の教会は日本においてすでに責任ある位置を占めています。日本の諸教会に対して貢献すべき使命を帯びています。この意味においても、福音派から日本キリスト教団まで、カトリックやギリシャ正教まで、関心を持つべきです。また海外の諸教会との関係においても同様の広範な関心を持つべきです。海外の諸教会との関係では、すでに触れましたように、特に韓国の長老主義教会との関係が深まっていることは喜ばしいことですが、今後、さらにアジアの他の諸地域の改革派・長老派諸教会との交わりをもっと深めるべきでしょう。

VIII. 祈りと聖霊の力あふれる教会

—『祈祷』の項

祈祷

思うに、神の国の進展は、人間のわざにあらず、聖霊が人をとおしてなしたもうみわざであるゆえ、わが教会がその尊い使命をみ心にかなうて行なうために根本的に必要なのは、熱心にして絶え間ない祈祷である。わが教会は、神学と伝道を祈祷の生活において統一することによってのみ、聖霊の力あふれる教会として立ちうる。わが教会の祈祷生活が、神の恵みのもとに祝福されることを、切望する。

1. 20周年宣言における聖霊の働きの強調

20周年宣言は、恵みの契約とそれに基づく歴史観をその大きな枠組みとしていることはすでに指摘しました。それは同時に契約における人間の側の応答的服従を含むものであり、そこから『礼拝』も、『神学』も、『伝道』も、『一致』も位置付けられています。

しかし、それらの諸要素が扱われる時、鍵となる言葉は“生命”・“生命的”あるいは“生ける”という言葉であることをこれまでも確認してきました。すなわち、「教会の生命は、礼拝にある。神は、……霊的にその民のうちに臨在したもう」(『礼拝』の項)、「神の言葉の体系的把握すなわち神学こそ教会の生命的形成に不可欠である」(『神学』の項)、「生けるキリストが人間の現実に語りたもうみ言葉の学であって……」(『神学』の項)、「生ける神学の急務である」(『神学』の項)、「教会の生命は、伝道に実践となって躍動する」(『伝道』

の項)などでした。これは何を意味するのでしょうか。

20周年宣言においては、上に見られるような“生命的”とか“生ける”という表現は、要するに“聖霊による”ということの意味しています。従って、人間の応答的服従も聖霊によるものであって、そのときにこそ力あふれるものにもなるのです。例えば、20周年宣言が問題にしている教会形成の内実としての“生命的形成”においても、やはり聖霊の問題が問われています。ですから、同宣言には、「聖霊の力あふれる教会として立ちうる」(『伝道』の項)、「全教会が聖霊に満たされ」(『信徒』の項)等々という表現が見られるのです。

2. 聖霊の働きと祈禱—熱心な祈禱の必要性

事情が以上のようなものとしますと、聖霊との関係において、祈禱の問題が重要な問題として登場することは当然のことです。ですから、20周年宣言は、ズバリと次のように語ります。

「思うに、神の国の進展は、人間のわざにあらず、聖霊が人をとおしてなしたもうみわざであるゆえ、わが教会がその尊い使命をみ心にならなうために根本的に必要なのは、熱心にして絶え間ない祈禱である。」

20周年を経て、教会が行き詰まり、生命力が枯渇してきた実質的な理由は、“祈りの貧困”に求められるでしょう。この問題はさかのぼれば、改革派教会の歴史的体質の問題とも言えるものかもしれません。神学における祈禱論の欠如の問題は、私自身としてはすでに『改革派信仰とは何か—改革派神学入門』の中で詳細に扱いましたので(21ページ以下を参照のこと)、ここでは扱わないことにします。しかし、それは象徴的なことであり、やはり改革派教会において祈禱の面に弱さがあるといえるでしょう。少なくとも日本キリスト改革派教会においては弱点であり、今もその問題を抱えています。

ちょうど20周年の頃の神学校生活を思い返しますと、神学校の祈禱生活は非常に問題が多かったと私自身は思っています。朝の祈禱会にはほんの数名しか出席しない。各部屋のドアを叩いて出席を促さなければならないという事態もたびたびでした。神学生生活で自分の当番の時以外には祈禱

会に出てこないというような人も何人かいました。これと似た状況が、すべての教会ではないにせよ、かなりの教会の祈禱会にも見られるのではないのでしょうか。神学生のときに、そのような状況であって急に牧師になって祈りに熱心になるということは、通常はありえないことです。

具体的な例であるいは差しさわりのあるかもしれませんが、私は留学から帰って名古屋教会に牧師として赴任しました。名古屋教会は教理的には良く訓練された教会で、それが名古屋教会の財産であり、長所でした。しかし、問題もありました。最大の問題は祈禱会の不振でした。先生が病弱であられたこともありましたが、祈禱会は、先生ご夫婦の他、せいぜい1名あるいは2名という状態が長く続いていました。赴任した当時は、祈禱会も休会状態でした。このような祈禱会の不振と成人洗礼者が10年間に1名という伝道の状況とは無関係ではない、と私自身は判断していました。祈ることの貧しい教会が、聖霊の力あふれる教会として立つことは考えられません。力と生命にあふれて伝道に献身することなどありえないことです。もし名古屋教会がその後改善された部分があるとなれば、それは祈禱会の充実にこそその理由があったことは確かです。このことは私自身の中で強い確信として今も残っています。

以上のような反省を踏まえて、自分自身が校長になってから、神学校のスローガンとして、20周年宣言のことばである「神学と伝道の祈禱における一致」を掲げました。どこまでそれが実現できたかわかりませんが、少なくとも朝の祈禱会は私たちの神学生の時に比べて改善されていると思います。しかし、他の教派の学生や韓国の留学生に比べると、改革派の神学生は祈りの訓練の点で弱さがあるように思います。どうしても克服しなければならない問題点がここにあると思います。祈りに生きるののであれば、生ける神学を形成することはできませんし、祈ることなしに伝道の力も溢れません。生命に溢れる礼拝も実現しません。その意味では今まで語ってきたことが現実化するためには、それはただただ祈りにかかっていると思います。

そのためには祈りに関する神学も必要ですし、礼拝や生活における祈りを導く“祈禱書”も無視

することはできません。祈りを促すデポジションの奪も必要とされていると思います。しかし、各個教会においては祈祷会を充実させ、そのための工夫をなし、事毎に祈る訓練が必要だと思ひます。

IX. 信徒の学びと奉仕―『信徒』の項

信徒

わが教会のこの高く険しい目標めざして奉仕することは、神に召されたすべての信徒にひとしく与えられた光栄である。信徒は各々おかれた現実の生活のただ中で、神の言葉を学び、伝えなければならない。教会の神学と伝道とは、キリストにつらなる信徒各自が、この世にあって神の言葉に従う生活を営むときの、具体的な信仰の戦いに基礎をもつ。とくに、われらの奉仕の第一歩は、神の契約に基づく家庭の形成にある。聖別された家庭を基としてこそ、信徒は、神よりうけた各々の賜物を生かして、教会と世にあってキリストの証人として奉仕しう。

全能の神が、教会をとおして人類を救いたもうとき、ひとりびとりの信徒の中に聖霊による力を働かせて、ご自身の栄光を現わしたもうことは、使徒的教会の例より明らかである。われらもこの模範に従い、全会員が聖霊に満たされ、神がわれらの教会を祖国におこしたもうたみ旨に栄光を帰しまつることを願う。

1. 使命を担う「神の民」

20周年宣言は、創立宣言の使命論的展開である、と言われます。確かに恵みの契約を軸にしたこの宣言は、神の民の契約的義務としての責任と使命に焦点があてられています。従って、20周年宣言の使命論の中心に位置するのは、「神の民」ということになります。

20周年宣言は「信徒」という言葉を用いていますが、その言葉は本質的にはこの意味における「神の民」のことです。狭い意味における信徒のことも当然問題になりますが、出発点にあるのはこの意味です。これは執筆者の吉岡繁先生自身が「宣言の中では、教職と信徒との階級的区別は全然ありません。すべては、教職と信徒を含む全教会の使命として語られています」（『まじわり』第5巻9月号、他に14巻1月号を参照のこと）と記

しておられる通りです。つまり、キリストに結び合わされた神の民が、信徒全体であり、そこには教職者も信徒も無い。そこにあるのは賜物の相違と神の召しの違いだけです。教師はみ言葉を解き明かす務めに召されたのであり、長老や一般信徒は別の務めに召されたのであって、そこにある差は、奉仕への召しの差だけです。ここにはプロテスタントの「万人祭司性」の考えが基本にあるのです。万人祭司性は決して教会の職務論を否定するものではありませんが、職務論を問題にする前に、その根本にこの万人祭司性の確認が必要だということです。そうすると、神から与えられた使命が、教職だけではなく、神の民全体に対するものであることが明確になります。

2. 信徒の学びと奉仕

以上のことが明確になれば、狭い意味におけるいわゆる信徒の方々にも次のことを自覚していただくことになるでしょう。

「わが教会のこの高く険しい目標めざして奉仕することは、神に召されたすべての信徒にひとしく与えられた光栄である。信徒は各々おかれた現実の生活のただ中で、神の言葉を学び、伝えなければならない。教会の神学と伝道とは、キリストにつらなる信徒各自が、この世にあって神の言葉に従う生活を営むときの、具体的な信仰の戦いに基礎をもつ」。

使命が信徒全体に委ねられていることを知るとき、信徒自身が、20周年宣言がこれまで語ってきた使命、すなわち具体的には「神学」や「伝道」の使命を果たす責任とその重要性がわかります。繰り返しますが、教職の問題と言うよりも、それ以前に神の民全体にとっての根本的な問題だということです。20周年宣言は、この意味において、「わが教会のこの高く険しい目標めざして奉仕するために」、信徒ひとりひとりが、自覚的に、生活の中で神の言葉を学び、みずから伝道することを求めています。

神の言葉の学びという点で、私にとりましてはオランダ留学中の体験は衝撃的なものでした。衝撃的な体験とは、信徒の人たちの“教理的訓練の質の高さ”です。ご存知のようにオランダでは信仰告白に至るまで数年にわたって契約の子の教育

が集中して行われます（このことについては、すでに本誌で詳細に紹介させていただきました）。信仰告白の後も、毎週夕拝あるいは午拝で「ハイデルベルク信仰問答」の説教を生徒聞き続けることとなります。その結果、教理的訓練の質はきわめて高いものになります。70～80歳の方々が茶の間で神学の議論を戦わす姿を実際に見て、本当に驚きました。これは大げさなことを記しているわけではなく、事実です。このような教理的訓練がなぜ大事なのでしょう。それによって、信徒自身が日常生活の中で神の言葉の真理に従って自ら判断して神の民として生きることができるからです。また、自分たちの信じていることを自分の言葉で説明できるようになるからです。また、何が聖書の教理なのかを知っていますから、聖書の教会が形成されることとなります。さらに、説教の理解力を高めめますから、説教の質の高さをも生み出すこととなります。

日本の場合には、もちろん状況が異なります。しかし、異教的環境の中でキリスト者として生き抜かなければならない日本の信徒は、より一層神の言葉の学びが必要とされます。神の言葉の真理に対する深い理解と確信がなければ、異教社会の中でキリスト者としてしっかりと歩みをなすことはできません。自分たちの信じていることを伝えることもできません。日本の場合には、一人一人の信徒が神の言葉によってよく訓練されることが絶対的に必要です。信徒は、訓練の行きとどいたキリストの兵士であるべきです。

20周年宣言は「教会の神学と伝道とは、キリストにつらなる信徒各自が、この世にあって神の言葉に従う生活を営むときの、具体的な信仰の戦いに基礎をもつ」と言っています。確かに、信徒の人たちが、神の言葉を学び、伝道し、そのようにして神の言葉に従う生活を営むという具体的戦いの中に、教会の神学と伝道の基礎があります。すなわち、生活に根ざした信徒の方々の神学の学びは、私たち教師の神学の質を問うこととなります。結果的には、観念的思弁の神学ではなく、神学を“生ける神学”にすることに大きく貢献します。同時に、教職の説教を生命あるものにするために貢献することにもなります。この意味において、信徒が「各々おかれた現実の生活のただ中で、神の

言葉を学ぶ」ことは本当に重要なのです。

3. 契約の家庭の形成

また、20周年宣言が契約の家庭の形成について次のように記していることもきわめて大切です。

「とくに、われらの奉仕の第一歩は、神の契約に基づく家庭の形成にある。聖別された家庭を基としてこそ、信徒は、神よりうけた各々の賜物を生かして、教会と世にあってキリストの証人として奉仕しうる。」

上に述べたような使命を、信徒の方々が果たすために、キイ・ポイントになるのはやはり「契約の家庭の形成」です。特に、現在の状況において契約の家庭の形成が困難になってきていることは一大問題と言わなければならないでしょう。契約の家庭を形成するためにはクリスチャン同士の結婚が必要とされますが、クリスチャンの青年男子が少なく、契約の家庭を形成することが困難という事情にあります。そうすると、未信者との結婚という事態も生じるわけですが、そのときどのように牧会的配慮をするのか、という点も問題になります。あるいは、契約の家庭を築くことができたとしても、家庭礼拝をどのように確立するかという問題に直面します。子どもたちが中学校や高校に上がったときに、時間的にも家族一緒に家庭礼拝することが難しくなってくるという状況がでてくるからです。また家庭礼拝を実施するための、“家庭礼拝のしおり”のようなふさわしい指導書をどのように生み出してゆくのかという問題も出てきます。さらには、教会が契約の子の教育にどのように取り組むのか、という重要な問題も出てきます。

20周年宣言は、創立宣言の使命論的展開と特徴づけられました。その使命を担う中核は契約の民としての信徒です。その使命を担う信徒の基盤となるのは契約の家庭です。従って、契約の家庭の形成に失敗すれば、20周年宣言全体の使命論的展開は困難になります。ですから、契約の家庭の問題は決定的と言ってよいほど重大な問題です。しかし、その契約の家庭の形成が危機に瀕しています。ある意味で、改革派教会の直面する最大の問題がここにあると言っても過言ではありません。

問題を解決するには、子どもたち、青年たちへ

の伝道、契約の家庭の形成の努力、家庭礼拝の確立、契約の子どもたちの教育と訓練……等々、一般的な問題の見直しと取り組みが必要になります。ある意味で、これらの問題全体を“教育”という大枠で括ることもできます。この点で、最近大会的にも教育の問題が本格的に論じられ、取り組み始められていることは喜ばしいことです。祈りをもってその成果に期待したいと思います。本誌のような教会学校教案誌も、この関連できわめて重要な意味を持っています。

契約の家庭の形成は、これだけを一つのテーマとして何回かにわたって論じなければならないほど、重要な問題ですが、ここではここまでのところまでとどめておきます。

終わりに

これまで「創立20周年記念宣言とその今日的意義」という主題で、三回にわたって、20周年宣言を取上げて考えてきました。客観的な叙述というよりも、20周年世代として当時感じたこと、その

後感じてきたこと、そして今感じ考えていることを筆の走るまま、遠慮なく記してきました。主観的な色彩の濃いものになったかもしれません。20周年宣言について記すことは、少なくとも私としては自分自身を語ることと一つことなのです。あるいは、このような取り扱いも時代の証言のような意味をもつものかもしれません。記したことが、何らかの意味で読者の皆さんにお役に立つことを願っています。

いずれにせよ、20周年宣言は、現在においても改革派教会に大切なものを指し示し続けていると思います。改革派教会のこれからの歩みに、確かな方向性を与えていると確信しています。個人的には、神学に携わる者として、20周年宣言が提示する恵みの契約による歴史観を軸にした聖霊論的・終末論的展開を神学的にさらに深めたいと願っています。

20周年宣言は、私にとりまして、今も魅力ある宣言であり続けています。

日曜学校 2005年度カリキュラム (2005年4～6月分)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
4月3日 進級式	神の民の祈りの家	問34	ウ告白25章
		マタイ18:18-20	マタイ18:20
信仰の歩みは神の民と共なる歩み。信仰の友が与えられていることを喜ぼう			
10日	キリストの体なる教会	問34	ウ告白25章
		エフェソ2:14-22	エフェソ1:23
キリストに結ばれて互いを受け入れ、感謝のうちに共に生きよう			
17日	再臨の約束	問35	ウ小28、ウ大56、ハイテ52
		使徒言行録1:6-11	使徒言行録1:11b
天に昇られた主イエスは再び来てくださる。その約束の希望に生きることに			
24日	再臨に備える	問35	ウ小36、ウ大79-83、ハイテ52
		マタイ25:1-13	マタイ25:13
再臨を喜んで待ち望み、地上の生を大切に生きることにも励もう			
5月1日	死のときの祝福	問36	ウ小37、ウ大85、86、ハイテ42
		ルカ23:39-43	ルカ23:43
主イエスに結ばれて死ぬことの幸いを知り、死の恐れを克服することへ			
8日 母の日	復活のときの祝福	問36	ウ小38、1、ウ大87、88、90、1
		ヨハネ3:1-3	ヨハネ3:2
主イエスと完全に一つとされ、御子に似た者とされる幸いを知ろう			
15日 聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	—	—
		エゼキエル37:1-14	使徒言行録2:4
神の霊が人を生かし、神の民を生み出す。神の霊に生きる教会として歩もう			
22日	感謝—神の求め	問37	ウ大97、ハイテ2、86、90
		ルカ17:11-19	ルカ17:19
律法主義的な生活ではなく、福音的な感謝の生活を生きよう			
29日	感謝としての服従	問38	ウ小2、39、ウ大91、97、ハイテ91
		ヨハネ21:15-19	ヨハネ21:19
主イエスへの感謝と献身に生きること、喜びに生きる道があることを知ろう			
6月5日	十戒—感謝の道標	問39	ウ小40、41、ウ大93-98、ハイテ92
		申命記6:16-25	詩編103:2
十戒は神から神の民への愛の贈り物、愛の言葉。神の愛にこたえて生きよう			
12日 花の日	神と人への愛	問40	ウ小42、ウ大98、ハイテ93
		マルコ12:28-34	レビ19:18b
神の愛の言語化が十戒。神と人への愛に生きることへの招きにこたえよう			
19日 父の日	贖いのみわざ—過越	問41、42	ウ小43、44、ウ大101
		出エジプト12:21-27	出エジプト12:9
十戒の根拠である神の御業—過ぎ越し—を思い起こそう			
26日	過越の成就—キリスト	問41、42	ウ小96、ウ大168、ハイテ75-78
		ヘブライ9:11-14	ヨハネ3:16
贖いの御業を成就して下さった神の小羊キリストをたたえよう			

日曜学校 2005年度カリキュラム 年間計画

(2005年4月～2006年3月)

2年サイクル第2年(子どもカテキズム問37～85)

月 日	教会暦・行事	主 題 (仮 題)	子どもカテキズム
2005年			
4月3日	進級式	神の民の祈りの家	問34
10日		キリストの体なる教会	問34
17日		再臨の約束	問35
24日		再臨に備える	問35
5月1日		死のときの祝福	問36
8日	母の日	復活のときの祝福	問36
15日	聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	
22日		第三部 生活の道 一、感謝について 感謝……神の求め	問37
29日		感謝としての服従	問38
6月5日		第三部 生活の道 二、感謝に生きる道 十戒……感謝の道標	問39
12日	花の日	十戒の要約……神と人への愛	
19日	父の日	贖いのみわざ……過ぎ越し	問41, 42
26日		過ぎ越しの成就……キリスト	問41, 42
7月3日		第一戒 神を神とする	問43, 44
10日		第二戒 刻んだ像	問45, 46
17日		第三戒 神の御名	問47, 48
24日		第四戒 主の日の安息	問49, 50
31日		第五戒 父母を敬う	問51, 52
8月7日		第六戒 殺人の禁止	問53, 54
14日	(平和)	平和について	
21日		第七戒 姦淫の禁止	問55, 56
28日		第八戒 盗みの禁止	問57, 58
9月4日		第九戒 偽りの禁止	問59, 60
11日		第十戒 むさぼりの禁止	問61, 62
18日	(敬老の日)	神のおきてを喜ぶ生活	問63
25日		律法に背く人間	問64
10月2日		第三部 生活の道 三、教会に生きる道 教会に生きる (一)	問65
9日		教会に生きる (二)	問66

月 日	教会暦・行事	主 題 (仮 題)	子どもカテキズム
2005年			
10月16日		信仰と悔い改め	問67
23日		恵み的手段	問68
30日	宗教改革記念日	生ける神の御言葉	問69
11月6日		御言葉への聴従	問70
13日		礼典	問71
20日		洗礼	問72, 73
27日	アドベント	聖餐	問74, 75
12月4日	アドベント	待降節	—
11日	アドベント	待降節	—
18日	アドベント	待降節	—
25日	クリスマス	降誕祭	—
2006年			
1月1日	新年	一年の感謝と新たな始まり	
		第三部 生活の道 四、祈りに生きる道	
8日		祈りとは何か (一)	問76
15日		祈りとは何か (二)	問76
22日		祈りのお手本……主の祈り	問77
29日		呼びかけ	問78
2月5日	(信教の自由)	第一の祈願	問79
12日		第二の祈願	問80
19日		第三の祈願	問81
26日		第四の祈願	問82
3月5日	レント	第五の祈願	問83
12日	レント	第六の祈願	問84
19日	レント	頌栄	問85
26日	レント	アーメン	問85

編集後記

●卒園、進級おめでとう！イエスキリストの愛と共に！（宮武輝彦）。●実際に使った方から、より良いものにするためにアイデアを教えてください（長田詠喜）。●新会堂に移転して初めて、地域の小学校校門で、教師たちがチラシを500枚配りました。3人の子どもが来ました。まだまだ伝道の手段はあるのですね（相馬直子）。●中学生たちは一年で大きく成長します。私も少し

は成長できているかと考える毎日です（石原知弘）。●子ども伝道と信仰継承のために弊誌が用いられますように、祈りを込めてお届けします（相馬伸郎）。●ブッシュ再選に思う。教会の信仰が政治を変えるのですね（辻幸宏）。●教案誌が各教会における信仰継承の働きの一翼を担えることを願っています（春名義行）。

（あとがき）

第16号をお届けいたします。四年目を終えることがゆるされました。つたないわがを継続させ、祝福してくださっている主の御名をあげます。また、執筆者の方々と本誌を用いてくださっている皆様のご協力に心からの感謝を申し上げます。今号では、小学科上級がワークシートのかたちで提供されています。新しい試みですが、いかがでしょうか。

次号から新しい年度を迎えます。『子どもカテキズム』に基づくカリキュラムの二年目となります。成人科は、今号で牧田吉和教師による20周年宣言の解説が終わり、次年度は、木下裕也教師による「日本プロテスタント・キリスト教史」を予

定しています。また、「日曜学校教師の心得」を連載し、教会学校教師の学びと訓練のための資料を提供したいと願っています。

次年度もよろしく願っています。

（イラストなどの募集のお願い）

本誌に掲載する工作例、イラストなどを募集しています。皆様の豊かな賜物の産物を、ぜひご紹介ください。工作例、イラストなどを募集いたしますので、お寄せいただければ感謝です。分級のアイデア、工作のタネ、漫画などの投稿も大歓迎です。詳しくは、編集部までお問い合わせください。

Soli Deo Gloria!

☆ 本文執筆者一覧 ☆

聖書研究

春名義行（津島教会牧師）
辻幸宏（垣伝道所協力牧師）
望月信（高蔵寺教会牧師）
木下裕也（豊明教会牧師）

カテキズム研究

吉田隆（仙台教会牧師）
岩崎謙（神港教会牧師）

説教展開例

三川栄二（稲毛海岸教会牧師）
小野田雄二（上野緑ヶ丘教会牧師）
木下裕也（豊明教会牧師）
吉田謙（千里摂理教会牧師）
小野静雄（多治見教会牧師）
相馬伸郎（名古屋岩の上伝道所宣教教師）

分級展開例

幼稚科・宮武輝彦（芸陽教会牧師）
幼稚科作画・名古屋岩の上伝道所
日曜学校教師会
小学科下級・長田詠喜（高松東教会牧師）
小学科上級・相馬直子
（名古屋岩の上伝道所日曜学校教師）
中学科・石原知弘
（北神戸キリスト伝道所宣教教師）
成人科・牧田吉和（神戸改革派神学校校長）

表紙イラスト

山口英俊（豊明教会長老）

本文イラスト

平尾信子（高蔵寺教会教会学校教師）

☆ 編集 部 ☆

相馬伸郎 (長) 名古屋岩の上传道所宜教教師
木下裕也 豊明教会牧師
辻幸宏 大垣伝道所協力牧師
春名義行 津島教会牧師
望月信 高蔵寺教会牧師

定期購読・バックナンバーの申し込み

春名義行 〒496-0038 愛知県津島市橋町2-30 津島教会
Tel/Fax. 0567-26-4221

郵便振替口座 00890-2-148183 「伊藤治郎」

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2005年1・2・3月号 (季刊)

第16号

2004年11月28日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部
名古屋岩の上传道所 宜教教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701

編集・印刷 株式会社あるむ

〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F

頒価 900円 (本体価格)

